

〔表紙〕

義久公
義弘公
天正十四年 自八月
至十二月

後編
舊記雜錄 卷十八

171 「御文庫廿二番箱五卷中」

今度出勢之儀、秋月種実任懇望候之处、筑紫之事、容易致退治散鬱憤、満足此時候、然者就右之儀、使書殊御丹精之卷數并織筋到來、畏悅珍重候、弥奉仰 御神慮之外無他候、恐々謹言、

八月二日 義久

彦山 座主坊

〔末紙ニアリ〕
〔御返書案文〕
彦山座主坊 於八城

172 「御文庫廿二番箱五卷中」義久公御譜中案文有之

〔天正十四 高知尾ニ而甲斐長門入道宗攝へ從御前御感狀被下〕
〔御譜ニ以上朱カキ也〕
從方角之廻文即被達露顯儀、眞実之心底珍重々々、倍於被遂忠懃者、別而可屬感懃事、聊不可有渝變者也、仍狀

如件、

〔朱カキ〕
〔天正十四年〕八月三日

甲斐左近將監殿

甲斐長門入道殿

173 「義久公御譜中」

天正十四年八月、我之將等在岩屋者、欲立花城於入手裏、差使僧達左近將監宗虎後稱宗茂、曰、汝降來是、否則當發軍衆塵黨族也、宗虎報曰、老父紹運守義理遂戰死、吾今捐義保生、非勇士之所以深恥乎、庶幾有精兵之俟來攻而已、我之諸將聞此言云、是實義理勇士、若徒擊此人快我心、則背正理以猶豫矣、又立花城共三顆、其中守二顆之將云、有得所帶者、忽弒宗虎可候旗下、諸將告之於八代、同月十六日也、吾答曰、昇領地於弒主人可屬旗下者、不嫌我心、以欲昇逆徒之地與宗虎爲降參可乎、不然先各可歸陳云尔、

174 「藤野家文書之内」 「義久公御譜中正文有之トアリ」

(本文書ハ一七五号文書ト同文ニツキ省略ス)

175 「御文庫拾六番箱四卷中」

三澤村八十町之事、爲下地職被仰付候、外聞奉忝存候、
收納之儀聊不可存緩候、猶重疊可得實意候、恐惶謹言、

天正十四年^{丙戌}

八月廿日

内田善兵衛尉

実久(花押)

税所新介殿

進覽

176 「義久公御譜中」

天正十四年八月廿四日、八代總持院歸於立花來謂宗虎之
言曰、居城自若可屬旗下、不然不得下城、由是秋月氏副
一使伴僧、傳懇意於宗虎云、速下居城屬島津氏、則以早
良郡稱荒平之名城、可立花之爲返地者必矣、宗虎報曰、
有不能去當城之故、上達羽柴殿定稱號之地也、且復頃從
中國有來救兵之約、仍出質人、由是贈鐵炮已下兵器、以
不能下居城兼左右云尔、於茲乎秋月氏曰、薩摩方軍衆可
有歸陣、於立花一城者、草野氏・星野氏・原田氏・宗像
氏與自己同意、則容易可入手裏云云、由是薩摩軍衆悉所

以歸陣也、

177 「御文庫廿二番箱五卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

「天正十四年八月廿七日、從御前武庫棟へ御神文 於八城 案文」

起請文之事

當家名代之儀頼入之辻、至義珍聊無別意事、因茲自然讒
言之段、於傳聞者、無疑心、互邪正之儀可申顯事、
右之旨若有違犯者、

178 「義久公御譜中」

天正十四年八月廿九日、欲伏針於豊後州中、使川田駿河
守調之、并尻伊賀守歸日州帶之贈吉利氏、伏之於敵地也、
此日和田玄番助田尻歸來云、筑紫上野介廣門又背當家討
入五个山也、今也患不戮廣門、而無甲斐矣、
天正十四年九月朔日、去月廿七日筑紫上野介廣門、忍出
忽乘入一嶽、翌日乘取勝尾矣、蒲池氏吾旗下之士卒、當
日警衛之際有此變事、非迷惑言之可得而述之旨注進也、
又西牟田氏注進曰、雖有安樂平警衛之令、與霜臺爲私談
替高良山、而後歸宅矣、彼城亦守兵少寡也、和仁・邊春
・三池・小代氏各同事注進也、且復有稱若杉小壘、立花

氏陷之、星野九左衛門鎮胤、當番之故不怠防禦、而遂戰死也、由是使諸將爲評議、言衆口一同曰、熟慮廣門之所背、非一人之所意歟、殆乎託其根於龍造寺氏也、然則送數月於肥前州、措豊後發向如之何、是以止筑紫退治、偏欲發向豊後也、

179 「義弘公御譜中」

天正十四年八月、改忠平稱義珍、是亦自 義昭公方以去年十一月之書、賜義之一字故也、

天正十四年丙戌、令仙鏡房及肥後地輩勘丞者、又新納武藏守忠元之陪臣中馬源丞、運謀於入田氏、此時忠元互執與書簡云云、由此其後入田氏使吉良甲斐守・阿南勘解由者來八代矣、忠元奏之、義珍見兩使也、

天正十四年、使濱田民部左衛門・山口大藏忍往豊後督迫、達志賀播磨守・同姓道易之歸心於薩摩運謀略窺見岡城、而所以豊後發向之爲評議也、

天正十四年、新納武藏守忠元、使檜木右京亮・中馬源丞謀豊後之士志賀道易、道易應諾、而後教大塚右馬助・新野新介達可屬旗下之旨、以故俾野村與三右衛門尉・忠元之陪臣尾崎彥兵衛・中馬源丞往志賀之城、納兵道針也、

180 「上井覚兼日記」

八月

一朔日、早朝宮之路を打立候而、灰塚之町にて暫憩候而、破籠共各寄合受用申候、(鎌田兼政)鎌源痛候間、爰彼にて養性仕候て召烈候間、此晩長田と云処ニ留候、

一二日、早旦永田を打立、大津山町ニ良久休居候、其刻津志田名寺社家・諸百姓迎ニ來候、酒肴など持來候、衆中寄合候て賞翫申候、醫者正清來候而藥共用候、芎歸湯受用候也、從夫、江田と云処を通過候砌、(義弘)武庫様より御使僧被下候、各辛勞申、岩屋輒落去候、目出おほしめさる、由也、忝由申上候、彼御使僧ハ御陳のこ

とく通也、又それよりすこしこなたにて、(義弘)太守様より御使僧被下候ニ行合申候、悉地院也、是も御同前御意趣にて候、彼方茂岩屋へ通候也、此晩ふめの町へ留候也、

一三日、早朝打立候、隈本と宇土之間之若宮と申ニ、遙久やすらひ養性共申候て、漸川尻ニ留候也、

一四日、梁瀬右近將曹、我等手負候由被聞、御陳へ可來覚悟候て高瀬へ被來候、上井右衛門尉へ行合候ニ、(兼也)此方のことく歸陳之由候条、追付たる由候て被來候也、

從夫急候而、豊福にて暨やすらひ、八城へ着候、宮之路ニ暫やすらひ候て、日暮候て宿元へ着候、其故ハ、乗物にて餘ことくしく候間、如此候、宮之路まで上井神五郎(目兼)、武庫様より御使ニ被來候、平田左馬助殿(増宗)も宮之路迄迎ニ御出候也、宿元へ着候へハ、本田野州(領貞)より、此度辛勞申候、疵如何候哉、自身御座候すれ共、定而長路ニ弥氣分共可惡候間、無其儀之由、使にて承候也、△

一五日、平田左馬助殿を御使にて 上意候、今度岩屋城詰、無比類辛勞申之由、肝心ニ被思召候、殊ニ被疵候、涯分養性可仕之旨也、忝之由申上候也、本田野州御座候て、疵之跡見廻被成候也、城攻之様子共物語申候、又日向衆詰口岸高く候て、各粉骨之式共細く申候、衆盛無人數にて候つる由共、委申候也、諸所之衆、疵見廻ニ御座候、不及書載候、又平左を御使にて、御陳之様跡、寶滿・立花之儀共御尋被成、紹運(高橋領)妻子取候由候、一定にて候哉之由共御尋也、又筑後・筑前表、爰彼御公領之由候て、札立候由被聞召及候、如何様見申て候らん之由候、御返事、寶滿・立花ハ未相支候、寶滿之事ハ五日とハ支申ましき在所にて候、定而近く可申入

候、立花之事ハ遠より見申候間、一向不存候、去廿九日、彼表へ人數被指出候へ共、敵一人も不出合候間、無何事軍衆被罷歸候由、某忤者跡より參候者申候由申上候、紹運妻子ハ一定取候、寶滿も立花も、紹運子共格護申候間、母之書狀にて計策有へき由出合候通申上候、御公領之事、菟角出合をハ不承候、不紛路頭ニ御公領誰人存知之由共札ニ有由、衆中なと見申て物語共被申候つる由、申上候也、武庫様拙宿へ御光儀被成、臥床近御座被成、暫疵之跡共上覽被成候、寔く忝共申上候也、町田羽州御座候て、疵見廻被成候也、典厩よりも御使にて、此度別而辛勞之由被聞せ候、殊手負申候、如何之由承候也、畏入之由申候也、△

一六日、新納武藏守殿・川上參川守殿同心ニ疵見廻ニ御座候、暫城攻之様跡共被尋候間、委物語申候也、川上へハ於筑紫表子息戰死被成候、尤自身參、左様之事等可申を御陳へ急候て罷通故無其儀候、▽市成掃部兵衛尉を頼申候て、其儀申て候つる、相屆候哉之由申候、委被聞せたる由共也、惠六と云疵醫者 武庫様被召烈候、其仁拙者養性之由候間、種々樂等あたへられ候也、

鎌源へも同前候、

一七日、從 武庫様、鎌源歸申候て養性可然之由候間、

本田野州へ御内義申候てかへし候也、從 太守様、田

代刑部(繪考)少輔殿を以、拙者疵如何候哉、養性肝要ニ被思

召之旨也、忝之由申上候也、△

一八日、伊地知伯州(重考)にて、久倍・親貞まで申候趣、筑前

表賣滿も下城之由候、然者彼表之事、近と御隙明へく

候歟、彼表之軍衆爰元へ參着候ハ、定而豊州入之御

談合たるへく候、去春已來御評定之様ニ、御兩殿肥

・日へ御發足候て、御衆盛等も其ことく候ハ、不及

申候、若又此口之路次續、あつさ越にハ増候て可然由

申候間、御兩殿入田口などへ 御出張被成、日州口

ハ搦手之様ニ、中書(家久)へ御頼被成など、若く出合候ハ、

是者能く中書御談合被聞せ候ハてハの事に候、其外吉

利殿境目ニ候間、是も承被成候てこそ可然存候、兵船

等之儀、彼是御細談可有候、筑前表之衆此方へ被參候

てより、中書へ御談合と候共、遠方之事候条、可難成

候、先く中書・吉利殿參上可有由、被仰越候て歟可然

候ハんすらん、又御使にて御存分共聽せられ候する歟、

菟角各御校量之前たるへく候へ共、日向口之儀別而行

候故、存分申入由申候也、▽伊伯廳而承事ニ拙者存分、

寄合中へ被仰理候、尤候間、上聞可然之由候間其分

候、是者不思召寄事候、尤之様候、早く中書・吉利殿

參上之由、被申越候て可然之旨候条、久倍・親貞書狀

被認候、拙者前より持せ可申由候間即申付、伊地知大

膳亮、如日州歸候也、

一九日、惠六被來、脉とられ候て藥預候、煎法等委書載

候也、種く養性共也、宮崎より拙者手負候、無心元由

候て各來候、恭安(上并兼兼)より富山勘解由左衛門尉、御使ニ預

候也、

一十日、三官來候て脉診(診)候、兼日ニ無相吳候、疵之養性

まで可然之由申候也、此日も惠六被來、疵たてなど候

て藥被付候也、此晚從久倍、舍弟源右衛門尉殿にて承

候、御内義にて候、拙者若く氣分能候ハ、はやく

罷出候へかし、遙久無御見參候由候間、心地可然候ハ

、明日も指出申候て肝要之由承候也、湯之浦ニ居候

醫者先日御陳にて二階堂安房介(季行)、拙者疵見せられ藥共

くれ候つる、彼醫中途拙者ニ副候様にと、安房介被申

付候ニ、不追付由候て來候、爰元別醫者へ早く頼入候

条、先く無用段由申候て、引出物取せかへし候也、△

十一日、▽白濱(重池)次郎左衛門尉殿へ内義申候、拙者早と可罷出様ニ被思召通承及候間、疵未然と候へ共、今日罷出度候、時分次第御註進頼入由申候、△臙而、祇候可申由候条、罷出候、即御見參被成、今度別而辛勞仕由 上意候、其外城攻之様子共細と御尋被成候間、有之俣申上候也、さて退出申候処、白次を以 上意候、筑前表之義、急度可事果相聞得候、然者直ニ豊後入たるへき由、各存知候、尤之砌に候、併被思召候者、日州衆我とを始、皆手負ニ罷成候、其上矢種等茂定盡終候らん、此節直ニ豊後之御行者如何候する欵、題目豊後を輒召果候ても、武庫様御移被成候て御納候する欵、又中書など連と御移可有などの御物語などハ候ハぬ哉、菟角豊後属御案中候共、急度可被踏敷事一向御覚悟無之候、存分共候ハ、可申上之由也、豊後入之事、此節さうに存候、其故者入田・志賀無別義申上候、又極寒にハ可難成候、正月など、候ても、いつも不罷成候、従夫春雨時分、次第くニ雨時分に候てハ、大河多処候間、可難成候、如蒙仰候、手負多と候、矢種等不如意たるへく候へ共、此節可然存事候、又豊之事、輒属 御案中候ても、急と御踏靜候する事如何之由

候、それ迄ハ我とも納得不及候、又中書など連と御移之儀等、聊御物語無之候、菟角 大守様御心之むき候様ニ、御弓箭ハ成就申候間、猶と 上意之外ハ有間敷奉存由申上候也、

▽十二日、武庫様へ祇候申候、先日早と敷 御光儀被成、疵之躰 上覽候、忝由申上候也、△

一十三日、▽彼岸入にて候間、看經共申候、手負候て已後、始而壽珠を取候也、△此日罷出御酒進上仕候、▽食籠肴にて樽一荷也、喜入攝州(季心)御參被成候へ、拙者御酒進上申候、△御寄合可有由候間、▽攝御參を暫相待候、臙而御參候条、拙者も同御前ニ罷出候、御酒參候、攝御礼頻候間、御盃拙者頂戴候、三返參候、△其内岩屋城攻之御物語共也、喜入小四郎殿(久懸)刀被召寄、上覽共候、不紛鎧ニ當候と見え候て、刀悉打損しなされ候也、御感共候也、

▽十四日、此日も疵養性共申候也、

一十五日、從宮崎滿願寺・沙汰寺被參候、吉田作州頼候て懸御目申候也、拙者罷出候すれ共、天氣惡候故欵、氣分然となく候由、御尋之時御取合頼入由、御寄合中まで申候也、諸所之衆礼承候也、

一十六日、鹿兒嶋談儀所之御隱居、諏方之座主御祝言ニ御參被成候とて、拙宿御尋被成候、酒肴・御茶被下候、被疵候由共承候也、此日伊地知勘解由左衛門尉殿を以、上意之趣、昨日筑表御陳より、大口昌雲寺を以各御申被成候、岩屋・寶滿属 御案内候、立花之事于今相支候へ共、當時嘍之懸引共候、其上立花之城頼三候、此内ニ罷居候物、所領さへ被下候ハ、統虎事^(宗茂)を打果、御幕下ニ可參由申候、然者此義可然思召候ハ、典厩御登可有候、其時御行可有由候、如此共候ハ、彼表御隙急ニ可明存候、左候ハ、忠長・忠棟其外諸軍、如境目直ニ可被參候、爰元ハ 御兩殿様御談合次第、豊後入之御分別可目出候、日州衆も此方へ罷居候する衆者、直ニ此口より豊入たるへ候、日州へ居候衆ハ中書被召烈、縣口たるへ候由被申上候、就夫昨日爰元へ被罷居候談合衆被召寄、御談合候キ、拙者ハ氣分惡由候て無其義候間、委被仰聞せ候、御返事之趣ハ、立花之事、計策之義共候哉、併其忠儀之者兩人へ所領被下候するを、只統虎へ被遣候、降参さへ申候ハ、順路ニ御校量肝要ニ被思召候、其故ハ、自今遙々之御弓箭ニ候条、聊も逆義ハ可惡由被仰候、又豊後入之事、

爰元へ罷居候衆も此節可然之由申候事ハ同前候、併能く御談合可入被 思召候処、忠長・忠棟直ニ堺目へ可被指寄由、御得心無之候、是非共此方へ參上候て可然被思召候、又日州衆爰元へ居合候衆者、此口之由被申候、是も無御得心候、其故ハ、主人者別方、手之者ハ別方ニ候てハ不可然候、地頭ハ別方、衆中ハ別方、是も諸篇下知等事成間敷候、然者春已來如御談合、太守様ハ日州口へ可爲御進發御地躰候、拙者其覚悟申候て可然被 思食候、御談合之時も、是非共 太守様者日州口へ御發足可目出由申候て可然被 思召候、是者御内義之由也、然者朝日獄と哉覽、梅口ニ候之故、是を攻させられへく被 思召候、是又拙者入魂申候て肝要之由共也、昨日御談合ニ可罷出之由候つれ共、疵未然候て無其儀候処、巨細被仰聞候、忝奉存候、殊更日州口へ 御發足御所好之由、一段目出候、諸篇拙者入魂之儀、緩有間敷之通申上候也、蒲池殿より使書并袍表一預候、今度參陳之刻、御行前にて無沙汰候、殊更致軍勞、疵をかふむり候、併不痛之由目出通承候也、遠方まで使書到來、祝着至極候由、返事申候也、△

八月天正十四年

一十七日、▽鹿兒嶋談義所御祝言ニ御參被成、拙宿へ入

御候、御祈念之御札并御茶・酒着御持せ候、即參會仕

賞翫申候、坊之津一乘院、是も同前、△從 武庫様御

使本田源右衛門尉殿にて被仰候、備後ニ御座候從 公(義昭)

方様、御字御給被成候、然者頃御名乘定候条、被仰聞

由也、義珎(ト)、如此之由也、

▽一十八日、觀音別而讀經申候、昨日より 太守様御虫氣(義久)

出合候て笑止ニ候、然者夜前も寄合中、其外諸人御宿

へ寢祇候申候也、各思々ニ立願共申候、拙者ハ來年名

代大峯修行申させへき由、大坊を頼候て立願申候也、

宮崎衆中皆同之分別にてハ、於奈古八幡宮轉讀大般若

經十部成就可申由、立願申候也、此朝鹿兒嶋談儀所を

始、冠嶽太平寺其外聖家衆廿人計にて爲御祈禱、於御

宿千手衆一洛叉也、未之刻計より 御虫次第くニ御

本腹候也、從 武庫様本田源右衛門尉殿にて、頃長會(元親)

我部殿より大船一艘進上之由候、然者彼船日州如内海、

急度可被廻せ候、彼表諸浦へ水主之事可申付由被仰候

間申事ニ、其當時、日州浦々より水主仕立候て、南林

寺作葺板所望ニ、拙者船を屋久之嶋へ遣候、未歸帆候

之条、可難成候へ共、始而被仰義候間即申付由、御返

事申上候也、

一十九日、爲御祈禱、右之衆にて仁王經百部讀誦也、此

日中書公御參上被成候、折肴にて樽一荷御進上候、

御虫氣未然候間、御寢殿にて御見參候、御酒御參會ハ

無之候、

一廿日、中書御宿へ御札ニ參候、久倍・親貞同心申候、

典厩御宿へ參候、先日手負申候とて御使被下候御札申

候也、三原下總守同心申候、從夫、喜入攝州御宿へ參

候而、良久閑談共申候也、

一廿一日、武庫様於 御宿御談合也、其衆、金吾公・中

書公・川上上州・喜入攝州・新納武州・川上三州・拙

宿也、御使吉田作州・比志嶋宮内少輔也、 太守様御(忠實)

虫氣にて候間、早々 御歸鞍可目出候、併立花表之儀、

一途聞得不申候処、 御歸院候てハ、自他之覚如何可

有欵之由也、雖然、 御當病にて候間、御養性題目之

儀候、先々御歸院可目出候、さてハ爰元へハ武庫様御

滞在、又ハ御兄弟衆其已下吾々逗留之条、別義有間敷

由御申被成、御歸院可目出之由、 御申被成候て可然

由出合候也、此夜中書拙宿へ入御候、御酒被下候也、△

一廿二日、▽出仕如常、 御虫少御快氣候条、△新納武

州孫元服候、模様如常、御三献御寄合被成、御前ハ
 三肴、次ハ削物計也、二郎四郎と名被給候、御腰物
 拜領被申候也、▽進物等如常、太守様ハ御虫氣時分
 と候て、廳而御座被立せ候、武庫様御代ニ、持參之
 御酒等御賞翫にて候也、嶽米良殿當時養性氣にて候と
 て、名代として子息被參候、未被懸御目候間、拙者頼
 之由被申候条、寄合中へ談合申候て取成候、進物御太
 刀・御馬也、弥太郎と名被下候、其時又御太刀・五百
 疋進上也、此日新武・孫殿同心にて拙宿へ被來候、酒
 肴引物等預候也、即參會申候、米良弥太郎殿被來候、
 二百疋・熊皮預候也、即參會仕、御酒寄合候也、△此
 日伊地知勘解左衛門尉殿にて、上意候、先日御内義を
 以如蒙仰候、日州口へ御進發可有被、思食候、然者梅
 口朝日岳、又豊後内端へ針を被伏度被、思召候、川田
 方へ御祈念之事被仰付候、拙者談合申候て、然之仁
 申付、彼針を伏させ候て可目出由也、此口よりも針一
 可被仰付由也、即申上候、朝日嶽ハ堺目寄にて候間、
 輒針伏させ可申候、内端にと候ハ、一向難成存候、併
 中書公又ハ吉總州近(忠意)可被參候間、談合可申由申上候
 也、川田殿へ廳而談合申候、御祈念被成次第、日取共

候て、拙者へ針點合可有之由也、

▽廿三日、吉利殿參上候、御虫然となく候て御見參無

之候、此晚月待候間、申刻より行水申、別而看經申候
 也、新納武州月待慰とて、語ニ來入候、甲佐本地頭伊

津野方、此近隣にて碁之上手にて候間、打せ候て見せ

可有とて、碁盤・石持せられ候、彼方も同心也、等与

など云入道など同心也、終夜碁打せ候て見申候、吾と

ハ伊津野と打候て慰候、瀧聞九郎右衛門尉など被來候、

碁之隙く、誹諧・雜談にて月を待取候也、△

一廿四日、▽勝軍之祈念別而申候、從、武庫様御使にて

候、明日御連歌ニ可罷出由也、當時疵ハ仕立候へとも

痔病出合候間、長座難叶由申上候也、△此日忠長・忠

棟より、當所總持院にて御申也、立花表様子懸引之躰

彼院使僧被申候条、進覽候、最前ハ事能申候間、噉之

談合候処、頃は非共立花之事、すへ付ニ被召置候ハ、

御馬之先ニ立可申候、無其義候ハ、下城難申由申候

条、此方之使僧ニ、秋月殿使被指添候て、異見ことく

ニ被仰候、趣者、是非以先く下城可然候、左候ハ、

早良之郡ニ荒平と申名城相副、立花之返地ニ可被遣様

ニ取成候する由、謂せられ候、其返事ニ、順逆立花之

事ハ羽柴殿へ申入、統虎名字之事も、立花と名乗かへ

など承候在所之事候条、下城申ましく候、殊更頃中國

より加勢之由候間、彼方へ質人指出候条、二方へ菟角

と申候する事ハ罷成間敷候、中國よりも既ニ鉄放數多

被籠給候条、今更下城之事ハ難成通、申候離候(符之)、然処

秋月方被申候ハ、薩_{サツ}_{サツ}衆之事ハ長_{ナガ}と軍勞共候間、先_マと

歸陳可目出候、立花一城之事ハ、秋月・草野・星野・

原田・宗像など談合申候て、駈可挫候、御心遣入間敷

由頻被申候、就夫去廿一日・二日、秋月衆ハ立花表へ

陳替たるへ候、其陣所など被見合、此方軍衆之事ハ、

今日・明日より打立、歸陳可有之由也、▽さて彼表之

様子共、細_{ホソ}と尋聞候処、妙圓寺御座候、拙者疵之躰共、

又ハ辛勞之由共候て、酒肴持られ候、即賞翫共申候、

此晚本田野州より、可參由承候て其分候、座躰客居拙

者・白濱防州・伊地知伯州(重秀)、主居宮内澤殿・亭主、種

く会尺共也、

一廿五日、武庫様於 御宿御連歌也、御發句太守様被遊

候、此朝出仕歸ニ、親貞拙宿へ入御之由申候而其分候、

座躰客居親貞・伊地知伯州・比志嶋宮内少輔・長谷場

筑後守・八木越後守(昌信)、主居澤殿・拙者・白濱防州・伊

地知越中守也、御酒・御茶などにて閑談共候、澤殿立
花一瓶被仕候、各見申候也、△

一廿六日、▽川上源三郎殿を以 上意候、今朝中書公御

寄合可被成、拙者可罷出之由也、吉利殿も御參可被成

由可申由也、即吉利殿へ申候、出仕より直ニ御寄合也、

中座ニ御座候、客居中書・拙者、主居吉利殿・本田紀

伊守也、澁屋大夫參候て御酒宴共也、中書・吉利殿御

持參之御酒參候、銘_{ナガ}と御酌ニ御參也、御座過候時分、

從豊前秋月殿まで到來候書狀三通、從忠棟、爰元爲御

披見被持せ候、比志嶋宮内少輔披露被申候、即 上覽

被成、各へあそはし候て被聞せ候、宗麟次男親家、言(田原)

語道断慮外之儀出來候て、豊後之爲躰無正躰候、然者、

近_{チカ}と自崩たるへき由共也、▽此日瀧聞九郎右衛門尉被

來候間、一昨日廿五、祈念迄ニ發句申候、併取分難聞

候条、未誰にも不語候、如何可有欵之由申候也、

月に霧立及はぬをこゝろかな 覚兼

如此申候、下心ハ、當時吾_{ボク}と身躰寔_{マコト}と愚に候へハ、誰

にも及付ぬ躰迄にて、無念至極候、乍去時めく人_{ヒト}と之

上にも、世上物沙汰共候て、今度岩屋之陳所などにも

落書共候て、如何など、承及候へハ、還而、不及も樂

候けるなど、存候て、過不及之心ニ申候由語候て一笑候、

一廿七日、薩州御歸陣之由候て御參也、(島津忠辰) 飯嶋殿同前、奈

須彈正忠參候、甲・鎧進上仕候也、此晚吉利殿より可參由候て其分候、種々会尺被成候、閑談申候て、漸深

行ニ罷歸候、此朝御側衆へ奇合候、座躰喜入藏人殿・

鎌田加賀守殿・伊地知勘解由左衛門尉殿・敷祢越中守

殿、主居拙者・阿多掃部助殿・瀧間九郎右衛門尉殿也、

一廿八日、▽荒神へ別而看經申候、出仕歸ニ、御側衆

など同心申候て奇合申候、上原下總守殿・伊地知右京

亮殿・白濱次郎左衛門尉殿・平田豊前守殿・木脇若狹

守殿・田代刑部少輔殿・大山肥前守殿・絮阿弥也、酒

宴にて閑談共候也、△此日吉利殿并尻伊賀守被召烈御

座候て、閑談被成候、堺目之様子等談合申候也、豊内

端へ針伏させ可申之由共被仰付候、此等之義細談申候

也、此朝伊伯にて、親貞・拙者へ被仰聞候、武庫様

へ御家督御相續之義被仰定候、併若も御疑心共候て、

何事も 太守様御前難測 武庫様被思召候ハ、諸篇

事延ニ可罷成候間、御誓書被成、無御別儀由可被仰

御内存候、如何之由也、兩人尤可目出之通申上候、并

御内存共、深々敷被仰事候也、不能書載候、此日 上意候、忠棟此度歸陳中途ニ、一兩日隙入由候、御談合ニ付被相待せ候処、如此振舞、一向無御納得候、早々參上之由可申越之旨候間、即書狀指越候、親貞・拙者判仕候、

一廿九日、▽出仕如常、伊地知勘解由左衛門尉殿にて申上候、先日針之義被仰付候条、川田方へ談合申候て請取置候、然者、吉利殿へ談合申、難成候へ共、先々如境目持せ遣候、并尻伊賀守へ委申含歸申候、此上にも堺目御用之義故候すらんと申上候、さてハ其分候哉、日出被思召候、能く伊賀守へ可申付由也、將亦△昨日志賀道次より新武まで來候如書狀者、頃四國・中國船揃にて、一行之由聞得候、其故道次三男質人ニ押而取之由候、然者細嶋邊船着にて候間、普請等無由断様ニ堅可申付由也、▽又ハ一定船數共揃候哉、四國邊之様子、早舟にて可承合由、并尻方へ堅申候也、此日忠棟歸候也、吉利殿・平田左近將監殿・村田右衛門尉殿來儀候て、語可被成由申候条、即其分候、長谷場筑後守など被來、碁共打候て菟角閑談候処、伊集院野州・鎌田雲州、只今歸陳之由候て被來候、能仕合御座候由申

候て、右之衆同前ニ御酒振舞候、めし過候て、伊野甚
一番打候する由候間仕候、各被見候而慰候也、此入会
之時分、忠棟拙宿へ御座候、疵など早と平噲候、目出
由也、次二者只今△和田玄番助田尻殿へ御用之義候て
被遣候、被罷歸候、筑紫廣門五ヶ山へ被打入候由也、
此趣共承候内ニ親貞も御座候、従夫能仕合にて候、續
衆など可被仰付談合共候、先と寄と肥筑之衆、早速可
馳續由被仰越候也、然処ニ比志嶋宮内少輔にて 上意
候、右之雜説、其上御談合之事多と可有候、明日評定
由断有ましき由也、此朝川田駿州・村田右衛門尉殿に
て、寄合中まで承候、夜前之夢想ニ、此度諸神供被仰
付候故実等相調候条、近日於妙見御寶殿、可被修行覺
悟候処ニ、(忠貞)日新様・(實久)伯圍様被仰事ニ、川田諸神供之
御祈念申候欵、十月左様之義者如何之由被仰候間、菟
角問答共申上候、内ニ大隅正宮にて可然候をと承候と
見候て、臙而夢ハ覚候、従夫驚候て看經共候処、本尊
被懸置候後ニ狐鳴候、依其御鬮被申候へハ、(義久)御上様
御驚事之由候間、其御覚悟可目出由候キ、于今存候へ
ハ、彼廣門之一左右聞得候するとして、左も候つる哉と、
親貞・拙者・忠棟へ物語申候也、

一卅日、出仕如常、諸軍衆當所へ歸參候条、各一所衆・
諸地頭被指出候、御太刀・酒肴・進上物等、品と御祝
礼共也、此日御談合候、其衆寄合中之事ハ不及申、其
外川上上總州(寄)・吉利總州・新納武州・伊集院野州・川
上參州・上原長州(前近)・鎌田雲州・白濱防州也、御使伊地
知伯州・吉田作州、筑紫廣門再城之由候、就其御行之
事、又兼日之御覚悟候豊後入之事、是等題目にて五ヶ
条御談合候也、御兩殿ハ御同座にて被聞召候、寄合中
ハ又別座、談合衆ハ又別座にて候、何之条も無一着、
明日又御談合之由候て各歸宿申候也、

181

「上井日記」

九月

一朔日、▽出仕如常、當所へ滞留之衆、御一門其已下不
殘出仕也、さて各罷歸、した、め候て祇候申候、△終
日御談合也、(藤久)金吾公・(家久)中書公・典厩公も御談合ニ御
參被成候也、其外昨日之衆也、廣門去廿七日被忍出、
先一獄へ取乘、翌日勝尾へ被仕乗候、蒲池衆當番にて
迷惑仕由註進也、西牟田方より註進ハ、安樂平之御番
被仰付候へ共、私ニ一手替ニ談合申候て、高良山麟圭

ニ差替罷歸候、彼城も不番たるへく候由也、(親美)和仁・邊(親善)春・三池・小代(親善)などより追々右之註進也、若杉と申切(宗茂)寄、是ハ立花より仕取由聞得候、星野方當番にて戦死(久勝)之由聞得候也、伊集院肥前守・新納右衛門佐・稻富新(長)介、先々寄之儀候間、大津山迄被馳續、被表之様子、(政孝)爾と御註進可被申由、被仰遣候也、終日各談合にて候、筑紫方如此之分別ハ、定而龍造寺一致候て、指立候て如此候らん、然者各彼堺之様躰見申候分者、輒筑紫可召崩事可難成候、先日被仕崩候ハ不慮之仕合候、剩肥前と同意候てハ、容易難被攻候、左候て、肥前へ御執懸候する事も如何候する哉、題目浮合候て軍ハ不仕、居城閉籠候て、衆・兵糧過分ニ調義候ハ、是又年内中にも難事澄候、左候ハ、中國ヨリ渡海候、又ハ豊後より阿蘇口へ取出候、又四國より日向表へ兵船指下候なと雜説申候てハ、各在陳も難事成候、是非以、先筑紫御退治こそ可然候すれ共、是を被指捨、此間之如御談合、豊後へ被召入候て可然候欤、其故者、縦龍造寺廣門へ一致候て、御敵ニ罷成候共、三池・小代・大津山・上蒲池・高良山之座主、此等之質人然々此方へ被召置候ハ、御心遣入ましく候、然者肥後口・日向口兩

口より、豊後へハ乱入有へく候、又兵船内端へ被指向候ハ、可容易各存候、縦相支候共、此口者南郡通、日向口ハ梅・三會邊まで山を越候ハ、京勢之与力候共、御心遣有間敷候、各存分ハ如此之由皆同ニ申上候也、即御返事、談合之趣委被聞召候、順逆筑紫を先御退治可然被 思召候へ共、各彼方角を見申候て被申儀候、(義弘)御前ハ御不知案内にて、菟角と難被仰候、又豊後表之事、是ハ御鬪なとり候条、可輒候欤、併此度筑前表様子等御思案候へハ、是も無取御覚候、題目度と筑前表へ被罷居候衆へ被仰登候ハ、廣門事不被討果、中途ニ被召置候欤、言語道断曲事ニ被 思召候、せめて其分候ハ、早々如爰元被遣候て可然之旨被仰候処、各歸陳之折節召烈候するなと被申候て、結局油断候て如此候、是を御思案候へハ、是程之事ヲ各油断申候する衆にてハなく候ニ、如此之義出來候ハ、必竟御家之煩たるへき基候欤、菟角此度之御談合を取被成候て、いつれとハ難被仰候、衆口次第、(義弘)武庫様へ御談合可然之由上意候て、御機嫌不宜候、是者今度歸陳之衆油断故、如此之義出來候条、其人數へ御當被成、如此上意候欤と、各推量申たる迄候、明日御談合之由候て、

各罷歸候也、

一二日、各御談合衆調させられ候て、可被指之由候条、

忠棟より可參由候間、其分候、座牀客居典廐・中書・

新武州・周琳・宗与、(忠元) (中丞) (道正屋) 主居河上州・吉總州・拙者・忠

棟・伊地知越中守也、種々御会尺共也、各直ニ御談合

ニ指出被成、昨日之上意之通、伊伯・吉作(伊地知重秀) (吉田清存) 武庫様

へ被參、彼 御意共被承候趣、乍勿論 上意之御下ニ

被思召候、乍去筑前表へ又と御出馬之事ハ、談合衆も

難成被存候欤、御同懷候、先南郡迄成共、召入様ニ

候て可然欤と被思召候、是も御鬮法第可然候、若御鬮

おり候ハすハ、肥後國中地頭定、移衆など被仰付候、

先々時分被見合候て可然欤之旨也、此由談合衆被承候、

豊州入ニ御意むき候や、是者談合衆申上候ニ同前候、

就夫御鬮之事ハ、談合衆ハ 上意之御下ニハ不存由也、

其故者、豊後入之御鬮ハ、兼日事成候上ニ、又と御申

候する事ハ如何之由也、此由又 太守様へ御申被成、

諸人さてハ、筑前表へ又 御出勢納得不申候哉、豊後

へ御出張可然由被申候、さてこそ、衆口次第と 上意

候つる上ハ、不及是非候、何と御思案被成候ても、今

度之儀ハ御取寛被成事無之候、惣而ハ筑紫表へ御鬮お

り候間、其分候処成就不申、如此候処ハ、人と無分別

故、油断候て如此再發候、然者御鬮之始末相申候する

様ニ、彼表御行たるへく被思召候へとも、是ハ見申た

る歴々、難成由被申候上ハ、御無案内にて、菟角と難

被仰候、豊後口之義ハ、武庫様御鬮と御申候欤、是

ハ談合衆如被申上候、御鬮ハ入ましく被思食候、從最

前衆口次第と被仰出候間、能と各評定肝要之由也、▽

此晩亭主、拙者へ御酒振舞也、宮崎衆中少々、座ニ被

來候也、△

一三日、▽毘沙門へ別而看經申候、此朝亭主へ御酒寄合

候也、△此日茂終日御談合にて候、武庫様も御參被

成、御談合被 聞召候也、御談合衆分別ハ、無相替義

候、菟角筑紫表之御行ハ不及申候、豊後へ御行肝要候、

但いつも 太守様之御意之向候方ニ御出張宜候、然ニ

此度ハいつかたへも 御心浮ひ候ハぬ由候間、各取寛

不申候、菟角 上意ヲそと承候て、其御下ニ談合申候

て見可申由、被申上候也、

一四日、▽宇土殿(名和親孝)より初鴈進上候、各へ御寄合被成、△

此日も談合ハ御座候也、武庫様も御參被成、寄合中

ハ御下ニ御意趣共承候、御談合衆ハ別座也、上意之

趣、各豊後御行可然之由被申候、御前委被聞召候、菟角此度之義、いづれも御意うかひ候ハぬと被仰候処者、先筑紫廣門進退之事、堅被討果候へ、無其義候ハ、早々此方へ可被引越由度と被仰候ニ、油断候て如此慮外出來候、必今度筑前表へ被罷登候衆之、是程之事を存寄ましきにてハ無之候処、ケ様之儀再發候、寔々笑止ニ被思召候、必竟諸法度等緩ニ罷成、御番等不被聞候て、御案内之事共此前も候キ、御恥辱此上ハなく候、人之見申さぬ所にてハ、御落涙なきる、計候、豊後之事、諸人も可輒申候、又 上意にも、志賀・入田別儀なく申入候条、可輒おほしめされ候へ共、又筑紫表之躰ニ候てハ言語道断、御弓箭之恥辱たるへく候条、能く向後之閉目等談合候て、被申上候ハてハ、一向御納得被成かたき由也、此日も終日御談合候也、

一五日、早朝より御談合衆被參候て談合也、此日忠棟御会尺申被成、御座躰如常、中座ニ御座候、客居 武庫様・中書・拙者・澁谷大夫、主居典厩・喜入殿(季入)・本田紀伊守・忠棟也、終日御酒宴也、女房衆御酌二十人計(重親)罷出候、澁屋一類祇候、乱舞にて候、忠棟御酌之時、御兩殿様へ御太刀進也、(上脱)目錄之員數ハ不存候也、澁屋

与吉郎舞候時、忠棟指合被成候刀ヲ被遣候也、各藝者へ段子・片色など相應ニ被遣候也、△

一六日、從早朝御談合也、此朝被仰出候、餘と談合衆も一途執定被申上事無之候、又 上様之御心ニも浮ひ候事もましまさず候、然者御鬮にて可然候欵、豊後御行之御鬮ハ、度々おり申候上ニ、ケ様ニ被仰候事ハいかゝ候へ共、此度筑紫之儀成就候て惡事出來候間、爰ハ御鬮可然被思召候由也、各 上意之御下之由被申成候、▽此朝出仕より直ニ新武州・伊伯州・吉作州・和田玄番助・八木越後守(昌世)、拙宿へ同心仕候也、此日も御鬮之御申様共御談合也、此晚 武庫様へ中書御寄合被成、祇候可申由候間其分候、客居中書・拙者、主居乍勿論 御座、御次新武州也、深行迄御閑談共候て御酒宴也、

一七日、御談合衆揃被成、御鬮之儀相定候、就夫霧嶋山へ吉作州御使之由被仰付候、御鬮之様者、一ナラハ、急度豊後へ可召向候、二ナラハ、此節彼行可被指延候、白鬮ナラハ、諸方角御思案可有由也、△
一八日、▽於正法寺御能也、早朝太守様出御被成候、御輿にて候、御馬も引せられ候、走衆五十人程にて候、

諸所より被出合候地頭も、若衆ハ走られ候、御一門衆又ハ本田・伊地知・平田、彼名字之衆なども被相加候也、御供立如常、御輿跡より之御供衆、數多之儀候間、不及書載候、老中にハ、圖書頭殿(忠貞)・町田出羽守殿御供也、忠棟ハ八城噯にて候間、弘曉より正法寺へ候て見廻也、武庫様御供拙者可仕由候て其分候、是者御馬にて候、御供立如常、走衆八城衆にて候、三十人程申付候也、天草嶋中之衆各御供被申候也、さて大夫支度出來候由候へハ、御兩殿御出座候、典厩・中書・川上上州(忠貞)・秘書(季久)・喜入攝州御座ニ候て見物被成候、翁与吉渡候、式三番、様子如常、東方朔、澁屋父子にて仕候、脇宗次郎也、此能過候へハ、阿多掃部助御椽より大夫と被申候間參候、纏而折紙被下候也、千疋にて候、同武庫様よりも被下候、本田刑部少輔被渡候也、員數同前、狂言石原治部右衛門尉仕候、春永、脇宗次郎、種直与吉、斑女与吉、せかい坊与吉、太郎坊澁谷對馬拯、脇飯野衆三郎兵衛尉也、自然居士、商人宗次郎、自然居士与吉、江口、脇宗次郎、シチ對馬拯(季)也、高砂、脇宗次郎、大夫与吉也、狂言等銘と不及記候、又東方朔過候て、狂言之内ニ御酒參候、御座之酒、其後忠

棟(町)・久倍(町)・拙者召出ニ御酒被下候也、せかい之時、大夫御前へ參候而様く舞狂候、御椽にて明王諸天を申出候て、舞臺と御椽之間ニ而、翹も地ニ落など仕候、一段出來候由、見物衆申候、此後武庫様御進上之食籠・御酒參候、打續忠棟進上之御酒參候、是も食籠肴にて候、此流盃、澁谷對馬拯被召出被下候、此次ニ珠長被參候へと候て、影ニ被居候つるかさし出、御酒被給置候也、如此共候て、漸酉刻頃ニ御能過候、狂言之間ニハ内座へ御入被成、御湯漬など參候、終日之御慰共也、御能過候へハ、御兩殿御歸被成、御供衆等如最前、寄合中之事ハ、被仰聞せ候する子細候、居留可申由伊地知(重秀)伯耆守被申候間其分候、△正法寺客殿にて上意承候、此度御談合御圖ニ相定候、然ハ御圖おり候ハ、御日取時分、能く談合肝要ニ被思召候、又者肥後諸地頭定など、明日・明後日ニ相澄候様ニ、談合指急候て可然被思召候、御歸鞍十一日ニ定候間、夜白談合油断候ハぬ様にとの儀也、▽此朝吉作霧嶋へ打立候也、

一九日、終日御談合候、典厩三舟・隈庄御給被成度由御侘候、左様之御懸曳共也、御前与武庫様・寄合中へ

御談合之御使、白濱防州・伊伯州也、典厩へ御使伊地

(重政)

知備前守也、此日出合候、昨日御能之時、澁谷對馬丞
 丞、珠長被吞置候事、珠長影より被出候間、澁谷丞と
 ハ不存給候、さりとてハ迷惑無極候、常之御座なとに
 てハ、毎々ケ様之事共有と見得候条、不苦候、さて九
 州之衆着合候て見物申候処、彼丞吞置候事、御噉不足
 之由被申候也、珠長被申候処尤至極候、夫より打續、
 歷々へ御酒と有へき覚悟候処、臆而脇出候条、其俣珠
 長迄にて候、不及力之儀候、寄合中無噉仕たるまで候、
 可被聞分由、喜入殿・吉利殿・新武州を以、各被仰分
 候也、△

一十日、▽典厩へ、三舟之事、御重恩ニ御給可有ニ大方
 定候也、此日茂種と御談合にて候、△拙者事者、宮崎
 御祭礼來十五日・六日にて候間、同者參詣申候様ニ御
 暇申度之通、伊伯以申上候、御談合共承候て此晚より
 打立、罷歸候て可然之由 上意也、御鬮おり候ハ、
 必日州口へ可爲御發足候之条、諸篇拙者罷歸候て可申
 付通承候也、 武庫様へも祇候申候て、此晚罷歸候也、
 ▽ 武庫様、御跡ニ暫御逗留定候、町田羽州寄合中ニ
 ハ逗留候するニ定候、此夜拙者ハ比奈古へ留候、終夜

湯治申候て慰候也、

一十一日、此日 太守様者御歸鞍ニ定候間、其分たるへ
 く候也、此日佐敷へ少休候て、破籠等衆中なとへ寄合
 候て、從夫急候間、湯之浦上端と哉らん申村ニ留候也、
 一十二日、般若寺門前ニ着候て留候也、上井次郎左衛門
 尉殿へ人遣候、此度立寄候すれ共、御祭礼故急候間、
 無其儀由申候也、

一十三日、早朝打立候、飯野元路橋邊ニ、次郎左衛門尉
 殿被出合候、酒肴持せられ種々会尺也、良久閑談共申
 候て、從夫野尻町へ留候、市來美作守殿酒肴持せ指出
 被成候、今度岩屋にて辛勞共仕、疵付候へ共痛申さす
 候、目出由承候也、

一十四日、本庄まで宮崎衆迎ニ被出合候、酒肴など取く
 被持來候間、爰彼にて受用申候て慰候也、漸薄暮ニ至、
 歸宅申候也、

一十五日、看經等別而申候、衆中各歸宅之由候て被來候
 也、酒肴など預衆も候、取く也、寺社家衆も被來候、
 同前也、奈古八幡御祭礼ニ參候、衆中各同心申候也、
 御祭礼之様式如例年、

一十六日、爪生野八幡御祭礼也、社參可申存候処、氣分

少惡候、其上（上并繁葉）恭安齋御越之由候条、西方院代ニ頼存候て社參候也、恭安御越被成候、圓福寺・蘇山寺越被成候也、同座にて參會申候、深行まで酒宴共也、恭安より御酒被下候、兩寺も酒肴被持せ候也、各賞翫共申候也、此日本庄八幡之御神事にて候、地頭指合之儀候由候間、満願寺頼存候て御代參候也、太刀・百疋持せ申候、存覚申付、太刀渡せ候也、此日喧嘩出合候て、御祭礼夜入候て成就之由也、善哉坊之同宿与不動坊同宿相論之由也、

一十七日、恭安齋御歸也、佐土原へ弓削甲斐介進覽申候、越之鳥進入仕候、御祭礼前ニ罷歸由申候也、將亦數祢越中守、於中途吉田作州（清存）へ被合申候、拙者へ傳言ニ、御鬮之様急度御行ニ事澄候由候、巨細者存候条、被仰候ニ不及由候、然者必定御行たるへく存候、目出由申候也、從中書宇都民部左衛門尉を以被仰候、歸宅申候由被聞召付候之間、可然おほしめされ候、上之口雜説申候由、吉利殿より申なされ候、續等之義、如何可有候哉、又御行等、何程ニ定候歎之由、蒙仰候也、御使被下候、忝存候、上之口雜説之事、吉利殿より拙者へも承候、續之事、一左右次第たるへき由、所へ申渡

候、拙者事ハ、佐土原まで續候て、得御意御供可申候、又御行之儀者、弓削方にて申候由申候也、此晚越ニ立候、十二三留候也、此夜瀬戸山大藏丞処ニ留候、山田（有也）越前守殿より使預候、海江田方也、趣者、五日已前、美々津之者罷下候、其説ニ、四國兵船豊後へ押渡候、市來川上せうはん・家村隼人佑兩人之子之出家とて、彼者ニ傳書候、爲披見被持せ候、其趣京衆下向必定之由申候、御家景中ニ、からくり付候人多く有由申散候、御油断候てハ笑止之由共也、委承由返事申候也、

一十八日、觀音へ別而祈念申候、かこ嶋へ飛脚進上申候、敷越へ吉作傳言之様ニ、御行たるへく候哉之由、又者從高城承候京説并傳書相添進上申候也、此朝池田志广拯会尺仕候也、加江田へ罷越候本田越後守殿、和知川原にて追付被成候、從夫谷口和泉拯処にて見參申候、酒肴持せられ候、賞翫共仕候也、それより急候て九比良へ着候、呼ニ登候へ共、時分過候て無尔候也、一十九日、淨瑠璃寺酒肴被持來候、富山兵部少輔・加治木・齋藤など酒持來候也、それより罷歸候、路次にて鮎とらせ候て見申候、隈江右京亮・小藤丹波守酒肴持來候、路頭にて賞翫申候而慰歸候ニ、從中書御使之由

候間、蘇山寺ニ立寄候て御意趣承候、御行時分、いつ比にて候哉之由也、又手火矢・玉藥爲御所持、南蛮船

平戸ニ着候通被聞せ候間、人を可被指遣候、拙者も自然用段候ハ、人を相副申候へかしの義也、御酒參會候也、御行時分、來月廿日比之由申候也、南蛮船へ用段之義者無之由申候、連々鉄放・玉藥、大方用意申置候由申候也、

一廿日、紫波洲崎へ參候、種々御会尺共也、此晚從土持殿之書狀、宮崎より持せ候、令披見候、御弓箭御評定、何分定候哉之由也、并四國兵船少く豊州へ渡海之由候、自然之時、續馳走頼被成由共也、△

一廿一日、▽普請之義申付候処、天氣惡候間、宮崎へ罷歸候、土持殿へ返書仕候、△御評義、此口御出勢相定候、來月廿日比たるへき由申候、其外諸衆來宿元等、勿論御宿等之義細々申候、京說之事茂委令承知由申候也、▽此晚新名爪まで書狀持せ候也、飢肥・福嶋へ御行相定由申候、就夫御中間之義など申候也、去十九日、かこしまより忠棟・親貞書狀預候、其趣、於八城如御談合、御圖此口御行ニ相定候、御觸等之事、御用立之時宜等無由断申付候へ、但遠慮之義肝要之由共也、

依其諸所へ可申儀者銘々申遣候也、御働日限ハ未申渡候也、

一廿二日、所々へ雜說之趣、又ハ連々御出張之用意、油断有ましき由申渡候也、大寺殿より使預候、田野山へ猪頃多立候、ねらひニ可罷越之由也、御懇之承事候、如何様一兩日中、可參由申候也、

一廿三日、弓・手火矢・矢種等調させ候て見申候、此日竹筥へ罷出候、西方院にて鞠之由候て、若衆中寄合慰候也、此夜月待候条、彼坊にて待候へと頼承候間留候、誹諧・酒宴・盤之上などにて候、△

一廿四日、▽払曉より地藏菩薩へ、現世安穩・後生善処祈念申候也、大門坊へ可參由候て、其分候、非時振舞被成、其外種々会尺也、折節平田狩野介殿、無沙汰候由候て來義候、酒肴持せられ候、各參會仕賞翫申候也、本坊も酒肴持せられ御出候也、又西方院風呂燒せらる、由候間、入申候、此日從善哉坊、先度於八城太守様御虫氣之時立願之般若成就候由候て、配帙持せ預候也、將又△昨日鹿兒嶋へ、如恆例水鳥進上申候、鳥數廿進上申候、御寄合中、其外申次之方などへも、相應ニ鳥進之候也、原田大膳亮を以申上候也、彼使川

田駿河守殿へ遣申候、此口御出勢必定候、目出候、如兼約軍敗者にて候間、早く如拙宿御座候て、拙者同心被成候て可然之由申候也、敷祢越中守かこ嶋へ使申付候、明日ハ拙者いつかたへ欽遊山へ越候由候間、意趣可被聞之由候間、西方院客殿にて申候、条々、一御行相定候、目出事、一御發足日限之事、付路次御宿元之事、一兵船大將并乘衆之事、一御衆盛之事、一矢合之仁之事、一御物俵無之之条、拙者分別以、千計調義候事、一諸方角雜說之事、此等之儀共也、∨此晚吉利殿より書狀到來候、堺目無吳義由也、兼又八城にて井尻方へ持せ候て歸候封し物、敵方へ輒被遣候由也、此等之義も、かこ嶋へ申上候也、

一廿五日、天神へ別而祈念申候、從田野大寺殿遊山ニ可罷越之由候間、其分候、柏周(柏原有剛)・長淡同心申候、此晚ねらひニ各登候へ共、無爾と仕合候、此夜大寺殿拙宿補原へ被來候、犬山より直ニ被來候間、猪餘多取候て被持せ候也、即參會申候、閑談共候也、かこしまへ去十八日進上申候飛脚歸候、京説共申上候、具ニ被聞召置候、坊津へ頃下船候、其説にハ、京衆下候する模様にてハ無之由也、御行御日取、必來月廿一日候、然者兵

船者、十七日縣へ着揃候様にと承候也、去年より御船へ拙者噯申候津志田名之事、從爰元町田殿噯被成候へと被仰由也、并町田羽州よりも書狀を以、忠棟右之名可被成栴之由候間、乍斟酌拙者へ案内承由候也、

一廿六日、払曉各ねらひニ罷登候へ共、無爾と儀候、弥右衛門尉大猪射候而、各賞翫共候也、此日敷祢越當所被通候すると存候て、町田殿返書認置候、其趣、三船へ拙者當時噯申候一名、御栴之由候欤、尤可然候、併此度彼口へ吾等不參候間、夫丸被召烈候する事ハ不及是非、可目出候、さて噯之事ハ、本と御配當時分までハ、此間之ことく有度存候、其故者、御寄合中へそと御内談申度事等候、御納得頼入由申候、兼又、肥州表御出勢ニ、一度もはつれ不申候、此度筑紫表へ遅參申たる迄にてこそ候へ、今度其口へ不參事も、方角故にて候、私にハあらず候由申候、如此申候事ハ、忠棟之事ハ不及申、所と御噯之処候、忠長も三會・嶋原御噯之上ニ、三船へも一名御噯候、親貞も吉松名噯被成候、平田殿も三船へ一名御給にて候、さて只今、町羽へも如此候時者浮所多候ニ、拙者噯之名を如此承候事、得心不申候条、如此返事申候也、拙者ハ一節とこそ申

て候假、少も彼地ニ執着ハ無之候也、此日加江田のこ
とく罷越候、柏周・長淡ハ宮崎へ歸也、此晚園福寺へ
參候、種々御会尺、風呂焼せられ候て慰申候、此夜疊
編之沙汰共終夜承候也、

一廿七日、從清武書狀來候、返書申候也、御行之儀共也、

猷肥へ書狀遣候、御中間之事也、伊集院越州へも書狀
遣候、戸之浦兵船馳走之由也、此日紫波洲崎へ參候、
各下栴塗屏之普請共仕候也、此晚恭安にて種々御会尺
候、△

一廿八日、▽早朝恭安へ出仕申候、去廿五日御伊勢・御

諏方へ神樂仕候、其御酒、御二人へ拙宿にて上申度由
申候、廳而御出可有之由也、恭安入御候間、種々御会
尺申候、祇候衆へも御酒吞せ候也、此日野嶋へ行候、

彼浦ニ足輕など勸候する爲也、彼浦之者共網引候て見
せ候、種々會尺共也、内海より讃岐拯來候、酒肴共持
來候、内海普請等、無油断様にと申付候也、廿九日、

留鹿有由申候間、山へ登候、鹿二取候、拙者一射候也、
此晚伊比井へ留候、種々會尺共申候也、△此夜縣より
來候狀とて宮崎より持來候趣、千斛糧兵衛四國より豊

へ渡海之由候、宇目之村へも豊衆少く着合候由聞得候、

自然之時者續無油断様ニ頼之由也、又入田方へ敵可相
絡之通聞得候由、高知尾より高崎越前守まで書狀來候、
是を佐土原より御持せ也、

182 「義久公御譜中」

天正十四年九月廿四日、吉利下總守自三城至宮崎、寄捷
書於上井伊勢守曰、封疆更無有變異、又并尻伊賀守從八
代所持來之封物、往適地無所障埋之者也、

天正十四年九月廿七日、使長壽院・大善坊赴京師、是亦
去春有遣鎌田刑部左衛門尉告於 殿下之事、殿下有細
密之令、再欲告愚意、則刑部左衛門尉罹病痾不能、以故
如斯也、

183 「御文庫三番箱」卷中、「義久公御譜中ニ案文在之トアリ」

去春差登使節候之刻、万般御才覚故凡相調下向仕、欣悅
不可過之候、抑被仰下条々、以鎌田可申伸覚悟候處、從
途中令所勞、未得快氣候之条、先々爲御返答兩使申付候、
殊若輩候之間、諸篇可被加御指南事頼入候、隨而初秋之
比、筑州境之干戈無別之子細候、連々表裏之者依致増長、
且者勵京儀之忠懃、且者爲懲領内之惡黨、遂一戰過半任

存分候、聊以對京都隣邦、毛頭不存緩疎候之處、四國・中國衆至當方被引卒之段、普風聞、更不令納得候、是非共邪正御糺明之儀大望候、仍沈香參斤・南蛮笠考進之候、寔補祝儀計候、恐々謹言、

九月廿七日

修理大夫義久

謹上 石田治部少輔殿

「上包全シ、略ス」
「長壽院 御使僧之時 天正十四年」
大善房

184 「御文庫廿二番箱五卷中」

関白殿

去春奉對 関白殿、差登鎌田刑部左衛門尉候之處、以御媒介拳達之儀、謹自他之覚忝候、抑蒙仰条々、早速雖可申理候、夏已來被妨肥筑境凶徒于今遲怠、非本懷候、此謂先々爲遂貴聞、乍卒尔若輩申付候、旁可然様御精慮所希候、仍何々令進上之候、宜預披露候、恐々謹言、

九月廿七日

関白殿

185 「御文庫三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

就連々御無音、去春使節指登候之刻、 関白殿御丁寧之

段、外聞実儀畏悅至極候、尤急速可展報礼処、鎌田刑部(政廣)左衛門尉從下向中途吳例、未得快氣故、相似無首尾候条、長壽院・大善房申付候、弥對京都無緩疎、甚深可啓入候、旁以可預御取合事本懷候、仍任見來、色糸五斤進之候、誠補微志計候、恐々謹言、

「朱カキ」
「天正十四年」九月廿七日

義久「御判ナシ」

德雲軒
（全宗）
施藥院

186 「御文庫廿二番箱五卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

於筑州若杉、鎮胤兄弟被遂戰死事、連々忠懃之鬱憤吳他早、至長虎丸向後倍可属感慮之旨、聊不可有改易者也、仍狀如件、

天正十四

九月 日

星野殿

「束紙ニ」
「天正十四年 星野殿へ 御感狀」
九月 日

187 「全卷中」「義久公御譜中案文有之 志賀道輝へ之案也トアリ」

雖未申馴候、至道扱者連々熟談之条、以其續乍楚忽令啓達候、仍去歲一通ニ而、愚意之段凡申越候之處、入方媒

「案文有之」

(本文書ハ一八四号文書ト同文ニツキ省略ス)

介如何候之哉、不相届返來候、其筋于今無違易染其筆候、然者世上轉變之儀難測事候之故、殊御親子御間一致於被仰結者、當末幸之儀候、兼日之御覚悟粗承度候、若又内訴之儀共候者、無腹藏可示預事所希、御報可待入候、恐く、

九月 日

188 去春以鎌田刑部左衛門尉、連々無音之段令申候之處、若輩故不達旨趣儀慮外候、厥后尤雖可申通候、對肥筑表催少行候之儘于今押移候、然ハ帶 関白殿御下知、至餘國者曾不致違亂候、洎底長壽院・大善房申合候、倍御入魂所庶幾候、仍乍輕塵生糸 三拾斤令進之候、聊補空書計候、恐々謹言、

「カキ入」
「十四年」九月廿七日

修理大夫義久

謹上 羽柴美濃守殿

「此御案文、御文庫三番箱一卷中ニあり、札合ス」

「義久公御譜中、案文有之トアリ」

「御案文欵」

(本文書ハ一八六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「義久公御譜中ニアリ」

「御文書三番箱三卷中」「義弘公御譜中案文有之トアリ」

今度忠節成就之刻、本領之事宜任懇望、併厥境無案内之条、入組等所勘之砌、倍可致熟談者也、仍證文如斯、

天正十四年 九月 日

(義弘) 義珍

志賀安房入道殿

「義久公御譜中」

天正十四年九月廿八日、土持氏自縣至宮崎、贈簡書於上井伊勢守曰、千斛權兵衛尉自四國渡豊後來、又豊後土卒少々發出、當日在于宇目村舍、又自高知尾至佐土原有注進、豊後土卒有欲攻入田氏居城之聞矣、

義久欲退治豊後州之企有其故、曰、大友氏所積怨於我國之憤無所欲止、夫薩隅日三州者、正二位右大將賴朝卿以降所領知之地也、以故撫恤憐國、安堵四民、遐邇貴賤無

不來附、庶乎不失以大事小之禮、然而日向州伊東氏背我爲敵、屢狂我之土地、舉所救亂誅暴之義兵討之、渠之軍衆已敗乘死之際、僅遁出奔于豊後州矣、於茲乎、大友氏欲救伊東氏還之於故鄉也、先是天正六年戊寅之冬、率太軍來圍我之日州新納院高城、然而失利於一戰、悉以敗北大半亡其軍矣、今也不止其憤、反聞薩摩退治之免於有請關白秀吉公矣、吾熟思之、先渠之計策、以不誅伐之者、豈異坐而待亡乎哉、遂欲催發軍衆之際、肥後八代之土妻田信濃守・高橋駿河守馳一价曰、豊後州入田宗和・志賀道益「勇」背大友氏屬薩摩方欲致忠功、其故何哉、道益者宗麟之婿、而背宗麟之心將迨切腹、仍一門中爲評議請有免、而不許焉、不得已而去居城、憑志賀播磨守入菅迫城、入田宗果亦不合宗麟之心、殆乎庶幾切腹、因茲屬薩摩之旗下有欲報怨之深念云々、義久聞此之言、以爲所天之界我之指南也、乃召新納武藏守忠元曰、宜廻豊後退治計策、忠元承諾、即使仙鏡房往入田宗果之城問所背大友氏之故、而後俾御舟之卒勘丞及忠元之陪臣中馬源丞者彼城之試實事細大、又使濱田民部左衛門尉・山口大藏助往菅迫城、問道易所背宗麟之故、此時道易・播磨守相共議、以見岡之城於兩使、而令赴歸路也、於茲乎、入田氏差吉良甲斐

守・阿南勘解由次官於八代、見兵庫頭義珍也、其後義珍遣楠木右京亮・中馬源丞往志賀氏之城問眞僞窺實否、于時俾大塚右馬助・新野新介者達降薩摩之故、因茲遣野村与三右衛門尉及忠元之陪臣尾崎彦兵衛尉・中馬源丞等於志賀氏之城、納兵道密法之針於其城矣、

天正十四年十月八日、土持氏自縣差使僧於宮崎、謂上并伊勢守曰、我之領內有矢野內藏助者、去四日志賀道輝通于內藏助曰、土持殿先年遺恨有所難止之者乎、不問可知、然而今度有京都之加勢、而爲天下之鬪戰、則廻思慮止憤懣可乎、以此言問伊勢守、伊勢守報曰、先隨渠之所言、豊後模樣京都加勢已下各可細密尋問者可乎、此使僧亦言、千斛權兵衛尉率二百騎許來在高崎邊、長宗我部氏率二百騎許在丹生島、相從士卒不帶兵器、宛不異商人也、

天正十四年十月、兵庫頭義珍爲大將率軍衆、發於肥後州向於豊後州、相從將等弟左衛門督歲久・同三郎次郎忠隣・島津右馬頭征久・同姓圖書頭忠長・川上上野介久信・新納武藏守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・樺山兵部太輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟・同姓肥前守久春・同姓筑前守・鎌田尾張守政年入道而稱官稱・同姓出雲守政近・川上左近將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊助・白

濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈正忠兼寬・數根藤左衛門尉・大野七郎久高・伊勢彌九郎貞昌以下騎步三萬七、^{〔六本〕}百餘騎討入南郡、同十月廿一日、到乎阿蘇郡野尻設乎陣柵、同廿二日、陷高城之時、獲數十之敵首也、其中強敵一人伊勢彌九郎得之、實年十七也、義珍感褒不鮮矣、入田宗和・志賀道益素合心於薩摩、而待軍衆之到來、如大旱之望雲霓、丁此之時、宗和・道益引率從卒一千有餘來爲指南、是以乘夜入宗和之城、松尾壘及鳥嶽城皆陷走矣、其後進津箇牟禮、城主戶次攝津守統貞入道源珊者也、同廿四日、圍其城、宗和・道益以籌策源珊下城、則義珍入彼城、道益之老父道輝與道益之子小左衛門尉親次者、據岡城稱病龜縮、其地峻峻、且有大河之不可徒渡者、以故評議未決之際、義珍之步卒乘夜密進登其城、敵兵何不知乎、當追來時超壁、而欲遁去不能、忽落于城墜死矣、道輝者入田宗和・赤星備中守之親戚也、是以差使節誘出質爲和平、道輝依其言、所以粗應諾也、弟中務大輔家久爲日向口大將、天正十四年十月十四日、進發於佐土原、自縣封疆向豊後州、所相隨輩上井伊勢守覺兼・吉利下總守忠澄・土持左馬頭・山田越前守有信・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・樺山

194

〔北郷加賀守三久譜中〕

於莊內到於肥後、兵庫頭義珍公之爲從軍攻入南郡、丁天正十四年丙戌、豊後發向之時、與兄忠虎俱十月十日發

193

〔北郷忠虎譜中〕

安藝守忠助已下一萬餘騎、踰越梓山討入三重、教吉利縫殿助爲矢合、^{三十四歲、木性、撰木性故如斯、}而後近郷諸壘村舍悉放火去、而後伊集院下野守・同姓美作守・本田下野守・上井伊勢守領軍衆振武威、而陷結方城、^{〔緒力〕}則家久屯陣於盤東寺、使前鋒掃退進來強敵、豊後半國已攻平也、義久有祭地祇、其齋既終、則十月十八日、率軍衆發首途、其夜占一宿於脇本、而赴日州之封疆三城、^{〔塩見・門川・日知屋、在於〕}鹽見矣、

同十四年十月十日、自府內至豊前境置警衛之將、於此忠虎拔於肱・矢藏兩城、從軍戰死者許多也、

同月二十一日、忠虎・三久爲兵庫頭義弘公之從軍攻入南郡、丁陷鳥嶽城之時、先陣球麻之兵其次兄弟、率軍登城內屋上壓軍、指揮斬獲夥、此時忠虎家臣津曲玄番兼詮・前原彌七郎國實戰死、

「陷鳥嶽城之時、先陣球麻之兵其兄弟、率軍登城內屋上塵軍、而指揮斬獲敵兵、

195 「義久公譜中」

先是使文之和尙・鎌田刑部左衛門尉許九州於 殿下秀吉公、公報曰、可爲大隅薩摩日向及肥後半國・筑後半國・豊前半國島津氏領知、豊前・筑後・肥後各半國加豊後界大友氏、肥前一國賜中國毛利氏、筑前一國可爲 公領也、其令已定、則兩使未辭京師之際、達捷書於薩摩矣、聞此之言深憤曰、九州悉以爲島津氏土地則可乎、不然兵革不可敢止、乃增益軍威修鍊干戈、丁此之時、小寺官兵衛即黑田如也、仙石權兵衛尉・中國毛利氏等所以分割國郡之奉重任、而下向鎮西也、仙石氏渡豊後來赴豊前矣、小寺氏與毛利氏同渡豊前、各欲行分國之令、而筑前城井氏・長野氏・秋月氏・高橋氏等深屬薩摩方不可也、此間薩摩方之太軍鳴鑼鼓如雷電逼迫豊後、殆乎已破却半國矣、於茲乎、大友左衛門尉義鎮入道宗麟・同左兵衛尉義統聞此變事、則周章驚躁魂魄飛散、自豊前歸豊後欲防禦、而忘其道矣、漸而築一陳於府內上原、俟敵兵進來而已、

196 「義久公御譜中」

稱利滿壘者去府內不遐遠、家久率軍衆攻彼城、即日城下悉以破卻、而唯本城未陷、然而所圍堅密不進攻不退去、徒俟京勢之所以競來爲後責矣、於此之時、十二月十三日、大友左兵衛尉義統・仙石權兵衛尉與土佐之長宗我部彌三郎・秦信親・讚岐之十川隼人佐政泰・尾藤甚右衛門尉等率太軍來、欲侵家久之利滿陣、吾軍潛隱城麓林間、而待敵兵渡川流進來接兵刃之有佳期、漸已悉濟川將通城中、以此之時爲得佳期、發出我之軍衆對之合戰散火、初也京勢勇氣宛似穿鐵壁、終也匪童周章捨兵器競先敗走、不測川流淺深、涵溺所以死去之者未知幾多、豈異落葉之浮山川隨下流乎、于時斬戮秦信親・政泰、大友左兵衛尉・仙石權兵衛尉・尾藤甚右衛門尉此尾藤氏、殿下退治北條氏、且征陸奥州、而歸陣之時、爲斃束手而出頭矣、殿下戮之於相州小田原之地云云、等惜微命以北去矣、而況於步卒乎、高田者限於里門、府內者限於祇園川原、追亡逐北而伏屍矣、就中京兵之敗宛如湯于雪、實非筆舌之所得而伸、吾軍乘勝、其夜以稱延岡之地構一陣、燒篝火發闐音也、雪月囊交薄雪、冒戎衣、手足共以冰寒、然而唯有勝軍之勇、無一人之屈寒氣者、義統懼薩摩軍衆之陷居城也、翌夜委府內退高崎、即日家久入府內、則義統此地亦不得支、而又

「義弘公御譜中」

去高崎奔走乎豊前龍王也、未知仙石氏之保露命、在何地焉、
 天正十四年十二月廿二日、義珍入志賀道易居城、則白仁シノ
 之志賀道運亦降參矣、一萬田・滑・瀧田城皆以陷焉、同
 廿四日、換陣於朽網城、而越年於此地也、

志賀播磨守屬薩摩旗下、因茲息男左馬助兄弟稱質出焉、
 預置之於橋木右京亮矣、大友左兵衛督義統命于岡之城守、
 天正十五年丁亥正月七日夜中、發遣多勢於阿蘇、圍左馬
 助之居處右京亮之宅、右京之士卒二三百人對之防禦盡筋
 力之際、右京之同姓三九郎左馬助之被官田代藤左衛門尉
 遂戰死、且被傷者多矣、不得以無勢禦有勢、退于坂無之
 近隣、而後右京亮使廣瀨惡左衛門者告件事於菅迫城也、
 播摩守聞此事、則與當城守將伊集院三河守・犬童休意俱
 議、而設伏兵於敵軍歸路、忽得勝利斬敵首者七十三員、
 其外虜者牛馬共二百有餘、於此戰場球麻之士犬童又十郎
 敵將對戶高兵右衛門尉戰死、被傷者不遑記之也、

伊東氏在日向州御家人中而匪嘗守護之背教令、且恣暴虐、
 島津氏之爲寇敵者尙矣、丁 太守修理大夫義久公之世、

彌逼我有土、由此運籌策漸漸犯敵地、天正五年丁丑季冬、
 率軍衆迫渠黨徒、一壘已陷、則諸壘共不得支、義祐逃去
 豊後矣、豊後太守大友氏流滅於伊東氏之舊地、謂再入伊
 東氏於故郷、天正六年戊寅孟冬、率豊肥筑前後六州之大
 軍來、圍我日州高城、未嘗有勝利、反會敗北失騎步大半
 之凶矣、島津氏雖得大利、惡渠之不正其憤未敢止之際、
 依 織田上總介信長卿之命、緩其情止鎗楯既成和平矣、
 雖然大友氏動侵島津氏所領肥後・日向封疆者孰不知之乎、
 此歲天正十四年丙戌冬之孟、義珍爲大將自肥後向豊後、
 相從副將・騎將、島津左衛門督歲久・同三郎次郎忠隣・
 同姓右馬頭征久・同姓圖書頭忠長・川上上野介久信・新
 納武藏守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・樺山
 兵部大輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟・同姓肥前守久春
 ・同姓筑前守・鎌田尾張守政年入道名・同姓出雲守政近・
 川上左近將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊助・白濱
 周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈正忠兼寬
 ・敷根藤左衛門尉・大野權左衛門尉久高・伊勢彌九郎貞
 昌都合其勢三萬七百餘騎、自肥後之道路入豊後之南郡、
 十月廿一日、到于阿蘇郡野尻設陣柵也、同廿二日、攻高
 城而獲敵首者數十、城亦乃陷矣、于時貞昌斬強敵一人、

今也十七歲而有此勇猛、諸將無不感者矣、入田宗和・志賀道益素歸心於薩摩、而待發向之不早、宛如大旱之望雲霓、以故宗和・道益引卒一千有餘從兵迎來途中、而爲指南矣、是以乘夜暗入宗和之居城、則松尾及鳥嶽之城皆放火委而退去矣、翌日迫于片加世田城無程入手裏、柏瀨城入置守兵也、一万田・鎧嶽兩城共降參矣、久多見城亦入手裏、故入其城留滯之際、滑・瀧田兩城陷焉、津箇半禮城主戶次攝津守統貞入道源珊者未屬旗下也、

天正十四年十月廿四日、諸將進津箇半禮圍其城、宗和・道益廻策使源珊下城、則義珍入津箇半禮城也、道益嫡子道輝・其子小左衛門親次據岡城稱病痾龜縮矣、其地峻峻、且有大河之不可徒渡者、是以未決其城陷與有評議之際、義珍執鞭之士乘夜暗密進登其城、則敵兵怪以追欲屠殺之、退去超壁欲逃不能、而忽落于城墮死畢、道輝者入田宗和・赤星備中守之親戚也、故遣价使曰、早可出質屬薩摩旗下焉、道輝聞其言粗相應矣、

島津中務大輔家久爲大將、山田越前守有信・吉利下總守・土持左馬權頭・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・上井伊勢守覺兼爲副將、領一萬餘騎自日向封疆躡梓山入三重、近鄉諸壘村舍悉放火去、而陷緒方城

以設陣柵於盤東寺、使前鋒拂除進向敵兵、通价使於南郡決評議、而後家久之隨兵警固三重・年滿、義珍之從軍鎮護鎧嶽鷲臺城矣、

先是 大守義久公使文之和尙・鎌田刑部左衛門尉訴九州於 殿下秀吉公、公曰、聞九州過半入島津氏手裏、今也可去與肥後・豊前各半國・筑後一國於大友氏、又去肥前一國於毛利氏、可爲筑前一國於公領、此外可許島津氏、宜容此言速爲和平、然則去歲七月以前、刑部左衛門尉再可參洛、否則秀吉自將七月可發向云云、薩摩諸將聞此言、有言曰、九州之地不漏寸土屬我太守可乎、不然則兵革豈可停乎、增益軍威修鍊干戈、所以破卻豊後半國也、丁此之時、小寺官兵衛尉後號黑田稱如水也・仙石權兵衛尉・中國之毛利氏、奉分割國郡之事下向鎮西、仙石氏渡豊後而赴豊前、小寺氏・毛利氏同渡豊前欲行分國之令、而筑前州之土城井氏・長野氏・秋月氏・高橋氏等心服於薩摩、而不容於小寺氏・仙石氏之言、薩摩諸將彌增勇氣矣、大友左衛門尉義鎮魂魄飛散、身體驚躁不知所防禦之道、而與仙石氏俱來於豊前、而議構陣於府內上原之地矣、

十二月十二日、大友義鎮・仙石權兵衛尉・土佐州之長宗我部彌三郎・秦信親・讚岐州之十河隼人佐政泰・尾藤甚

「右馬頭征久譜中後以久」

右衛門尉等率太軍到年滿、侵中務大輔家久之陣、當兵又已接之時、屠殺秦信親・政泰、則敵軍敗、而仙石氏・尾藤氏等纔保微命分散不知其所之、而況於步卒乎、追亡逐北伏屍者不知幾百千也、義鎮退去雖曰入府內城、家久乘勝利振猛威、義鎮痛懼其勇氣也、不爲一戰去府內城遁高崎城、以故家久不血刃入府內城、彌輝軍威、義鎮不得暫支、又去高崎城出奔豊前州龍王矣、

義珍在津箇牟禮城之際、三重軍衆得勝利、聞入府內之幸事、則我之諸將半曰、速到于府內、半曰、往于府內、則南郡如之何乎、且復秋月三郎種實有俾价使馳以爲懇望曰、所冀早發向玖珠郡、放火遠近悉以破卻、則匪啻秋月氏幸事、高橋氏亦不去領地、可遺卑家於子孫云尔、義珍聞衆議三樣、而未得先後之定方所、又招諸將欲決可否、而群議區區而不能也、於茲乎、質所疑于神靈、而依著筮十二月廿二日、入道益之居城、則白仁之志賀道運亦降參也、一万田・滑・瀧田之城共以陷焉、岡城主志賀氏稱虛病不出頭、然而先以措之、十二月廿四日、換陣於朽網也、

天正十四年丙戌冬、太守義久主爲退治大友氏、使令弟

「中務太輔家久七郎譜中」

兵庫頭義珍主後義弘主、中務大輔家久爲先鋒將、自肥後日向兩方發向豊後、征久與諸將共從于義珍主而進發、攻城野戰之功不遑枚舉、

豊後州之太守大友左衛門尉義鎮積怨於我國者多矣、我之太守積累遺恨無所欲散、由是天正十四年丙戌十月、催日向大隅薩摩肥後筑後已下所領之軍衆、赴于豊後、兵庫頭義珍主領三萬七百餘騎、自肥後封疆發向南郡、家久領一萬餘騎、踰梓山之險路、其山下佐伯之內有古壘、攻之忽以陷焉、而入三重欲陷松尾城、爰三重市人有稱紹把者、子孫一族繁茂、滿金銀珠玉於倉庫、積米錢財器於宅中、嘗聞國郡貴賤士卒大半應渠之言、是以先是家臣卒將使長田播磨・田中筑前爲白浪往三重賣馬駒、丁此時也、兩輩時々入紹把之宅漸爲知音、而後密語曰、若我太守運逼當國之謀有發軍衆、則卒一族家臣呼播磨・筑前、而速迎來、作數箇榜木以昇之、堅盟約期後來、而兩輩歸去矣、今度欲攻松尾城、則紹把卒一族子孫家臣已下、簞食壺漿以迎我師、故不勞而入手裡也、其後陷小牧・野津兩城、爰丹生島者大友左兵衛尉義統居城、而柴田入道レイ能在于此、

岡之城主志賀小左衛門尉親次、父之入道道輝共未降旗下、而爲通路之障、是以遣甲斐右京亮及高知尾士卒・予之臣等守小牧城也、府內近所有稱利滿之城欲陷之、而卒多勢

進城、下外郭已以破却、此時家臣田中筑前遂戰死矣、我軍不去城下者一兩日、城裏宛如籠鳥、故敵兵窮困、而無兵

術請和出質、移時刻之際、十二月十二日、大友左衛門尉義鎮・仙石權兵衛尉・土州長宗我部彌三郎・秦信親・讚

州十川隼人佐政泰及尾藤甚右衛門尉已下欲爲我軍陣之後攻、引卒大軍鳴鼓鎗來矣、我陣不發一言潛于林間宛似無

人、故敵兵彌爭先以渡大河將入城中、悉待所渡川之佳期、指揮我之軍衆發於林間、對太軍以競戰、初也上方之兵有

不可當之勢、終也無一人之接干戈者、不願瀨瀨任足敗走、或溺死川流、或脫甲冑捨兵器踊去、追亡逐北、高田者限

里門、府內者限祇園川原、伏屍者不知幾百千也、此時討殺秦信親・政泰、則仙石・尾藤兩輩纔保微命逃散不知其

所之、其夜府內近所有稱延岡古壘、入其壘燒篝火、終夜吐氣、囊交薄雪滌甲冑寒身體、而乘勝不屑勇氣有餘、義

鎮聞剛聲懼猛威也、其夜捨府內退高崎矣、家久不血刃、而同十三日入府內、則義鎮去高崎、而向豊前龍王以奔走

也、如此聞彼此之勝聲、則朽網某亦降于義珍主之旗下、

故義珍主替陣於球珠日田、家久越年於府內、迎東皇於異鄉揚霞盃祝萬歲矣、

200 「圖書頭忠長譜中」

天正十四年十月、兵庫頭義珍主爲豊後征伐之大將、率三萬七百餘騎、自肥後之封疆入豊後之南郡、忠長亦走隨其軍也、

201 「樺山兵部太輔忠助譜中」

天正十四年丙戌十月十五日、催薩摩大隅肥後軍衆發向于豊後也、肥後口之大將者 兵庫頭義弘主、率三萬七百餘騎攻入南郡、日州口大將者中務大輔家久主、率一萬餘騎討入于三重也、忠助者爲家久之從軍矣、南郡者岡之城、三重者丹生之島城、唯依地利所以警固者亦不緩、故不得陷耳、夫豊後半國已敗矣、是以大友不可敵于我兵、兼慮知之乎、請救於 將軍家秀吉公、秀吉公應諾、而仙石權兵衛尉・土佐國守長宗我部右衛三郎・十川隼人佐政泰爲大將、有著于豊後府內之聞、府內近邊有稱利滿之城、家久主爲大將攻件城、已破下柵、只上城警固不緩、吾軍敢未退、俟京勢之到而爲後圍、于時大友左衛門尉義鎮・仙

石權兵衛尉・長宗我部右衛門三郎・十川隼人佐等襲來、而欲利滿之爲後園、吾軍隱城麓之藪陰、漸敵勢渡川以通城裏之時爲佳期、而各發向競前攻戰、京勢初也欲穿鐵壁、終也敗走、而不顧瀨瀨而涵溺者多矣、且亦討捕於長宗我部・十川、限於高田里門、府内者限於祇園之川原、追亡逐北、就中京勢之敗走、筆舌之欲伸、而未嘗有可比類之事、味方以稱延岡之古城構一陣、燒篝火發鬨音、十二月霽交之薄雪冒戎衣、手足共以宛冰寒、雖然勝軍之勇、無一人之屈寒氣者、地下之者亦與京衆俱翌夜捨府内逃去畢、故味方即入府内者也、南郡亦朽網某屈旗下、是以朽肥田所所入手裏也、家久主於府内爲越年也、

202 『禪山紹銀日記』

一天正十四年丙戌、薩隅日肥後催數千騎豊後江押懸る、先日州口ニ者中書御大將、肥後口には武庫様御大將ニ而、義久様ハ日州迄御出陣候、然者南郡には岡と申候城、三重口ニハにうの嶋と云城こたへたり、其上こたへたる城も有しに、從京都 大閣様大友へ御加勢也、然者爲大將千斛權兵衛・土佐之國の住人長曾我部以同心令渡海、府内と云処ニ勢揃して有由聞得けれ共、彼

府内近き利滿之城を、中書大將にて責被成けるに、下城仕拂、上城計ニ而敵こらへける、其麓ニしかと責奇、定而京衆後卷仕候半、其時一戰可有とて一兩日待處ニ、城方茂又人質を出し、時刻を延引する処ニ、見次之衆如雲霞のおそひ來る、先大友殿・千石・長曾我部三手之衆、川之向を跡方までとりつゝむ、雖然城麓之藪之蔭に堅まり居る、川を渡し城衆江取合、京勢皆々川渡取時分、能比也とて打出及合戦、京勢初之儀勢にも不似崩立て、瀨瀨共不云追はめられ、高田と云城之城戸口迄責付、府内者前之祇園之川原まで追責、中々京衆北軍之爲躰難尽紙面、一日抱候而次之夜、京衆・地下之者跡先ニ府内を逃去る、其間身方ハ延岡とて城方聲懸なる古城江取籠て、篝を燒吐氣を作り、比ハ十二月、ミそれまじりの薄雪に手足氷ニ雖被閉候、勝軍成故いさみの、しる、次夜敵府内を捨て逃行之間、府内江打入也、此等之由朽網方申入ける間、武庫様御知行ニ而、廳頓而くすひ田など云所へ御座を直されける、

203

「上井日記」

拾月

▽一日、祈念等如例、香本坊御酒被振舞候、夜前之書狀

共見申候間、急候て罷歸候、肝付藏人殿同心申候也、

此日も各普請共申候、(上井黨兼)恭安へ參候て御暇乞申、如宮崎

罷歸候、兒玉隱岐逐処にて、各御酒持來会尺申候也、

從夫酉刻計打立罷歸候、殿所にて、又彼邊之衆御酒持

來会尺共申候、左共候へハ、夜入候つれ共、急候て宮

崎へ夜半計歸着候也、

一二日、種々細工等させ候て、見申候、△

一三日、▽毘沙門へ別而祈念申候、終日讀經など仕候也、

此日佐土原へ(柏原有期)柏周進入申候、堺目説、其後如何様ニ聞

得申候哉之事、御行必定候、御日取定由申候、當國中

御觸時分之事、諸篇就御行、覚悟仕候する事等候之哉

之事共也、▽躰而、柏周(鎌田政近)鎌雲へも進之候也、同前也、

一四日、▽柏周歸宅候、△從中書申入候条々、いつれも

尤被思候、御日取委きかせられ、其心得被成候、當國

中御觸之義、今少承合可申渡由也、鎌雲よりも同前之

返事也、▽柏周へ中書御物語ニ、一兩日中、(島津數久、東)又七殿御

兄弟此方越ニ御出可有由共也、△

一五日、▽長野談路守を以、佐土原へ御兄弟越ニ御立可

有之由候、一定にて候哉、可目出之通申候也、明晩必

御出可有由承候也、△此日敷越被歸候、申上候条々御

納得候、御行無相替義候、鹿兒嶋之事御柴にて候間、

太守様者來十八日御打立之由也、鹿兒嶋も諸軍衆之事

者、來十八日ニ縣へ越着候様ニ被仰付由也、船大將之

事ハ未定候、追而可承由也、矢合役者等校量可申由也、

▽此晚大寺源六殿無沙汰候として被來候、樽一荷預候、

參會申候也、(鎌田兼政)鎌源へ礼義被成候、拙者も可來之由候間

其分候、衆中なともあまた被來候、種々会尺、又持せ

之酒肴各賞翫共申候也、

一六日、又七殿御來儀之由候処、天氣無尔候間、使節

を以、今日ハ御出御無用之由申候、同佐土原よりも御

使にて、今日ハ入御有ましき由也、此日當所有足・無

足已下ニ至まで、御酒振舞候、次ニ武具揃候て見申候

也、終日假屋処にて酒宴にて候、此日相識共仕立候也、

一七日、楯之文などいたさせ見申候、此晚又七殿御越之

由候間、御迎衆など申付、中途まで參せ候、拙者も穂

村のこたく罷下候、又七殿御兄弟、越之尾のこたく直

ニ御出也、拙者も罷出候、食籠肴にて御酒持せ申候て

あけ候、從夫越ニ御立候、鳥然と不越候、併十計留候、

生鳥などにもさせられ候、御宿瀬戸山大藏丞処ニ申付

候、彼処へ拙者御供申、躰而御会尺申候、御座躰主居又七殿・拙者・東郷刑部少輔、客居東郷殿・本田越後守・竹下珠舜・敷祢越中守・柏原周防介など也、深行(見)まで酒宴御雜談共にて候、又七殿よりも御酒被下候、賞翫共申候也、此朝谷山志(介カ)广拯鹿へ進上申候、△

一八日、▽払曉御粥參候而、躰而越ニ御立候、我々ハ沈醉故御跡より參候、此朝も越無尔々候、乍去七八留候也、從夫直ニ御歸之由候つれ共、川之水鳥など御供申候て見せ申候、又景清(平)之石塔など懸御目候、色々なくさめ申候て、又大藏丞処にて御会尺申候、御座衆大略夕之衆也、衆中又地下衆など御酒進上候、未之刻計まで御酒宴共也、從夫御歸被成候也、△從縣使僧にて候、大藏丞処にて承候、柏周意趣被聞候、去四日志賀道輝(親守)前より、あかの村ニ罷居候矢野内藏助と申者まで被申越候ハ、土持殿事(久總)、先年之遺恨深重ニ候らん、然共今度ハ京都より加勢共候、左候へハ、天下之弓箭ニ罷成候間、是非以分別入へく候由申候、ケ様之義、即拙者まで被仰由也、道輝より被申候趣、具被仰顯候、尤肝要ニ存候、先々あなたより申旨ニ、何と様にも任られ、京都見次之躰、又ハ豊後國中様子等被聞拔候て可然由

申候也、右説にも、(仙石秀久)千斛權兵衛二百程にて來候、高崎邊ニ居由申候、長曾我部是も二百計にてこの嶋ニ在由候、召烈候衆も兵具等然と不帶、商人など様の無分者と聞得候由也、又去月合之比、本々縣之者にて候、此間豊へ罷居、頃又落來候、其説にも同前候、豊下々

ハ加勢之躰見候て、結句頼少存由申候也、▽此晚越ニ立候てより、城之様ニ罷歸候也、衆中十人計同心申候、△一九日、▽早朝同名右衛門尉、佐土原へ參せ候、御兄弟稀く御越候処、御無会尺申たる由共申候、次ニ者縣より昨日被申候分、委佐土原へも申候由候、彼条かこしまへ申上候て可然候する哉、如何之由申候也、△從中書、久木崎伊賀拯を以承候、御談合之御衆盛相替、典廐・北郷殿(神心)、肥州へ御立之由聞得候、笑止ニおほされ候、殊更庄内衆不參候ハ、此口一段無人數たるべく候、せめて肥州へ不罷立程之無足・足輕等ハ、誰役人一人被召烈、此口へ參候様にと、鹿より可被仰由申候而、可然おほしめし候、矢合之仁之事、木性可然由候、是又分別可申由也、▽御滞留処、是茂申上候て可然由也、兵船大將・乘衆等、彼是油断候ハぬ様にと承候、菟角御談合可有事等多く候、佐土原・此方かけさ

せられ候てハ不事成候間、中書者十四日御打立可有おほしめされ候、拙者も其分候ハ、三城邊にて諸篇御談合有度由也、即御返事申候、拙者も御用候間、前一人進上申候、定而參着可申候、蒙仰条々、尤存候、庄内足輕之事ハ、御存分のことく、谷山名字之者にて鹿へ申上候、其余ハ得其心候由申候、御打立之事、十四日尤可目出候、左候ハ、拙者も御供可申由申候也、此晚右衛門尉罷歸候、中書御返事、縣より被申候子細、かこしまへ申候する欵之由、尤被思召候、已後之爲にて候間、申上候て可然由也、御滞在処之事、是又申上候て可然候由也、此日諸所へ御續之觸狀遣候、野村大(兵衛脱カ)炊尉被認候也、使者にて申候処も少々候、太守様者、依御柴、來十八日御打立之由候間、廿一日爰元八代へ御着たるへく候、如其兼日申渡候、御中間進上可有由も申也、軍衆者十八日・九日、縣へ着揃候様ニ、地頭くハ御談合之義可有候条、十七日越着可然由申渡候也、從都於郡使者也、御行之義、無相異欵之由也、兼日申付候御楯二帖、被持せ候也、△

二十日、▽野村大煩兵衛尉(成)以、佐土原へ申入候、土持殿より被申候義、かこしまへ可申上候へ共、さのミ不入

事候欵、御滞在処之事も、太守様當國へ御着已前ニ、手合者可有候、其様躰ニより、高城邊にて候する欵、又縣表たるへく候欵、各談合申、中途まで追可申上之条、當時者何方と申候ても相申し候、庄内足輕衆之事、是又先使にて具ニ申上候間、又と不申及存候、然者今朝飛脚、鹿へ進上可申存候つれ共、先く無其義之由申候也、此日鹿兒嶋より、法元孫太郎來候、それに御傳言候、御打立之事者、御柴にて候間、御鬪御申候、御柴過候て可然由候間、來十八日晚氣、脇本まで御打立可有候、此口之諸篇御頼被成候、鹿兒嶋衆も悉十二日・三日打立之由也、諸篇油断申候ハぬ様にと承候也、此晚野大被歸候、中書御返事申入候条々、御納得候、然者入田方(義美)より書狀到來候、就夫只今御使書可給御覚悟候処、能仕合、使者進上申候間、被仰候由候て、入田よりの狀ニ御狀被相添、御持せ也、△入田書狀披見候、豊へ千斛權兵衛來候へ共、頃豊前表時枝(季也)ニ中國衆渡海候て可取啓由候、黒田官兵衛彼口候条、千斛も今月二日彼方のことく陳替必定候、義統を始豊衆皆と彼方へ罷立候、南郡にハ朽網(鑑康)・一万田計居留候、(鑑美)然者宇目口之事、皆と留守にて候、能仕合にて候間、

先く二三千にて成共、早く乱入候て可目出由也、京都より使者として、からくり鏡屋罷下由候、御用心肝要之由共申候也、中書御狀も同前候、然者御吉左右之条、早く鹿へ申上候て可然之由、佐土原よりも被仰候、御滞在処等者、拙者分別之様ニ申上候て可然之由候也、戌刻計畫狀認、入田よりの狀、中書公之御狀相添、鹿兒嶋へ飛脚申付候也、▽大寺殿より返書來候、御出帳(張)之事、得其心由也、御中間之事難成由也、其外次第く返事來候、各續之事、得其心由也、△

一十一日、當所衆立之義、談合共申候、門・屋敷持通ハ不申及候、無足衆已下へ、寺社夫、五人間ニ一人宛配候也、▽平田新左衛門尉殿、久無沙汰候とて御座候、酒肴預候也、參合賞翫申候、此度御出勢様子共尋被成候、銘々ニ申候、穗北衆中寺田方、連々了簡之由候間、所領被召離候て可然通申候、春已來之事情、左様之義共承候也、其百性へ、先く此度ハ楯・矢種等殿役ニ被持候て肝要之由申候也、此日平田濃州内衆兩人被來候、諸篇調義之爲也、此方頼之由也、鹿兒嶋衆も昨日・今日悉被打立由共也、△

一十二日、▽藥師普逝へ別而看經申候、(九平)弥右衛門尉、先

日田野にて猪候(取脱之)、左様なるを、城内衆中ニ此方亭にて振舞候、酒宴共也、當所より肥州へ移衆勝負但馬守、方角之ことく明日罷立由候条、從中書飯野へ參候書狀傳候、又忠棟(伊集院)へ一昨夜從入田殿註進之趣、縣より五日前使僧にて承候義共申候、又拙者三舟へ噯候一名之夫遣之儀等具申候也、先日町田殿噯被成候する候時、辞退申候心底之事等申候也、本庄祇門寺酒肴被持來候、即參會申候也、兒玉隱岐逐從夜前來候、海江田衆立之様、談合承候て歸候也、△海江田も門・屋敷持候衆ハ不申及、無足之者共へハ寺社之夫遣候也、恭安齋も

太守様御立被成程之儀候間、駢候てハ不可然候条、先く來十五日御出船候て、縣表にて被聞召合候て可目出候、拙者茂十四日打立之由、佐土原より承候つる間、其分ニ校量申て候へ共、又く十五日可然由候間、如其打立可申由申候、海田衆之事、新名爪にて可待合由申候也、(江尻カ)飲肥之返書到來候、續之儀其覚悟有由也、御中間之事茂無油断由也、福嶋・酒谷へも即刻申越之由也、一十三日、吉利山城守殿へ使進之候、從鹿兒嶋矢合之仁木性可然之由候、御息相應候ハ、可目出之段申候、縫殿助殿廿四にて候、木性に候間、何と様にも校量法

第之由承候也、從清武、伊作州使者預候、此度御出勢之義目出候、然者當病にて候へ共、何としても乗物にて吾々同心とおほされ候、外見憚ニおほされ候間、拙者申延候様ニ頼由也、其上衆中先度岩屋にて、我等同心申候て仕合共よく候間、菟角宮崎衆中同前ニ下知申候へと承候也、返事、御懇志之義祝着候、殊ニ乗物にても自身立なされ候する由、劫者と申、別而同心可申候、外見之儀共是又御心遣入ましく候、吾々若輩さへ、病者にて候へハ乗物までにて、ケ様之時歩行申候、況老躰、其上病者之事、諸人存知候由申候也、清武衆上野伴介、先日岩屋にて我々同所ニ軍勞被申候、其後疵等無然々候て、無沙汰之由候て被來候、作州使同座にて見參申候也、此日都於郡へ江州總持寺住持、生得當國衆にて候、鹿兒嶋談合所御分別にて下向候て、黒夷寺之住たるへきニ相定候、其御方より使僧給候、自身御座候て礼義可有覺悟にて候つれ共、一兩日中陳立之由被聞せ候間、先々使僧以被仰理之旨也、即使へ參會申御酒寄合候、中紙預候也、又嶽米良殿久無沙汰之由候て、酒肴被持來候、羚羊など預候也、即參會申候、續等之義入魂有へく候由、有之儘申候也、

204

「島津世錄記」

一十四日、谷山志广介夜前歸候とて來候、御祈禱之卷數進上申候、御祝着之由也、今度御行之事、日限等無相違候、万事此口之事、拙者御頼被成之由也、兵船下知衆之事申候、比志嶋式部少輔殿父子候間、子息陸路を可然候、比式之事者兵船ニ乘なされ候て可然之由也、左候ハ、伊集院作州も病者と申、兵船に乗せられ候て可然おほしめされ候、早々申付候て肝要之由、伊地知伯耆守殿御使被成由也、即兩所へ沙汰寺を以申候也、此晚比志嶋殿より使預候、今朝沙汰寺以、兵船ニ乘被成候様にと申候、尤御意次第たるへく候へ共、此度ハ人數別而勸被成召烈候間、彦太郎殿召烈られ候分にてハ下知等とちまるましく候間、恠之由承候也、返事今朝使僧を以如申候、從鹿兒嶋仰之義候間、拙者菟角と難申候、堺目にて御談合之刻、出合候て可定之由申候也、此日も兵具など調させ見申候也、

一十五日、看經等如常、衆中各同心にて此日打立候也、

首途之様子等如恆例、

一太守思征伐豊後曰、大友積怨我國遺恨難忘、昔越王勾

踐不忘會稽耻辱，臥薪嘗膽十年教訓，終雪羞於吳、燕昭王遠思子會昭王父也、齊人所殺、爲之辱，卑辭厚幣以招賢知，乃報仇於齊，自古男子如有讎敵，不共戴天者衆矣，夫薩广大隅日向三國自右大將賴朝卿之時我家領帶之地，故撫恤隣國安堵傍民，遠近實賤無不來附，庶乎不失以大事小之礼法，而日州伊東背我爲敵屢犯我地，故以救乱誅暴之兵討之，彼勢窮垂死之際敗走豐州，及天正六年戊寅冬，大友欲救伊東還之於故鄉，率兵來襲我日州新納院高城，而反得敗北半失其軍，而今聞有訴望薩广征伐之謀於前關白秀吉公矣，先彼策不伐之異坐而待亡乎，遂欲催發兵之時，肥後八代之養田信濃守・高橋駿河守馳价曰、豐後國入田宗和・志賀道益背大友，因太守、有報我怨之志、於是義久主以爲幸也、乃召武藏守忠元曰、可致豐後征伐之智計云云、忠元承其命、遣仙鏡坊於入田城、聞背大友之志、而遣御船之兵勘丞及忠元之陪臣中馬源丞者於其城試實、故吉良甲斐守・阿南勸解由次官來見兵庫頭義弘主、其後遣檜木右京亮・中馬源丞於志賀城、而志賀之兵以大塚右馬助・新野介、伸降薩广之言、因茲野村與三右衛門尉者忠元之倍臣尾崎彦兵衛門尉「本マ、」・中馬源丞納兵道蜜法之針於志賀城、而及

天正十四年丙戌十月、義弘主爲大將向豐後、相隨運（事）來者、弟左衛門尉歲久・同子三郎次郎忠隣・從弟右馬頭征久・同圖書頭忠長・川上上野介信久・新納武藏守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・樺山兵部太輔規久・伊集院右衛門太夫忠棟・同姓肥前守久春・同姓筑前守・鎌田尾張守法号、寬柄、同姓出雲守政近・川上左近將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊助・白濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈正忠兼寬・敷根藤左衛門尉・大野權左衛門尉久高・伊勢彌九郎貞昌、都合其勢三万七百餘騎、自肥後之境討入于豐之後州南郡、同十月廿一日、到阿蘇郡野尻設陳柵、同廿二日、陷高城之時、得敵首數十、貞昌年纔十七而斬得強敵一人、義弘主感愛不淺、入田宗和・志賀道益素合心薩摩、而待之如大旱之望雲霓、於是宗和・道益引率隨兵千有餘來爲指南、乘夜入宗和城、松尾壘及鳥嶽城皆陷走矣、厥後進津箇牟禮、城主戶次源三者、俗名攝津、守統貞、同廿四日圍其城、宗和・道益以策、源三下城、則兵庫頭義弘主入津箇牟禮城、道益嫡子道輝俗名小左衛門親次、稱病龜縮、其地峻峻、且有大河之不可徒渡者、故評議未決之際、義弘主執鞭之士乘夜蜜進登其城、乃當敵

兵追來而欲越壁去、而不得忽陷于城隍死云云、道輝者宗和・赤星備中守親戚也、故請遣使出質、道輝應其言相相隨矣、太宗義久主亦在軍中、先自赴日州之境三城、暫駐於塩見、以弟中務太輔家久爲大將、山田越前守有信・吉利下總守・土持左馬權頭・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・上井伊勢守覺兼、其外人數一萬餘騎、踰梓山征三重近郷之壘放火、而後下野守・美作守・本田下野守・伊勢守率兵陷緒方城、則家久構陳於盤東寺、使前鋒掃其進來強敵、議於南郡之大將 義弘主、而家久之隨兵誓固三重・年滿、義弘主之兵鎮護鐵嶽臺城、先是 太守義久主使文之和尙・鎌田刑部左衛門尉訴九州於 秀吉公、公曰、大隅薩广并肥後半國・筑後半國・日向半國爲島津之土地、日向半國許伊東、豊前筑後肥後半國又添豊後賜大友、肥前一國與中國毛利、筑前一國爲 秀吉公之公領令已定、而將歸文之和尙・刑部左衛門尉之際、此事已聞於薩广諸將有云、九州地皆屬我主可也、不然則兵不可停矣、乃增益軍威修鍊干戈、是時小寺官兵衛尉黒田如水是也、仙石權兵衛尉兩將以分割國郡事爲任、而下向九州、仙石渡豊後而向豊前、小寺與中國毛利同行而着于豊前、

205

雖欲行分國之令、筑前之城井某・長野・秋月・高橋等專附薩摩、而不聞於小寺・仙石、薩摩勢藉双鐵騎雷轉凡驅大破豊後半國、大友左衛門尉義鎮驚躁魂魄散、而不知其所防禦矣、義鎮與仙石議構陳於府內上原之地、十二月十二日、義鎮・仙石與土州之長宗我部弥三郎・秦信親、讚州之十河隼人佐政泰等、侵年滿家久之陣、臨其戰、而我兵討殺秦信親・政泰、則仙石權兵衛尉・尾藤甚右衛門尉秀吉公討北条、及征陸奥而歸陣之時、尾藤爲髡出、公殺之於相州小田原之地云々、尾藤保微命而竟敗北矣、況於步卒等乎、追亡逐北、伏屍者不知幾百千也、同十三日、家久乘勢入府內、則義鎮雖退高崎亦不堪忍焉、向豊前龍王而走散也、義弘主十二月廿二日到道益城、則白仁之志賀道運亦降參也、一萬田・滑・瀧田城皆陷焉、同廿四日、換陳朽網、而後中務太輔家久自府內來會踰年云々、

『長谷場越前日記』

一薩摩の國より豊後の國江御弓箭を被對根源者、日州郡司伊東三位入道累年依爲逆臣、御退治を被成之砌ニ、國方の寄々として無理之加勢を被仕、其科を預大友宗麟上落して関白様を被奉頼事天下無其隠、嶋津方を可有

御追討之由被達上聽、豊州家ニ上古より重寶の骨ハミと云へる御太刀進上す、亦青ヲ鶏カ冠葉カとて名筆無類之掛繪也、於豊家者普代相變の重物を、是も同く進上す、此外於國境目者、種々ニ智略を廻て當家退治之企也、扱者不及力御弓箭を食懸れん、先手ニ可被構鏹楯事、御兵儀之刻ニ天運ニ有哉、地之時ニも有哉、大友宗麟披官之者心替りを仕、入田宗和父子式人、志賀道易之一黨が其親屬ニ到ル迄、年積る述懐を此時節ニ散んとて、八代表江言上す、蓑田信濃守・高橋駿河守者承り、夜白を不云わセ鹿兒嶋へ被申上、太守様は聞食、彼の豊州の兩人者、對大友家ニ者普代之下人たりしが、他人ニついせう申事如何あらんと上意也、是を各承り、御定尤ニ候得共、於豊州者手間入事者候へし、只く出馬と偏ニ諫め奉る、于時天正十四年丙戌十月の吉日ニ御國元を御出馬有り、同十月廿一日ニ阿蘇之内南郷野尻と云へる處ニ肥後表ヨリ被打出て、御太將義弘様、御舍弟二年久、御供を被成者、相並て右馬頭・圖書頭・伊集院右衛門大夫・町田出羽守・川上上野守・新納武藏守、此外之軍兵も皆野尻ニ被陳取、打取て勝吐氣の折節ニ、入田宗和父子式人御迎ニ參陳す、前後之隨

兵數千騎也、かゝりける處ニ、志賀道易之一黨を數千騎率て參陳を被致て、御太將武庫様を入田か城ニ奉申請、如兼約申すにて、近國者扱置ぬ、遠國迄も籌策す、彼の吉左右を承り、不付隨と云者なし、いつきかしづき奉る、日者夜ニつゞき夜ハ日に成る迄御幕下に參陳す、大名小名出入りハ、門前ニ市を成すことく也、同廿四日ニハ邊次か爲城ニ押寄せて、功者の武兵ニ被爲見、去程ニ入田宗和と志賀入道ハ御案内者仕り、邊次か父子ニ教訓被致宛下城ニ社ハ取成けれ、今三日ハ城内を掃除して、右兩人ニ去渡しける処也、然者追付御太將軍武庫様を奉申請被抽忠貞ヲ、其方五日指過て、志賀道易の嫡男ニ親次と云へる者の居城を構て楯籠る、彼のはまりを知ん爲メ大軍を打出し岡野城を見せらるゝ、此在城と申者、四方ニ岩石立廻り、峨とそびへて弱てなし、麓ハ大河漲りて可渡様更ニ無ク、大勢を指向て惡しかりなんと儀定して、先く軍兵被打入、於此刻、眞幸方の御中間進ミ出て申様、如何ニも子細あらんとて忍態をそ巧ける、頃しも冬の寒き夜の月空なきニ雲はわく、雨風者はけしくて深夜のいぶせき限りなかりし時分ニ、只一人岡の城江忍入り、若シ者弱手

も有べしと心を寄せて通りしを、地下人ニ不似とて薩
廣姿の奴原を遁すまじきと追懸る、兼而所存之事成れ
ハ、さあらん躰ニ持成して行過る處を、萬方よりたひ
まつを出しけり、扱ハ先身をかくさんと岩かけニ踏ミ
さがる、運命も盡ぬるや、落て其俛空く成る、此事を
武庫様ハ聞食、忠ニは恩を与んと、其子少年召出し、
侍ニこそ被成けれ、其後ハ無行、岡之城主親次は志賀
道易嫡子也、入田宗和者憤父^(継カ)ニて赤星備中守者縁類之
事ニて有り、種々の謀略を廻シ挽出んとせしか共、大
友方へ順儀之旨を勤んとて、同心致す事そなき、角て
も不成指置事ハ、少年成共息をば先今日に差上て、自
身ハ快氣仕り、重而可致參陳と申聞ケらる趣を、岡之
城主は畏てぞ承る、城内ニ出入り之子細ニ付、ろうせ
き法度之爲とて檢者衆を被申けり、扱親次が爲そとて、
入田宗和と赤星備中守ニ被仰付、此衆より者薩摩方の
御人衆ヲ嗜るの爲として、今一人可被相添之由、頻ニ
被申上、此趣を聞食て、長谷場兵部少輔を被加其勢、
都合三百余騎ニて岡之城の麓迄ぞ打寄ける、親次より
も兩三使を差出し、其理りを被申上、此程百姓以下之
在城仕たる事なるに、少し掃除を任り、頓而時分次第

206

『勝部兵右衛門聞書』

ニ御案内者を可遣由、大河を不渡被申けり、此日も斜
ニ見得けるニ、重而使者を呼出して、遠見か尾迄指懸
り、さきの返事を被尋、彼者共ハ爾々ニ申上る事もな
く、城内の人衆者談合ニ日を暮し、致延引計り也、扱
こそ可有子細と御方の軍兵心得て、御陳所江上意を請、
人質を所望して、翌日御陳ニ打歸る、其後ハ親次が參
上も事ならず、世上を補ふ計也、事を左右ニ指延て、
九思一言此時と雜兵迄も才覚す、其頃ハ天正十四年丙
戌十二月廿二日ニ、御太將武庫様を道易之居城へ奉申
請、無別儀御仕合間一日之御兵儀ニて、同廿四日ニハ、
御陳易を被成宛九多細^{ウタコ}か居城を繰おろし、御太將軍奉
申請、御供の軍勢も一同ニ被陳取云々、

一 去程に同年十月十四日に、太守匠作鹿兒島を打立、日
向口へ發向し玉ふ、大將ニハ中務大輔家久・圖書頭忠
長・豊後守久親、其外一家他家の大名郡司諸外城地頭
職の人々、物具兵粮用意しておもひく打立、其勢二
萬五千余騎、義久八千騎計ニて三庄のことく赴、塩見
ニ暫く相打給へハ、諸軍ハ皆々縣・阿津佐越して三江

に打入、自夫諸方の城をも攻落し、頓而歳滿へ押寄着陳をそ被成ける、去れハ大友義棟・千石權兵衛尉ハ府内の上原ニ陳取構へ、薩厂勢を相待れける、家久歳滿へ陳取御座を蹴散んとて、同十二月十三日ニ押寄らる、薩摩勢、家久を始諸軍兵珍しき都人ニ趨合師せん事、今日そ軍のはれ成へしと勇掛り合、誠ニはけしき師也、千石敗北となれハ、四國の長宗我部を如一千余騎そ滅けり、其假府内へ乱入んとする、宗麟入道も府内を出、高崎をさり、豊前の龍（王カ）□如く行玉ふ、丹生の嶋即押寄相戦ふ、柴田入道蠡翁直前ニ進て相働ける程ニ、慈乱足ニ成、伊地知丹後・同子新三郎合戦す、蠡翁入道深入しける处を、濱田民部左衛門尉此間損して不知、肥後口太將ニハ兵庫頭忠衡、前吉松陳の折節を義久の御續子と定り玉へハ、忠平を改て義廣と名乗玉ひける、左衛門尉歳久・薩厂守義虎、其外一家他家諸外城地頭職の人と、其勢一万余騎、南郡さして打て入、右馬頭幸久ハ、肥後ハ諸國の中成間、可然人御坐ますへしとて、八代ニ御在番とそ聞えける、南郡の入田道町、志賀の道喜ハ兼て薩厂へ申合たり、内く待設て居たりけれハ、先入田の館に入らせ給、同廿一日、高城を攻落

し、又入田のことく立かへり、其夜即松尾の城鳥嶽をも打捨落行けり、やかて津賀牟禮の城へ押寄玉へハ、戸槻源三も下城して、薩厂方へそわたりけれ、岡ノ志賀道益ハ代官を差出し、我身ハ虚病して未參陳不申、白根の志賀入道ハ早慈ニそ參ける、一間田も下柵を攻破られ、降參して城を薩厂へ渡けり、那女利・瀧田も攻落て薩摩軍勢打入ける、久田美も降參とて參られたり、玖珠表も類ニ薩厂番を申請られけるほどに、川上上野守・町田出雲守「羽カ」・新納武藏守など如玖珠打入らる、野上・喜江・江良・切頭も早御下に參けるニ、小國の北の里も參らる、

207

「日向記」

一 同年十月ヨリ亦豊後入卜定、義久ハ日向ヨリ南郡打入ントテ、五百餘人ニテ三城ノ如被越、義久ハ塩見ヨリ扣テ、縣山ヲ三重ニ打入大將ハ家久也、兵庫頭ハ吉松陣ノ時ヨリ義久ノ養子ト成、忠平ヲ改義弘ト申ケル、肥後口ヨリ打入大將ハ義弘、都合七百餘人也、去程ニ南郡ノ入田殿・志賀道益兼テ薩厂方へ被申合夏ナレハ、内々待モウケテ御在ケル、十月廿一日ニ高城ヲ攻落シ、

「日向記」

頓テ其夜入田館ニ打入玉フ、同夜此城モ明退、烏嶽モ如其也、津留牟禮ヘ押寄玉ヘハ、已ニ戸次ノ深見モ下城ス、雄原ノ志賀ハ名代ヲ差出、吾身ハ作シテ參陣セス、シカ子ノ志賀ノウンモ早味方ト成テ、一万田モ下城降參也、ナメシ田是モ攻落薩^廣番衆入、朽網モ降參、家久ハ無程三重知行、緒方ノ城ヲモ詰落ス、其後俊光ヘ押寄、向陣ヲソ付ラレケル、

一 大友宗麟天正十四年丙戌春上落シテ、日向高城敗北以來島津家ヨリセハメラレ、肥後肥前兩築^第モ薩^廣ヨリ被押取吏無念ノ至極、依秀吉卿ノ猛威ヲ仰、大友家殘ル様ニ侘玉ケリ、依其御領掌有ケル時節、薩^廣方モ鎌田刑部左衛門尉ヲ都ニ登セ、戰功ノ侘言ヲ被申ケル、然間秀吉公被仰出ハ、大隅薩^廣ハ元ヨリノ儀、肥後半國・日向半國嶋津知行タルヘシ、亦日向半國ハ伊東民部太夫祐兵ニ遣スヘシ、豊前・築後・肥後半國ハ大友知行タルヘシ、肥前一國ハ中國毛利方ヘ遣玉シ、築前一國ハ都ヨリ御公領タルヘシト被仰下ける、然間使者下シ、如古代令上洛奉守君命ヤウニ可有トテ、九月十二

日、千石權兵衛尉ヲ先豊後迄差遣さる、土佐國長曾我部彌三郎・秦信親、讃岐國十河準人佐政泰・尾藤甚右衛門尉以下軍衆卒來、其沙汰ニ及ト云トモ同意ナシ、豊州口ヘハ黒田官兵衛・小早川左衛門尉隆景八千余騎ニテ、同十月下旬、豊前國嘸ヲトセントシ玉ヘハ、薩^廣衆ハ筑前岩屋打出懸ケレトモ引入ケルニ、紀伊・永野・秋月ハ高橋一圓ニ嶋津方ヲナシ、一揆蜂起シ、宇呂津ト云所ヘ差出要害ヲ構、通路ヲ取切タリ、兩人相議在、十一月五日、逆寄ニ切テ掛リ要害ヲ攻破、名士十一人、其外雜兵五百三十討捕玉イ、凱歌ヲソ挙タリケル、其夜障子嶽ニ陣ヲ取、同七日、河原嶽ヘ陣ヲ居、要害ヲ構エ玉フ、伊東民部太夫祐兵日來ハ秀吉公ノ御手廻ノ供奉タリシカ、此度ハ黒田官兵衛尉殿組ニ付玉ヒ、先陣ヲ被成ケリ、十一月五日ノ逆寄ニモ御高名在、河原嶽籠ニテモヌケカケ有、誉名ノ手柄ヲ被成シナリ、其頃嶋津中務太輔家久大將ニテ、二万余騎豊後利滿ノ城ヲ攻ル時、千石殿豊後勢ヲ加ヘ六千余騎ヲ卒、十二月十三日、河ヲ渡來テ薩^廣陣後攻ヲナス、既ニ合戰ヲイトナミ互ニ武勇ヲ磨、數刻太刀打鏝ヲ合、勝負マチク、也成シ所ニ、長曾我部信親手者廿二騎、左右ニ隨

嶋津豊後江發向之事

へ鐘ヲ合セ打死也、依之勢堪リカネ敗北シテ、十河新太郎・矢野・田宮ヲ初數多討死セシカハ、千石殿毛虎口ヲクツロケ這々引退玉フ、薩廣勢勝ニ乗テ迚ヲ追、府内祇園ノ川原迄高田ハ門口ニ至迄、討捕首數不知、其儘薩廣勢府内へ乱入ント指カ、ルニ依テ、頓テ大友殿府内ヲハツシ、高崎ノ城ニ逃竄ル間、家久府内へ打入玉へハ、義統高崎ヲハツシ、豊前龍王へ退玉フ、夫ヨリ義弘朽網ノ如陣替有テ越年也、所ト手ニ属シ、天正十五年丁亥三月中旬迄、豊後半國早嶋津家手ノ内ニソ入ニケル、

天正十四年十月ニ、豊前國ニテ大友旗下ニテ有ケル時枝左馬助・宮城數馬ヲ先トシテ城井叛ヲ企、各カ近所ニ、大友方ノ小組人ナトヲ与セサル輩ヲハ討亡シテ旗ヲ上、手餘ニヨシ、都甲備中守・久志野彈正忠方ヨリ到來シケレハ、大友左兵衛督義統兩上使へ仰達ラレケレハ、兩人共ニ氣ツヨキ仁ナレハ、其一揆トモイソキ退治アハヘシ、我々モ發向候ハントテ豊前國へ發向

シ玉ヒテ、^(ヨメズ)ノ岩手ニ陳取テ、數□奉陳ニテ一揆ノ輩退治セラレケリ、カ、リケル所 入郡・大野郡ヲ知行シケル大友數代ノ家老ニテ、國家ノ政道ヲ司トリタル仁^(カ脱カ)イナル天爵ニヤ、數代主君ノ大友家ニ敵ト成テ嶋津義久公ニ内通シテ、薩廣勢ヲ豊後へ引請、國家ノ大事被成衆、豊後ノ逆心ノ頭領人ハ志賀道益・同道雲、朽網崇曆、是ハ家老之戸次玄三・同鎮連、^(分カ)一刀田紹傳、柴田紹庵、是等大友近邊ニ宮仕ノ者也、是等ヲ宗徒ノ謀數人^(叛カ)ニテ、三重ノ町人麻生方陸入道紹和ト云商人、是ハ常ニ薩廣馬商人ノ宿ノ亭主ニテ、薩廣大隅日向ノ方へ折ト行通ヒタルニヨリ、豊後ノ内通ヲ薩廣へ謀略シタル者ナレハ、此者ヲ使トシテ、時節ヨキ折節ナレハ、早々出陳有ヘシト云遣ケレハ、嶋津修理太夫義久公ハ此由ヲ聞タマヒテ、内々ハ豊後へ發向有ヘキヨシヲ蜜トフレヲカレタルコトナレハ、兩國中ニメクラシフミヲ遣シテ、豊後發向トシテ肥後國通、嶋津兵庫頭忠平大將ニテ、都合其勢二万三千ヨキ、日向ノ國ト豊後國堺ノ大山阿津佐山ヲ越、豊後へ討入トシ聞エシカハ、豊前へ飛脚ヲ府内ヨリ指遣、仙石權兵衛・長曾我部土佐守・大友義統ハイソキ府内ニ歸陳シ玉ヒケリ、

比ハ天正十四年十一月十五日ニ、嶋津中務少輔家久門
□阿津佐山ヲ越テ、同二十六日ニ豊後國三重ノ仁ニ着
陳セラレケリ、同十二月五日ニ戸次ノ内利光露カ城ニ
押寄、家久申サレシハ、此城即時ニ攻落ス事ハ眼前ナ
リ、然共臼杵ヨリ復(カ)ニノ加勢指向ハン事必定ナリ、若
サモアラハ、合戦手餘ニ成テ難義タルヘシ、先々臼杵
城ニケイコノ軍兵ヲ遣ヘキトテ、大將白濱周防守・野
村備中守兩人ニ騎馬武者百五十拾餘キ、都合其勢二万餘
キ、十二月五日ニ臼杵ノ城ニ押寄テ、時ヲツクリ矢合
シテ、薩ノ軍勢ハ城ヲ攻ヘキ手立モセス、少引退キ遠
陳ヲ取テ、難所ヲ前ニ當テ、城ヨリ打出ハ防而戰ハン
ヨシニテ、遠陳ニシテ用心キヒシクシテソキタリケル
カ、
嶋津中務少輔家久公ハ同六日ノ日、戸次利光ノ城ニ押
寄ントテ、先蜜内檢見ノタメニヤ、歩武者百余人城ノ
間近ク遣着還ス、霧カ城ノ麓迄寄來ルヲ城中ヨリ見カ
ケテ、竹中久藏・岩瀬玄番ヲ先トシテ、其勢三百余キ
計懸出散クニ戰ケルカ、薩ノ軍兵大勢ニ無勢、叶ハ
シトヤ思ニケル、シトロ足ヲフムト見エケルカ、城中
ノ軍勢キヲヒカケテ攻戰ケレハ、叶ハシトヤ思ヒケル、

我モくト引退ク處追打ニ攻ケレハ、薩ノ方ノ者共三
キ討取テ、勝トキアケテ門出ヨシト旬テ城ノ内ヘ引退
ク、則其者トモ城下ニ獄門ニ懸ケリ、薩ノ軍勢是ヲ
見テ無念トヤ思ヒケル、先陳ノ勢ノ中ニ心ハヤリノ軍
勢四五百キハカリト見エテ、大塔村マテ寄來リケルヲ、
城中ヨリ是ヲ見テ、利光伊豫守・佐藤美作ナト云者ヲ
先トシテ、其勢三百余キハカリホト出、面モフランス命
モ不輕(マ)、一向ニ伐テカ、ル、薩ノ勢モ先ホトノ敗軍ヲ
本意ナク思ヒケレハ、ヒクナス、メヤ者共トテ、互ニ
諫メ恥シメテ、爰ヲセント、ウツマクツ、戰ケルハ、
城中ヨリ討テ出タル勢ト云、嘗ハ一筋二十死ニ一生モ
惜ムヘカラス命ナリト、互ニ恥シメテノ、シリ、一筋
ニ打テカ、ル大勢ノ中ヲワツテ攻戰ヒケレハ、今度モ
薩ノ軍兵共三町ハカリ引退ク、城中ヨリヤラ出タル
軍勢ノ中ニ、佐藤美作ヲ先トシテ、討死三十二人、手
負共數多アリシカ、薩ノ軍兵共五十余人討レ、手負
數シレスト聞エシ
ニツヨク働キケレハ、暫クイ
キヲ休メントヤ思ヒケル、互ニアヒ引ニ引退キケル、
嶋津中務少輔家久公ハ利子尾ト云丸山ニ陳取テ居ラレ
ケルカ、軍法者シトロニシテ諸勢モ面任せニハタラキ

ケレハ、番頭ノ人々ヲ召寄せ諫メ申サレケルハ、阿津山ヲ若越テ當國中迄發向セシ所ニ、酒ニ向フ者一人モアラサレハ、軍勢キホヒカ、リ、□軍ノハタラキ今度兩度ノ不覚ニテ、敗軍以ノ外ノ事共也、軍法ノ掟ヲソムクマシキ由、諸軍勢カタク下知セラレルヘシ、軍ノ評定シテ七日ノ早朝ニ城攻トフレ渡サルヘシ、軍法ヲ破ハル輩ハ何程ノ高名アル共、身ノ勘氣ハ申ニ不及、子々孫々迄大事タルヘシ、軍ノ不覚有之者ナラハ、國家ノ大事是ニ不可過、軍ノ手初ニ是程ノ小城ヲ攻カネテハ、世間ノ人口モ恥カシ、サレハ、先年日向國美々川ニテ豊後勢ノ不覚ハ、時ニソソミシ大將ヲロカナリシ故ニ、旗頭之働キ我カ俣ニシテ敗軍シタル事眼前ナリ、殊城ハ戸次伯耆守カ在城也シカ、筑前國へ、越中國西國ノ押ヘトシテ、大友代官ニ立花ノ城ニ在城ナレハ、サシテノ強敵ハ籠城スヘカラス、當ノ大友家頼ニ小身ノ旗コモリキタルト聞エシ、大將ノナキ軍ハ思ヒくノハタラキニテ、

去程ニ大友義鎮ハ豊州ノ田津久湊ニ塞逼セラレ、義統ハ同國府中ツカ城ヲ落テ豊前國云走、評定マラサル事ナレハ、味方ノ軍兵ヲ能キハメ一モミニセメヤフリ、其

イキライニ府内へ發向、大友・仙石・長曾我部ト一軍遂ント、衆評ヲカタ一旗くノ番頭ヲアラタメ、一番備ハ伊集院美作守ヲ大將ニテ、与力ヲ軍勢五千余キ、二番備ハ新納大膳正、其勢三千余キ、三番備ハ木庭主税助、其勢二千余キ、

嶋津中務少輔家久ハ都合八千余キニテ、番手ヲ四番ニ組テ、物見ノ役ハ酒瀨川豊前兵衛・相良民部左衛門、兩人ニ足輕六十余人サシソヘテ、家久ヨリ下知ヲ請テ働キケリ、戸次利光露カ城ニ楯籠ル軍勢七百余キ、男女老若共ニ都合三千余人トソ聞エシ、薩ノ塞ノ手軍評定ノ沙汰ヲ城中ニ内通ノ者有ケレハ、七日ノ日ハ一日ニ討死ト思ヒ定メ、女ワラヘ老若共ニ一命ヲ露チリホト云不惜、薩ノ勢ト合戦シテ討死ト相定メ、兵具ハ申ニ不及、竹ヤリヲコシラヘ、木ノキレ・手コロノ石ナト取集メテ、夜ノ明ルヲ待兼テソキタリケリ、薩ノ寄手鶏ノ声ヲ相圖ニテ、物ノ具ヒシクトサシカタメテ、テンテニタイマツヲトホシツレテ、先陳ニ伊集院美作守五十余キヒテ城下ニ押ヨセ、マタ夜モ不明ニ時ノ聲ヲ上ケレハ、二番備新納大膳正三千余キカラメテニマワリ、是モ時ノ聲ヲ合せケル、天地モヒ、クハカリナ

リ、城中ヨリモ七百余キノ軍兵時ノ聲ヲ合せケリ、寄手ノ軍兵共大勢ノ事ナレハ、此城即時ニ攻破ルヘキトオモヒ、我モく高名分トリセントテ、イサミサケンテ攻上ル、城ノ内ヨリ徳丸傳八・加藤兵庫介兩人一陣ニ懸出、其勢五千余キ、討テ一面ニ向テ鉄炮ヲハナシ、弓ヲ射させ、矢コロハ近シアタ矢ハナク、寄手ノ兵者十四五キ矢庭ニ討死スルヲフミコエく、是ヲ事共セス、一騎打ノ上リ坂ニテ、殊ニサカモキヤラ大石大木キリカケタリケレハ、轍垂超難キ難所ヲ吾先ニト上リカ、リ、ヒルム所ヲ鍵長刀ニテツキ通シキリ伏ル、觀面ニ伊集院カ手ノ軍兵六十余人討シケル、城中者共痛手ウス手ハ負ケル共、討死ハ搦手ハ千余キ、ヲメキ叫テ戰ケル共、難所ナレハ寄手ノ討死計ニテ、轍ク可攻(落カ)卷共不是ケルカ、引色ニ見テ上リ兼テ有ケル所ニ、伊集院美作守サイハイメカシ、ツ、ケト下知スレハ、後陳ノ兵者面モ不振攻上ル、要害カシコシトイヘトモ、城中小勢成ケレハ堀涯ニ攻近ク所ニ、鉄炮・弓ヲ放チアタ矢モナク討タラス、寄手ハソレニモ不腫責近ク、アマリ無隙攻迫ルハ、弓・鉄炮ニテ可防様モ不有ハ、鎌・熊手ニテ外カハノ堀ヲり破ラントスル、既ニアヤ

ウク見エケレハ、男女老若ヲ不嫌、竹ヤリ大石小石大木小木ヲナケカケく防キケレハ、寄手ハ下ヨリ上リ口ニテハアリ、大石テ落レハ、先陳後陳ヲ不云打コロサル、者モアリ、痛手薄手ヲ負テ半死半生ノ者數ヲ不知、寄手ノ兵者心ハ猛ク思ヘトモ、木石ニ打レ犬死スルヲ、心ウシトテ攻アクミテソ歎キケル、只一時二時ノ間ニ寄手ノ軍兵手負死人數ヲ不知、寄手ノ兵者叶ハシトヤ思ヒケルニヤ、大手搦手ノ軍兵八千余キ、大將ノ下知ニ任せテ五町計一度ニ引退キ、人馬ノ息ヲ休メケル、其後伊集院・新納・本庄・大將 家久ノ軍勢アラ手ヲ入替々攻ケルカ、七日ノ早明ヨリ十二日迄、息モ不絶攻戰ケレ共、城中ノ小勢一度モ不覺ヲ口ス、キホヒイサミテ(ヨメズ、防カ)戰ケリ、城中ヨリハ木石ヲ投尽シ、茶臼石磨マテ投尽シ、已ニ攻破レント見エケルカ、アマリセンカタ無テ草屋ヲトリコホシ、タイマツノコトクニタハネテ、テンくニ火ヲ付テ諸花ノ如ク投カクル、イク千萬共不知レ投カクレハ、ホノムセヒ當時ニ死スル者ハナケレトモ、攻ワツラヒテキタリケル、城中ノ軍勢モ日數重レハ、小勢ニテハアリ、戰ツカレテ難儀ハ爰ニ究マレリ、薩方ノ軍勢共 五日ニ着陳

シテ、七日ノ日ヨリ軍シテ一度モ勝利ナカリケレハ、
寄手モ味(方脱カ)ノ手負死人大勢ニテ、氣ヲクレテソ見エン、
長曾我部土佐守戰ノ事、

去程ニ戸次羈カ城ノ合戰難儀ニ極リ、頓テ落スヘキノ
由、大友義統聞玉ヒテ、加勢ノ人數ヲ指遣ハサレ度思
召ケレトモ、數代ノ御家頼大身小身ノ中ニ二心ヲサシ
ハサミタル仁有ケレハ、此大事ヲ見ナカラ、ヨソ聞シ
タル有様ニテソ居タリケル、兩上使仙石・長曾我部ハ
大閣様エ嶋津方ヨリ逆意ノ趣ヲ委細ニ言上セラレケレ
トモ、戸次ノ城ノ軍難儀ニ及ビタル由ヲ聞玉ヒテ、大
友味方ノ軍勢ヲ案内者トシテ、兩人大將ニテ都合其勢
六十余ニテ、戸次ノ城ヘソ馳向ヒ玉ヒケリ、十二月十
二日ノ早朝ニ、戸次川トテ大河ノ有ケルヲワタシ、山
崎ト云所ニ出張シテ、一圖ニ 嶋津家久公ノ陳所ニ攻
入ント衆評シ玉ヒケリ、中務少輔家久公ハ爰社攻所ヨ
ト思モ、軍勢ニ下知セラレケルカ、今日ノ合戰ニ家久
ニツキテハ、上使ニテ罷向ヒシ仙石・長曾我部、是非
共ニ戰死ト相定タル也、一萬八千余キノ軍兵共、一人
モ生テ本國ニ歸ラント思フヘカラス、其敵ハ只今 義
久公ヘモ其趣ヲ云遣ス也トテ書札ヲ認メ、河上半藏ヲ

使トシテ一刻モハヤウ薩一廠ヘ參着スヘキトテ、 家久
公ハ今日ヲ最後ト思ヒ定ラレケレハ、ハナヤカニ出立
テ諸軍勢ニ下知ヲセラレテ、相定メシ軍法ヲ破ルヘカ
ラストテ、元ヨリ番組ヲ前マノコトク三段ニシテ、
十二月十二日ノ明ホノニ、ワキノ津留ト云所ニテ、互
ニ時ツクリ矢合シテ合戰初リシカ、イカ、シタル事ニ
ヤ、一番備ノ伊集院カ軍勢、シハシ打入テ防戰ヒケル
カ、上使ノ勢ノ勢アラ手ナレハ、攻立ラレテ利光ノ村
中ニ引退ク、上使ノ軍勢キホヒ懸テ、逃ル軍法共ヲ進
テ分捕高名ヲソシタリケル、 嶋津家久公ハ味方敗軍
ヲ見テ、手ニアセヲニキリ、ハカミヲシテ、ハヤカケ
出ントシタマヒケル所ニ、二番備ノ新納大膳正都合其
勢三千余キ、サカノ口ト云所ヨリ東山ノ高キノ所ニ馳上
リテ、敵味方ノ備旗色ヲ見ケルカ、ヨキ時分トヤ思ヒ
ケル、仙石・長曾我部ノ本陳ト覺シキ所ニ只一向ニ攻
カ、リ、千死カ一生ヲモカヘリミス、今ヲ最後ト攻戰、
大將軍 嶋津家久公ハ津留川原ヨリ一面ニ責カクル、
三番ノ本庄カ軍勢モ一ツニ成テ戰ケリ、敵味方ノ軍勢
都合二万四千余キカ入乱レテ、火花ヲ散シテヲメキ叫
テ攻シハ、天地モヒ、ク計也、只一時二時計ノ合戰ニ、

敵味方二千余人討死スル、長曾我部土佐守信親心ハヤリノ大將ニテ、アマリ深入シ玉ヒテ、命モ不惜面モ不振、手痛カ責戦ケルカ、痛手薄手数數ヲヒ玉ヒテ討レサセ玉ヒケリ、兩上使ノ軍兵都合六十余キ、一面ニ懸向テ命モ不惜面モ不振責戦ケルカ、多勢ニ無勢ニテ、カケ合ノ合戦ニ戰レテ力ニ不及引退ク、仙石權兵衛秀久心ハ猛ク思ハレケレ共、味方大勢討死シテ敗軍シケレハ、力ニ及玉スワカニ廻リ、五六十計ニテ戸次ノ川ヲ渡シ、府内ヲ指テ引退玉ウ、

中務少輔家久公ハ其勢ヒニテ、府内ヲ指テ攻近ク、大友左衛門督義統ノ御内ニ吉弘加兵衛尉統行ハ、此由ヲ聞テ手勢三百余キニテ、物具ヒシトカタメキ□シ河原へ出張シテ、寄へ敵ノ待カケシカ、薩方ノ軍勢頻テ津留河原迄寄來リケルカ、吉弘カ出張ヲ見テイカ、思ヒケルニヤ取テカヘシ守、岡ノ古城ニ取上リ、其夜ハ野陳トリテソ居タリケリ、

上使大友豊州發向ノ事、
仙石權兵衛尉秀久ハ長曾我部土佐守ノ子息三郎兵衛尉元親、是モ父信親 所ニ 陳ニス、ミ玉ヒシカ、數カ所ノ手ヲ負玉ヒシカ、父ト一所ニ討死シ玉ウヘキト

テス、マレケレトモ、大友家頼竈門兵庫介ト云者、今度長宗我部信親ニ与シテ同陳ニテ戦ケルカ、三郎兵衛尉元親ノ間近ク懸寄申ケルハ、軍ノ勝利ハ時ノ仕合ニテ候、大勢ノ中へ只御一人カケ入セ玉ヒテ、何ノ勝利カヲワシマスヘシ、大死セサセ玉ヒテ、何ノ益モ御座有間シキ事也、是 引退カセ玉ヒテ、重テ御勝負ヲトケサセ玉ウヘシトテ諫メ申ケレハ、元親モケニモト思召レケルニヤ、仙石秀久ト打ツレ玉ヒテ、府内へ歸陳シ玉ヒケリ、夜ニ入ケレハ、吉弘加兵衛尉統行ヲ宗像掃部助・大津留河内守方ヨリツカハシ、ヨヒ寄テ内談シケルハ、

中務少輔家久公ノ事イキヲイ懸テ、夜ノ明ルヲ待兼テ夜中ニ攻來ルヘシ、當時御旗下ニテ御人數三千余キニハヨモスキシ、吾々手勢ヲカリ加へ申共、五千余キニハヨモスキシ、嶋津カ大軍ニ懸テ軍 危事也、今端當城ヲ退カセ玉ヒテ、高崎ノ城ニ御座ヲウツシヲハシマシ、豊前筑後筑前ノ御勢ヲ催シ玉ヒテ、重ネテ大軍ヲ、コシ、嶋津ヲ御退治輒スカルヘシ、其上直入郡・大野郡ニテ、志賀・朽網・万田ナト數代ノ御厚□ヲシテ忘レテ嶋津ニ相隨テ、御當家ニ至テ逆意ヲ企テ、弓ヲ

引矢ヲハナツ上ハ、其外兩郡少クノ士卒迄モ、志賀・一万田・朽網等カ下知ニ隨テ、嶋津方ニ身スヘキ眼前ナリ、若又當城ニテ、御旗本ニモ彼逆意ノ者ニ心ヲ合テ、嶋津ニ心サシ有者、後矢ナト仕ニおキテハ以ノ外ノ大事、是ニスクヘカラスト評定シテ、大友義統公ハ委ク言上シタリシカハ、実モト思召シケルニヤ、大山田兵部・田比六郎(北カ)ヲ召寄せラレ、此由ヲ上使へ仰合サレテ、其夜ヒソカニ府内ノ城ヲ退せ玉ヒテ、上使ハ別府ニ懸カナ越ト山ヲ越させ玉ヒテ、山番ノ口ヲサシテ豊前國妙見岳ノ城ニ着シ玉ヒケリ、此城ハ田原紹忍カ代繼原与兵衛尉親盛トテ、大友義統爲ニハ弟ノ在城也、大友義統ハ高崎ニ登城シ玉ヒケルカ、又宗像・大津留・吉弘内談シケルハ、此城ハ大友先祖刑部大輔氏時ハ菊地(也)肥前守ト合戦ノ時籠ラせ玉ヒテ、御運ヲ上ラカセ玉ヒ

尊氏將軍ノ御父子御下向ノ砌ニ、大忠孝ヲ遂玉ヒシト承ル、去共當時俄ニ御登城ナレハ、人倫遠キ高山ニ共(兵)糧運送不自由加ヘシ、豊前國龍王田原紹忍カ居城ナレハ、遠路ナカラモ御越境有ヘシト云里テ言上シタリ、勢ニテ龍王ハ聞カセ玉フ、御方ハ白仁弥助・石合武助

・數戸九兵衛尉替合テ持歩行ニテ、御近所へ御供仕リケリ、大津留河内守手勢百拾キ、其内五拾キハ引分テ、己カ居城ノ松カ尾番ニ指遣ス、我身ハ勢百キニテ仕リケリ、宗像掃部介手勢五百余キ、吉弘加兵衛尉手勢三百余キ、同弟ニ田比平介手勢百五拾キ、其外參府仕、夕、軍勢御本都合其勢五千余ニテノ城着陳ナサレケリ、嶋津家久公翌日相良民部左衛門尉兩人ニ歩行武者百二十キ指添、府内ノ有様ヲウカ、ハセテ、其後天台寺ニ壽寺トテ六坊有ケルヲ本陳ニカコノセ、府内ニ在陳セラレケル、岡城攻ノ事、

天正十四年十一月十五日、豊後發向ノ御大將軍、薩州太守嶋津修理大夫義久公ノ御舍弟兵庫頭忠平公ハ、新納武藏守子息右衛門佐ヲ先トシテ、其勢二万五千余騎ニテ薩广ヲ打立テ、肥後通ニ同十二月二十二日ニ肥後國志郡ニ着シカハ、嶋津兵庫頭忠平公・新納武藏守・同右衛門佐、其外ノ人々ニ申サレシハ、阿蘇山ノ社人城中ハ多勢ニテ、前マヘヨリ大友方ニ与力シテ、互ニ他事ナキ心指ト聞エシカ、阿蘇郡ニ着陳ノ折節、サ、ヘラレテハ然ヘカラス、謀略ノ爲ニ三端使者ヲ指遣

シ阿蘇山ニ下キテ、今度ノ出陳先勝ノ祈禱ヲ頼ノ由、衆徒坊中神主社人ニ頼遣シ、一山ノ坊中社家ノ所存ヲ窺見テハ、如何有ヘシトイハレケレハ、皆一同ニ此義至極、シツハカラヒ哉トテ一日逗留シテ、佐川彈正・加藤兵部左衛門ト云者兩人ヲ使者トシテ、色々ノ進物カタノ如ク拵テ取持セ、阿蘇山学頭ノ坊・宮野地神主兩所へ、嶋津薩广大隅ノ大守修理太夫義久御方ヨリノ音信也トテ、今度出陳ニテ豊後退治ノタメ、同姓兵庫頭忠平登向仕ラセ候、幸ニ大明神ノ御門前ヲ罷通ノ由、其義ニオキテハ、先勝武運長久御祈禱ヲ頼奉ル由ニテ、兵庫頭ヨリ我々兩人ノ者ヲ進シ遣シ候由ニテ、進物ヲサ、ケ、其外坊中社人方へモ懇ニ進物ヲ音信シケレハ、少モ異義ニ不及、坊中社人都合七百余人ハ、嶋津使者ニ對面シ、一山ノ社家坊中違變是有マシキノ由請負、使者ヲ取持テ心ノ及ニ馳走シテ歸シケル、佐川・加藤ハ急キ歸テ、嶋津兵庫頭忠平公ニ云ケレハ、大キニ悦ヒ、
同十一月二十四日ニ阿蘇郡ニ着陳シテ一日逗留シ、嶋津兵庫頭公・新納父子ハ神主ニ對顔シテ、金五百兩ツマセテ、大明神へ御祈禱ノ御初尾トテ參ラセケル、学頭ノ坊へモ山上ノ三池大明神へ御祈禱ノ初尾

ニトテ、金五百兩遣シケル、相伴一軍勢二万五千余キモ思々ニ初尾ヲ捧ケ、武運長久ノ御祈禱　頼由ニテ、社人ノ人々ニ送ケレハ、社家ノ人々ハ前角ノ沙汰ニハ、薩广ノ軍勢此所ニ參着　ハ、徒黨狼籍ノ族多カルヘシト無心元思ヒシニ、思ノ外ニ引替テ社家方へ音信多カリケレハ、悦ヒ勇ム事限リナシ、

同十一月二十七日ニ、豊後國朽網ニ着陳シテ、朽網三河入道字曆ハ　頭領ニテ、薩广へ謀略ノ由通シテ嶋津ニ一味ノ事ナレハ、少モ異義ニ不及、嶋津兵庫頭公・新納武藏守・同右衛門佐ニ對面シテ軍評定ヲシタリケル、岡ノ城ニ志賀湖左衛門尉在陳シテ居　ケルカ、多勢ノ者ナレハ、府内へ出陳ノ後矢ニ射ヘキ仁ナレハ、手初ニ攻亡サントテ、嶋津力勢二万五千キヲ三手ニ分、一万五千余キニテ　嶋津兵庫頭ヲ大將軍ニテ、十二月六日ニ岡ノ城ニ指向、新納武藏守六千余キニテ玖珠郡ニ登向スル、新納右衛門佐四千余キニテス分郡へ向ヒケル、比ハ

天正十四年十二月二日ニ

嶋津兵庫頭岡ノ城ニ押寄テ散々ニ攻戰ケレ共、難所ノ山城ナレハ寄手討死ハ數ヲ不知、サレトモ此城ヲ攻ア

クミテハ マシキ事也トテ、荒手ヲ入替く 同五
 日ノ日迄攻ケレトモ、寄手討死日々數ヲ不知討レケレ
 トモ、城中ニハ手負モサノミ無リケリ、運ノ尽タル者
 ハ自然鉄砲玉ニ當リ死ル者計リ也、寄手ノ勝利一度モ
 無リケレハ、遠卷シテ攻也トテ、軍兵少ハ殘 テ、嶋
 津兵庫頭公朽網ニ引退キ在陳シテソキタリケリ、新納
 武藏守其外六千余キニテ玖珠郡馳向、津ノ無礼ノ城ニ
 賀悦・芝・小田・長野ナト云者共多勢ニテ籠城シタリ
 ケルヲ、新納武藏守押寄テ、此城郭ノ要害ヲ見テ、人
 間ノワサニテハ攻落シ難ク思ヒシ、サレ共時ヲツクリ
 矢合シテ責戰ケレトモ、岩尾 ニ聳テ立ノホリタルケ
 ンナンノ城ナレハ、寄手ノ討ル計ニテ城中ハ少モ痛事
 ナシ、武藏守モ重テ智略モ有ヘシトテ、遠陳取テキタ
 リケル、新納右衛門佐久持ハ其勢四千余キニテス分郡
 へ馳向ヒ、田比ニハ當所ヲ知行シケル、田比平介統員
 ハ多勢ノ者加ケレ共、府内大友義統ノ旗下ニ睨トカタ
 メテキタリシカ、龍王迄義統ノ供ヲシテ指越ケルカ、
 其アトニ田比平介統員カ養母家頼ノ老若共、松無禮ニ
 籠城シテ居タリケルカ、城中難所ナレハ輒攻落シカタ
 ク有之、朽網ニテ傳聞其上後矢ヲ放ヘキ事ノナシト聞

テ、朽網三河守入道カ与力ノ者共ヲ案内者トシテ、夜
 中十二月七日ニス分郡何南見 内サシ越、夜ノ明方ニ
 松カ尾ノ城ニ押寄、時ヲトツト作りケリ、城中ニ齋藤
 將監 彼矢門幡ト云者ヲ先トシテ四百余人計有ケル
 カ、同時ノ聲ヲ合せケリ、齋藤將監ハ鉄炮ノ達者ナリ
 ケレハ、大手ノ木戸ヲヒラカセテ、大石ノ影ヲ楯ニシ
 テ扣テ敵ヲ待キタリシカ、寄手ノ足輕頭ト見エテ、小
 川掃部兵衛ト名乗テ歩武者三十キ計クシ、一陳ニ進タ
 ルヲ待 テ坂ヲ登上ラントスル所ヲ、矢比ハヨシ、タ
 メ付テ放シケレハ、目付ヲ違ヘス矢坪ヲ指テ、胸ノ加
 ヨリ 通サシテ(ヨメ)タラス、馬ヨリ顛ニ落ニケリ、是ヲ
 軍ノ手初ニテ、城中ヨリ小野丸兵衛・東家平介・土師
 弥七ナト云者七八十キ、面モ不振命モ不惜、爰ヲセン
 ト、戰ケルカ、寄手ノ軍兵 ラレテニ 計引退ク、寄
 手ハ大勢ナレハ、荒手ヲ入替く、攻戰ケルカ、城ヨリ
 是ヲ見テ、味方勝又 テキホイセリ、五十キ計見出、
 新納右衛門佐久得カ勢五十余キノ勢共馳向テサンく
 ニ責戰ケレハ、寄手ノ勢モ責立ラレテ引色ニ見エケル
 トコロニ、加佐波天同幡ト云木ハ前方朽網三河入道ヨ
 リ内略ニテ、薩厂へ組テ後矢ヲ射ヨカシト云合タリケ

レハ、能柄トヤ思ヒケル、城中ニ火ヲテ焼立タリ、
黒煙天ニ充、北南ノ河風四方ノ山々ヨリ嵐ハケシク吹
ヲロシテ、城中既ニ焼立タリ、寄手ノ軍兵共是ヲ見テ
勢カ、リテ攻メ來ル、籠城ノ老若男女童部周章フタメ
キ行方モ辨ス、取モノモ取不敢、吾モくト落行ケル
カ、親討ルレ共子ハ不知、主敵ト戰共郎從是ヲ不助、
敵襲カ、リケレハ、遁ントスレ共川キシハ高シ、漲ル
水ハ岩カト大石ニ礙リテ瀧ナリ、瀬マクリ落テハヤシ、
女童部老若ハ河ニ溺レテ死ル者數ヲ不知、船カ尾ノ城
落テ火ト天ニモエ上ル、爰ヤ彼ニ登城シタル大友方ノ
者共、是ヲ見テヲノツカラ氣ヲクレニ成テ城ヲ明テ落
行ケル、武宮辻臺ノ城・橋爪鳥鼻ノ城籠リシ軍兵ハ、
船カ尾ニ敵寄カケテ、関鉄炮ノ音ヲ聞付テ、加勢ノ後
矢射ントテ我モくトハせ進ミケルカ、黒煙ノ立ノホ
ルヲ見テ、ハヤ落陳ト見エタリトテ、道ヨリ取テ引返
シ、老若童部ヲ扶ツレテ、大津留河内守鎮益カ在陳ノ
松カ尾ノ城ニ取籠ル、新納右衛門佐久持 武者ニテ有
ケレハ、船カ尾ノ城ヲ輒ク攻落シタルイキホヒニ、大
津留松カ尾ノ城ヲ攻落サントテ、同月ニ松カ尾ノ城ニ
押寄テ見レハ、四方難所ニテ、岩岸峙チ谷ハ幾千丈ノ

深サ共不知、鳥ナラテハカケリ難ク思ハレケレハ、矢
入ヲモセス取テ歸シ、其日ハ人馬ノ息ヲ休ントテ、松
カ尾ノ城ニ野陳取テソキタリケリ、明レハ狹間山城守
鎮秀カ籠リ居タリ權現山ノ城ヲ攻メ破ラントテ押寄ケ
ルカ、是モ難所ノ高山ニテ、鳥モ輒ク翔 人間ノワ
サニテ力攻ニナリカタク、殊其身本身ニテ多勢取籠リ、
城中ニ人數居アマリキ、山ノツ、キニツハメカ城ト
テ有ケルカ、梶与力ノ軍勢ヲ入置タレハ攻カネテ、數
日 過ケルカ、新納右衛門佐久持若武者ナカラ高智
ノ賢キ仁ナレハ、色タニ方便狹間山城・松カ尾ノ城兩
所ノ城ニ大勢ノ敵リ居タリケレハ、無心元思ハレケ
ル、扱龍王迄義統公 供仕リシ宗徒ノ人數、宗像掃部
介鎮繼・吉弘加兵衛尉統行・其弟田比平介統員・大津
留河内守鎮益・田比六郎統辰・臼杵彈正統光・寒田六
之進統政・齋藤勘介・賀求主膳・秋岡式部、其外宗徒
ノ人々龍王迄君ヲ守護シ、敵言同シテキタリケル間、
大野郡・直入郡ハ 嶋津ニ隨身シテ、志賀 左衛門カ
大友ニ無二ノ心指ニテ、岡ノ城ニ籠城ニテ居タリケレ
ハ、 嶋津兵庫頭モ朽網ニ睨ト在陳シテ居ラレケリ、
大友左衛門義統豊前龍王迄引退キ玉ヒ、シカモ豊後國

ニハ曰杵丹嶋 二宗麟公御在城ニテ、薩ノ軍勢攻兼テ引退ク、佐伯權正カ城・岡ノ城・松カ尾ノ城・玖珠津無礼此城ニ籠リシ者共ハ、大友方ニフリハモナク心指 ナレハ、薩ノ軍兵共無覚束思ヒケレハ、日田郡・速見郡・國東郡迄ハ討入カタクシテ、守ハ朽網ニ在陳、嶋津家久公ハ府内ニ在陳、伊集院美作守・白濱周防守 新納右衛門佐ハ 庄瀧ノ河内ニ在陳シテ、薩ノ使者ヲ遣シ加勢ヲコハレテ、後詰ノヲ待テソ居ラレケル、 由ニテ權現ノ城ヲ引退キケル、船カ尾ノ一城計コレ加 佐波矢カ後矢ニテ輒ク責破リケレ共、松カ尾ノ城・權現城、

掟

一平佐御城普請ニ付而、普請衆兵糧渡方之儀、一日ニ三度、壹人ニ付七合五タツ、の事、

一就右之儀ニ付、御藏入より可罷出、御用物并普請并之事可隨御觸事、

右、兩條之事、北郷作左衛門殿・相良新右衛門殿方可被仰付候間、いるかせなく可被相調也、

天正十四年十一月十一日 伊勢平左衛門(貞成)

鬼塚主税介殿
宮路三之丞殿

「喜入季久譜中」
「正文在當家」

追而令申候、去年爲御使柳澤新右衛門討上之刻、手火矢壹町被懸御意候、尤本望此事存候、重而又被差下候、自然折節者、萬々可然之様御取成所仰候、恐々謹言、

「朱カキ」
「天正十四年十一月十八日」
喜入攝津守殿(季久) 昭秀(花押)

御返報

「上包」
一色駿河守

「上包」
喜入攝津守殿 昭秀

御返報

「旧御番所御文書二番箱中歴代龜鑑ニアリ」

到豊州毛利可及行由候條、別而相談様、對義久吳見肝要、仍去夏白糸廿斤到來、喜入候、猶兩人可申候也、

十一月十八日 昭秀(義昭) (花押)

嶋津兵庫頭とのへ(義弘)

「此御書、天正十三年義弘公御譜中ニ在リ、十四年ハ誤ナルヘシ」
〔張紙〕
「いかにも此ハ十四年ナルヘシ、ハ誤ノハノ字ハ、ノノ字ナルヘシ」

213 到豊州毛利可及行由候条、別而相談様、對義久吳見簡要、

仍去夏白糸十五斤到来、目出候、猶兩人可申候也、

〔朱カキ〕
「天正十四年十一月十八日」
〔義昭〕
〔花押〕

喜入攝津守とのへ

〔上包〕
喜入攝津守とのへ

「此書、喜入季久譜中ニ在リ」

214 〔本文書ハ二一〇号文書ト同文ニツキ省略ス〕

215 「義久公御譜中」「是ハ十五年ナレトモ前年ノ場ニ設置也」

天正十五年三月五日、

義昭公所賜去年十二月四日御教書今日落手、所以拜見也、

216 「正文有之」

今度秀吉其國鉾楯之段、無心元候、然者和睦儀、是非共
相噉度候、就其差下一色駿河守条、入眼可目出、猶昭光

可申候也、
〔朱カキ〕
「十四年ナルヘシ、誤カ」
「天正十五年十二月四日」

嶋津修理大夫殿

217 「義久公御譜中」

「正文有之」

今度秀吉其國鉾楯之段、無心元候、然者和睦儀、是非共
相噉度候、就夫差下一色駿河守条、入眼候様、對義久吳

見肝要、猶昭光可申候也、

〔朱カキ〕
「十四年ナルヘシ」
「天正十五年十二月四日」

伊集院右衛門大夫とのへ

218 「義弘公御譜中」天正十五年三月十日來于府内云々」

「正文在東郷二右衛門」

今度秀吉其國鉾楯之段、無心元候、然者和睦之儀、是非
共相噉度候、就其差下一色駿河守条、入眼可目出、猶昭

光可申候也、

〔朱カキ〕
「天正十四年十二月四日」

嶋津兵庫頭とのへ

「上包」
嶋津兵庫頭とのへ

「以上三通ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中歴代龜鑑ノ中ニアリ」

219 「在樺山氏」

今度秀吉其國鉾楯之段、無心元候、然ハ和睦之儀、是非
共相噉度候、就夫差下一色駿河守条、入眼候様、對義久
吳見簡要、猶昭光可申候也、

「天正十四年」
十二月四日 (義昭)
(花押)

嶋津中務太輔とのへ

220 「義久公御譜中 在天正十四年中」

近衛殿使節古川主膳入道宗以、舊多十二月十三日台書持
參、記左、

221 「正文在肝付半兵衛兼屋」

態染筆候、抑去秋禁裏御近所江堂上衆被遷殿候、家門之
儀同前候、然者諸式不如意之儀候条、匠作江差下古川主
膳入道候、此節者、以馳走助成可爲祝着候、猶進藤筑後
守可申儀候也、かしこ、

十二月十三日 (信守)
(花押)

肝付彈正忠とのへ

「上包」
肝付彈正忠とのへ

222 「正文在肝付半兵衛兼屋」

爲御使被差下古川主膳入道候間、令啓候、仍御家門御殿
禁裏被移御近所へ候、然者諸事御不如意故難調候、毎度
被仰越儀も乍如何、此節之事ニ候間、被成御助成候様、
御取合頼思召候、別而御馳走之段、可爲御祝着由、猶從
拙者相心得可申入旨候、恐々謹言、

(天正十四年)
十二月十三日 長治(花押)

肝付彈正忠殿 御宿所

進藤筑後守

「上包」
肝付彈正忠殿 御宿所 長治

223 (本文書ハ二三四号文書ト同文ニツキ省略)

224 誠到此境遂發足候之処、兩口之諸城等任利運候、爲如斯

之祝意、使書并鉄放到來、懇志之段歡悅候、然者從最前
以御入魂之首尾、府内表迄輒屬所勘、剩千斛・長宗我部
敗北之儀、自他國之覺大慶不過之候、弥對殘黨へ被廻計
略候之者、一着不可有程候哉、猶巨細之旨年寄可達之候、
恐々謹言、

〔天正十四年〕

拾二月廿日

義久(花押)

入田丹後入道殿

(義吏)

〔上封〕
入田丹後入道殿

義久

〔表紙〕

義久公
義弘公
天正十五年自正月
至三月

後編
舊記雜錄
卷十九

225 天正十五年丁亥

大友敗北、大閣着陣、

226 「中務太輔家久譜中」

家久在于府内熟讀、豊後半國已入手裡、雖然諸將爭雄、而不所退治敵國之思大勇、或難逢首尾乎、然則絕糧道泥前後進退無如之何、豫不可無其謀、由是使樺山兵部太輔忠助退三重守松尾城、乃天正十五年丁亥正月十八日、忠助發於府内到於三重、素加新納縫殿助・平田狩野介之守其城、所以通道之追凶徒也、

227

「樺山紹劔自記」

一中書は府内にして年を越候而、目出度春の始也、〔天正十五年也〕忠助ハ岩や城攻之時石打ニ合、從塀涯堀底ニ打落されけれども、此城責取らずして薩州衆開運事難成、然ハ敵に打合戦死仕より外無別儀と思切つる間、起直り少し心をしつめ、又塀ニ付て責戦程ニ城手ニ參候、就夫氣合然々候ハね共、玉泉と云唐の名醫養性申候間、仕立候而、彼豊州入御當家の御一大事と存候間罷立候、利滿此度之運をも見申候、めてたく候、先くいとま申歸り候すると申て、〔天正十五年〕正月五日六日比中書へ申候へハ、御用之子細有、今卒渡罷居候へと也、十日比ニ被仰けるハ、豊州を嶋津殿御敷可有事不取覚候、其故ハ諸人物ほしかりに打成候、分限を望心計にて、更手をくたく事なく、僅又武庫様御手花無然々ニ付、あらそう様成御氣分、惣大將之御振舞ニ不成合候、是惡事共候、伊十院右衛門太輔も底意地不可然候、我々も兎角申延候而歸申度与中書被仰候、定而此分見及候半、乍去忠助へ談合申候する事候、以一人可申候間、被仰候而平田伊賀守を御使にて、中書御意趣ニ忠助を頼存ニ而候、三重口ニ御坐候而彼所之番被入御念候得、其故ハ必國

中へ押入候人衆長番不届候而打歸候する、其時彼三重を敵取切候ハ、無行方爲跡笑止之儀ニ候へ共、今敵人此等之底意不知候而、目出度など、申候事、當家之運浮雲くくと存候、是非共忠助三重へ御坐候而、可然候する由承候、我等御返事ニ申候ハ、承候通一と合點申候、乍去今日迄ハ萬事目出度事計候之間、御暇と申候処ニ御奥意御坐候而被仰候、追而御返事申上候すると申候へハ彼使又押返し來候而、早く敷御打立候得、一重ニ頼思召由承候、又忠助此國之様子何と見申候哉、御談合と被仰候、其時御談合と候へハ、申事ニ者、御意之様ニ我も存候、御油断有間敷候与申候、其後高崎越前使ニて具足・茶壺など給候而、又御内談共候、三重へ番直し候而、彼所頼思召之由也、左様ニ候ハ、御意次第と申候而、正月十八日利滿迄罷候而、次之日三重へ罷着候、十九日ハ在郷へ宿申候而、次之日松尾の城へ上り見申候、城ハ岸切廻し候而、番ヤ一ツ作候而、平田狩野介麓に被居候、新納縫殿助も麓江候て、夫丸之様成もの壱人ツ、番ニ上セ候、城之後又向之原ニハ、高屋衆として地下衆七百人の衆と申候而罷居候、是を見申候、儘こそ中務被仰候ける、今分ニ候へハ遠

慮不入事と存候、縫殿助殿狩野介江申候、乍推參我かの上城へ移可申与申候得者、我も左様ニ存候とて、家作候而馳而罷上候、如此候而聞合候へハ、城方近きハ壱里、遠きハ弐上り、人數二百三百、六七百、千弐千三千宛にて栴たる在郷衆初皆撫付て、礼儀迄ニて有ける人衆拾三ヶ所敵と成候、其中ニ小牧といふ城、鍋田と申城二ツハ此方人衆少と差籠被置ける、敵仕取候や、さい木にうの島より野伏日と打廻候、松尾麓之人衆計未其色不見得候、日夜用心仕候而人質を取手ニ付候へハ、地下思付由也、如此候而日州之通路絶と成をおきのひ、中務御座候へ与度と注進申候間、この在所江中務待付候而打廻を被指候、然處ニ三城衆南郡江番とて被參候を、先と此地へ留置申候之間、あたり五里か間無敵追拂候、如此候而思ひ迷る跡ニ候、然處ニ京都方木食上人被下候由ハ、大友方天下を頼存之儀ハ、就夫御栴とて彼木食上人被差下候也、左様之祝とも下輩之者聞及、從京可然聞得候とて、味方ハ勝ニ乘、又緩と子細も日とまさり候、如此之砌、美濃守と申候を大將ニて豊前へ着之由聞而、去ハ地下等之者心替して、武庫様も伊集院御供ニ而補飛田方府内江御坐候、

木食參会也、又府内を暮方ニ御出候而退被成候、御門前を矢を射、應地下之族も候へ共、少もさわかすして御開ニ、清田と申城方出合取切候へ共、御前ニふさがる人衆多く有之間、事共せず打通候而、日差出る比松尾の城江御入候、今こそ中書之御遠慮も我々前ニ辛勞仕候つる儀もあらはれ候也、去ハ前之夜半計ニ福島衆高田と云城ニ候けるが、樺山陳屋ニ來候而被申候、昨日高田之地下衆心替仕候而、伊集院美作守・白濱周防助父子を始として打死にて、伊集院下野守ハ府内へ御談合とて、三日先より被參候、府内之由ハ不知、國中皆々如此之由申候、爰元御油断ニ而候与被申候、彼人河ニ入候歟、又雨ニぬれ候や、震候而散々敷跡ニ候、忠助委敷承候、此段最前方存付候事ニ候、先々悠々と候得とて、火を燒小袖共着替、ぬれたるをあふらせ候而、食酒など賄候へ、御身之事ハ中書告知せ候事、忠節の儀ニ候と申、則悴者共ニ申聞せ候由ハ、今更さわくへからずあてかいの前也と申て、弥落着候とて靜ニ罷居候を彼人被見候而、いやく御油断ニ而者不可然候、此國を打捨本國へ引歸候する御談合之由候、縦令御存命候共如此候、いわんや跡之事も不知候与申候間、

鳥の鳴聲を聞て中書へ參候得者、彼にも聞ゆる子細候けるが、此方へと仰候、先刻福島衆來候而、如此之様子申候、実事ニ而ハ候ハしと存不申上候とて其由申候へハ、爰許へも聞得申候、于今不及沙汰とて中々常之御雜談也、さてこそ爲此爰許番頼候、國中人衆此城へのき入候ハ、何程なりとて此元にて籠城之用意と被仰候、然ハ日指出候比早打來て、夕部 武庫様府内御開にて候、夜入候而清田衆通路を取切候、跡之事者委敷不存候与申、儘ハ何所迄も御迎ニ參候とて、中書も又七殿も參候假、規久最前ニ懸付候へハ、武庫様靜ニ御出候、御供申皆々城へ御籠ニ而候、其夜御談合候而、又松尾を御開之由候、いかなる者の告渡候けるや、夜中ニ人衆引取候而、夜明候而見候へハ城之衆計也、日指出て 武庫様城を御下候而、程經て中務方樺山江御礼被成、早速罷歸へきよし承り候折節、忠助莞尔として越ノ王吳ニ事ノ如く、人々有腹心之病癩ハ如疥癬と申候歟、大友身之難儀ニ及候とて、天下を頼奉候する事を無思慮故と雜話など申、まつ早く中書先ニと申候へ共、又御使有、猶も同篇ニ御返事申候間、左有者御坐候とて、三度之御使也、遙ニ御坐候而、忠助・規

(本文書ハ二三〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

久今ハはや孟之反か心ちせよと互ニ語り、心静ニ松尾城を罷下り候、地下等之者共立并候而、是を見物仕候、其中ニ地下之者悪口を仕たるを一兩人打せ候而罷出候へハ、敵味方の境見分申候、如此候而心静ニ千薬師堂江参見物いたし候而、緩くと坂之向上る處ニ、從跡鉄炮を打懸候へとも物共せず上りけるに、坂より上を奥畑と云所之人衆未明より可取切覚悟ニ而、手火矢軍ニなりけるを跡ニ者不知、各鉄炮衆を指合せ射のけてハ通る程ニわつらひなし、跡ニ者三城衆吉利殿其先ニ樅山参候處ニ、皆くのき上る處を見而、三方より敵押懸候而、ひたと着、其時任無了簡三城衆立留候、然處を後之向之尾古吉利殿相注「二字本マ」立留候跡ニ、由有けに候与大音にて申人有り、忠助聞付候而、規久若役也、見つくろひ候へと申候、規久則弓手之方へ馬をおり直し、道上を矢たけ計り懸歸し時、初より取切候奥畑之方之敵に取合、太刀下ニ敵を打首差上たり、是を見て追懸り、三城・佐土原・穆佐衆之手柄首數百に及ぬ、如是ニ而心安し、次之日山く鉄炮射候へ共のきとり、

229

(本文書ハ二三一号文書ト同文ニツキ省略ス)

230

「御文庫廿二番箱五卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「裏カキ」
「堀見にて調申候」

「上書有之」
「羽柴美濃守殿案文 天正十五二 南光坊御使之時」

節く可令啓之處、遠境故無其儀候、仍旧冬以兩使如申登候、大友家連と懇望候哉、引卒他邦被執懸由顯然之条、分國軍折角日向堺迄致出張、爲防矢軍衆差向候、然者千石殿・長宗我部殿、義統被爲一致之段、其聞得候之間、至右兩手今度出馬之儀、縱 関白殿雖爲御下知、從當家對京都、聊不存緩疎上者、何条可有御遺恨歟、可爲用捨肝要之旨、遮而雖申渡候、無承引被相懸候、難默止一戰得勝利候、剩豊之衆依敗軍、千・長諸勢之不分差矣、數千騎討果候、案外之至今更不及是非候、然共深重爲申入筋者、京都・四國之士卒於府内表無爲方砌、弟中務少輔爲噉、大船三四艘程堅固被遂出船、不可有其隱候、旁以御遠慮、時く可預取合事本懷候、恐と謹言、

正月十九日

修理太夫義久

謹上

羽柴美濃守殿

(秀長)

「全卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「裏ニ有之」
「垣見にて調候」

「上書有之」
「石田治部少輔殿江案文天正十五南光坊御使之時」

舊多兩使僧指登候、定而相屆候覽、爲如此之首尾得急便、追而飛脚申付候、仍大友家連々計策之謂、引卒他邦被取懸之由歷然之条、分國軍折角日向境迄致發足、爲防矢軍衆差出候之處、千石殿・長宗我部殿、義統被爲一致之由、其聞得候之間、至右兩所此度下向之儀、関白殿雖爲御下知、從當家對大坂、毛頭不存逆心^標上者、可有何条御遺恨候之哉、用捨肝要之段、遮而雖申通候、曾無承引被押懸候、不及吳儀一戰得勝利候、剩豐之衆依敗北亂、千・長之勢不致差別、數千騎討果候、覺外之至今更無是非候、然共不存疎隔筋者、於府内京四州之士卒難儀之刻、以弟中務少輔調達大船三四艘程、被遂出船候、不可有其隱候歟、旁被成御遠慮可然様取合所希候、餘者期後音之時候、恐々謹言、

正月拾九日

義久

石田治部少輔殿

御宿所

返々御圖之事、於霧嶋社頭御申之儀も勿論有之、又被成勸請、從何方モ被伺、御神慮事も先例多々候之条、餘仕惡ま、如此候、自然談合衆之内ニ表裏共候て氣任之由、言上之方もや候之覽と、寔乍邪推ケ様にも存計候、右条々、貴所爲得心申候間、相構而書牒他見有ましく候、

改年之御吉兆千喜万悦、多幸々々、仍如存知至母半礼滞在候處、於三江口依勝利、府内へ罷越候て可然之由、被申衆モ有之、又南郡ヲ堅め候て可然之段、被存候方モ有之、又從秋月者玖珠郡ニ火色を立候ハ、秋月事者不及申、高橋迄家連續之儀不可有別儀之由、使節被指越、類ニ懇望候之条、何共難默止故、談合衆ニ相尋候へ者、二三方之儀召惡候之段尤候、僮者可爲御神慮之由、各被申候条、任其旨、霧嶋へ御圖申候へ者、玖珠郡之可爲行之由、御神慮事成候間、朽網致陳易、玖珠郡へ先勢指越候處、先々松木与申城令落去、其外二三ヶ所屬利運候、御神慮寄特候歟、然處從府内可參之由被申越候間、既雪月廿八日ニ如府内打立候處、白刃之内候之哉、相賀鶴井一兩所岡より致破却候、就夫道折・入田左馬助を始各地下衆、府内へ罷通候てハ、南郡事皆々可相易候、左様ニ候ハ、

府内事通路可爲不通之由申候、拙者モ令納得、自然府内

へ罷越候て南郡打替候ハ、此跡之辛勞可爲徒事存、其

日ハ相留、年頭ニ又府内之様打立候之处、野上よりハ頻

越山之儀被申候、又地下衆ハ如旧冬朽網へ滞留と申候間、

榎牟礼ニてのことく仕惡候て可爲如何之由、談合衆へ尋

候へ者、又々御圖申御神慮次第可然之由、皆同被申候間、

又霧島へ伺御神慮候へ者、陳易之儀野上へとおり申

候、ケ様ニ兩度まで御神慮事成候ま、中書を朽網へ相

頼候て此方へ罷越候、然処以氣任令陳易候之由、大守

様被思召候哉承候て、心遣千萬候、曾以私之非分別候、

種々致談合、其上御神慮重く存如此候、其首尾候之哉、

帆足之事致落城、打續數ヶ所任存分候、乍重言聊無私曲

之段、出合之時者執合所希候、餘者美作守可被申候条、

省略候、恐々謹言、

「天正十五」
二月七日

(義弘)
義珎(花押)

喜入攝津守殿

「上包」
喜入攝津守殿

義珎

「此御書、喜入季久譜中ニ在リ、正文在當家トアリ」

233 「在羅抄」在御文庫廿二番箱五卷中「字也」

到九州御動座之次第

正月廿五日

卷方五千
羽柴備前少將殿

二月一日

四千
宮部中務法印

龜井武藏守

二月五日

貳千
前野對馬守

八百
赤松左兵衛尉

千貳百
福島左衛門太夫

千三百
高山大藏少輔

二月十日

卷方五千
羽柴中納言殿

二月十五日

千五百
羽柴若狹侍從殿

五千
羽柴丹後少將殿

三千
二月廿日
羽柴越中侍從殿

274

南条勤兵衛尉

木下平太夫

八百
明石左近

四百
別所主水正

三千
中川右衛門太夫

千三百
羽柴丹後侍從殿

千五百
羽柴伊賀侍從殿

八百
生駒雅樂頭

三千
羽柴北庄侍從殿

千七百 羽柴東郷侍從殿

三百 青山助兵衛尉

七百 溝口金右衛門

百 太田小源五

二月廿五日

千七百 羽柴松嶋侍從殿

千 九鬼大隅守

千 羽柴岐阜侍從殿

三月一日

千 関白殿

千 尾州大納言殿

五百 羽柴陸奥侍從殿

五百 石川出雲守

前備

四百 羽柴左衛門侍從殿

二百 蜂屋大膳太夫

百 生駒主殿佐

百 矢部善七郎

百 上田左太郎

千 木村常陸介

千 村上次郎右衛門

百三十 山田喜左衛門

千三百 織田三郎殿

百五十 岡本下野守

千 森 右近

五百 御小姓衆

五百 羽柴敦賀侍從殿

二百 水野惣兵衛尉

五百 羽柴河内侍從殿

百五十 市橋下總守

百五十 有馬刑部卿法印

二百 稻葉兵庫頭

五百 津田隼人佐

百五十 松下賀兵衛尉

百廿 牧村兵部太夫

九十 池田久左衛門尉

百 稻葉右近

脇備

千二百 淺野彈正少弼

千 山崎志广守

七十 長谷川甚兵衛尉

五百 留田左近將監

百廿 津田大炊頭

百五十 大垣与一郎

百五十 加次屋内膳

百五十 川尻肥前守

百五十 古田兵部少輔

百 丸毛三郎兵衛尉

百 生駒千

五百 奥山佐渡守

三百五十 瀧川義太夫

百廿 瀬田掃部頭

百三十 古田織部頭

百廿 松桂左京亮

千 木下式部太夫

百六十 戸田伴右衛門尉

七百五十 戸田民部少輔

百五十 早川主馬首

二百 寺西次郎介

百廿 片桐西市正

四百 池田備中守

百七十 加藤主計頭

百 有嶋彦太郎

百五十 佐藤方二郎

百五十 青木所右衛門尉

但御馬廻衆人數入不申候、

合百八十八万六千三百八十

234 天正十五年丁亥

正月、犬童又十郎戰場詳か
ならず

二月十八日、甲斐右京亮重尙前年より豊後小牧成將にて、岡城主志賀親次來て、小牧・編田の兩城を陥す時、戰て死之、家僅二百八十人死之、甲斐加賀守重武・甲斐肥前重朝高知尾上・甲斐豊前守重利・甲斐甚七重房・甲斐長鶴・

甲斐重正・甲斐彌太郎重次・坂本飛彈・福永四郎三郎主従百三十人同死之、丸田郷兵衛家久・矢上彈正同・宮之原淡路同・

瀬之尾二助同・志和地治部太輔豊後にて戰死、年三十四、前年ニ治部少輔載す、同人なら、志賀播磨介 普追城主にて豊後に戰死とあり、

三月十一日、長井縫殿介北郷忠虎臣にて、貫明公師を野上よ班さる時、遮る敵と大鶴の城下に戰ひ、黒田將監同・山内備後守同、〔三月十一日ノ下ノ貫明公ハ松齡公ノ誤〕

十五日、佐多常陸介久政松齡公豊後より師を回さるの時、瀧田にて戰死、年四十二、從卒五十二人、其他數百人死之、伊集院美作守久宣鶴崎或清田にてともあり、年五十八歲、池山掃部兵衛尉久宣と同、時戰死、白濱周防介重政或爲、澁谷、淵邊平内左衛門元

秋年三・平田新左衛門尉宗張年四十二、或四十八、長谷場出雲守純眞此日鶴崎戰、或刑部、松下越中守少輔、池上掃部兵衛尉池山、福

永藤五郎・枝次左京亮・志和地外記・伊佐敷左近將監

久理久政一族、年二十五、從卒五人同しく戰死、赤崎神藏久政臣、或神祇佐とも、山口平内左衛門同・的場仲左衛門同・松元源助同・村岡休内同上、或作大

助、山之内藤太左衛門同・朝隈兵部同・鮫島四郎左衛門同・名越助左衛門同・安樂大炊助同・春成内藏介此列ニあり、新納民部太輔同上、此に、平田采女 伊集院久宣從兵にて置て、佐ノ士同しく戰死、子孫穆

十八日、大寺大炊助安辰永谷河内梓越にて戰死、阿多筑後守同しく・大寺仁兵衛梓越にて疵を蒙り、田野ニ回て死す、

廿七日、伊地知藏人重増豊後坂梨にて戰死、年四十二、有川兵部豊後黨

此月或四月十・宮原筑前守景種肥後隈の庄ニ在番し、御船にて戰死、年七十三、柏原某與三郎景種小姓にて同し、川畑甲斐守肥後より軍を回さる時、花の山城下兵船取

四月十七日、島津三郎次郎忠隣京軍と根白坂目白坂とも、四本半九郎忠次・猿渡越中守信光年五十四歲、時家臣、十一人亦從て死之、伊集院日向守忠兼根白坂に戰、邊牟木関付左衛門國次・村岡伊豆重年・村岡圖書介重榮重年・吉富次郎五郎忠堅・廻

狩野介頼政・別府隼人佐頼延・酒匂新左衛門尉或作治部左衛門、本田帶刀親次・赤松彦次郎則基義秀・新納藤四郎縫殿

時の子也、伊集院宮内左衛門忠吉天正二年正月の列に見ゆ、同年歿、父子歿、喜入季久

年十七、

〔義久公御譜中〕

天正十五年丁亥正月廿六日、義珍換陣於球珠郡野上城、

^{の臣}長野豊前守 ^{季久臣、年四十二} 木通壹岐國陰 ^{忠隣} 村松弥太郎
^同 貴島勘解由 ^同 鳥原勘助 ^同 貴嶋源四郎 ^同、來住
 備前綱雪 ^{北郷時久臣三百人許同しく戰死}、小杉圖書頼 ^{同上}、高橋某・
 吉加江某 ^{同上}、帖佐治部宗典 ^{根白坂戰死とあり、此日ナルヘシ}、
 二十八日、牧參河 ^{桂神祇忠防の臣にて、從て平佐に城守し、京軍の攻を拒きて戰死、下も皆同し}、村原
 對馬・村原新助・桐原平右衛門・有馬分左衛門・前田
 四郎左衛門・岩本外記・松田主稅助・藤田五左衛門・
 兒玉休介・有馬右京左衛門・村原左衛門次郎・開聞寺
 代官金兵衛・木通某・有馬權左衛門・森主稅助・田中
 出雲守・田中彌七・高城讚岐守・松田助八郎・拔見筑
 後守・圓満寺屋敷之大左衛門・内門乙名一人 ^{以上皆平佐の城にて戰死}、
 此年、逆瀬川奉膳兵衛 ^{武安子なり、豊後の野津にて戰死、二月八日の事なるへし、下も同し}、伊
 地知丹後守重政・志和池治部大輔忠繩 ^{年三十四}、伊地知新
 三郎・鬼塚兵部左衛門 ^{助八} 坂元郷兵衛 ^{以下は皆日州高城にあり、此年戰死とあり}、
 細山田内記・日高弥左衛門・米田孫十郎・山下兵七・
 石原助太郎 ^{亦新納院高城に於て戰死とあり}、
 年月闕、郷田安藝守兼年 ^{豊後佐伯にて戰死、此に於考}、

〔義久公御譜中〕

〔正文在佐多飛橋本與左衛門〕

大隈國根占湊小鷹丸

船頭橋本右京亮

彼地諸城主粗降旗下、然而下城未降旗下、川上上野介久
 信・町田出羽守久倍・新納武藏守忠元等、領阿蘇家之士
 卒、攻彼城、即日破卻外郭、乘得二丸斬戮數多之敵、本
 丸雖堅支五日而陷焉、且復岐部・惠良・切加布・小國之
 北里某等、皆以降伏矣、津个牟禮者不肯大友氏、而不降
 我之旗下也、

天正十五年二月上旬、攻下莊某之未降伏、不得防禦而請
 降、以應其求、然而未下城之際、殿下秀吉公算島津氏
 之罪曰、匪嘗不用分國之令、且復追散仙石氏・尾藤氏等、
 殺戮長宗我部氏・十川氏及筑前州岩屋城主高橋鎮種入道
 紹運、是皆其罪所以不可赦免者也、然則向海西以不可不
 征伐渠之黨徒、乃到著于赤間關、其勢殆平庶幾二百萬騎、
 其聲已振豊後、由是往昔降來者皆背島津氏、傾心於大友
 氏而已、

琉球

天正拾五年亥二月廿五日

義久(花押)

下

237 「義弘公御譜中」

「正文在手鏡」「旧御番所御文書二番箱中歴代龜鑑中也」

和平儀申遣処、言上之趣、先以神妙、就其秀長存分之通「吉力」

委細申合、昭秀指下之、此節入眼肝要、猶昭光可申候也、

「朱力キ」
「天正十五年」二月廿六日

「義昭」
(花押)

嶋津(義弘)兵庫頭とのへ

238 「義弘公御譜中」

天正十五年丁亥正月、居玖珠郡之地輩、頻請薩摩守兵、

由是川上上野介久信・町田出羽守久倍・新納武藏守忠元

領軍衆、振武威入玖珠郡、則野上・岐部・惠良・切加布

屬旗下、小國北里某亦爲旗下、下莊某未降也、同月廿六

日、義珍換陣於玖珠郡野上也、

天正十五年丁亥二月上旬、欲攻下莊某之未屬旗下、發軍

衆陣四面、於茲請降、然而未下城之際、殿下秀吉公數

島津氏之罪曰、匪翅背分國之令、反追散仙石氏・尾藤氏

等、且討殺長宗我部氏・十河氏等、又攻亡筑前州岩屋城

主高橋紹運、其咎難宥、早向西海誅戮渠之黨徒、乃渡關

戶之聲已振豊後、由是昔日降來者皆背島津氏、忽變心意

歸大友氏也、

239 「北郷忠虎譜中」

同十五年丁亥季春、殿下秀吉公催於畿内中國四國之兵

數十萬騎、航于西海、大旆將入豊後之日、所屬于旗下之

士卒忽叛、而塞大鶴城之通路、且強敵競來、是以僅拭得

鰐涎退于府内、此時忠虎家臣長井縫殿助・黒田將監・山

内備後守戰死于大鶴城下、其外死者多、

同年三月十五日、忠虎從太守兵庫頭義弘公、凱旋於府

内、同十八日、入于日州縣城、

240 「樺山兵部大輔忠助譜中」

天正十五年丁亥正月五六日之際、忠助訴中書公曰、去年

陷岩屋城之時、愚身不幸而所以投之當大石、加療養未快

心身、而今度從實駕爲發向、逢于利滿之合戰因勝利迄府

内入手裏大慶之辰矣、於忠助者蒙恩免欲歸國云云、同十

日之比、家久主曰、豊後州迄後島津殿可成領知者未能

謀知、吾豫慮之則諸人有怨、而專所領之望、更無碎手之功、伊集院右衛門大夫臆意亦非予之所好、所忠助之欲歸國者予知焉、爲之之故也、吾亦與忠助俱有歸國之願、雖然退進敢不可私、且亦有可遣一价達之事云云、其後使平田加賀守達曰、情慮今度征伐之首尾、所攻入于當國之士卒、長不得警固、而爲歸陣之催乎、及其時敵軍若警固三重塞通路、則吾之軍進退何之如乎、忠助三重之爲警固者是幸之幸也云云、忠助報曰、貴命段々所以謹承也、去年當國自伐入之初當年至今日、只有吉事而無惡事矣、故請歸國之免、然而無免許、而且加一役爲思慮、而後宜告報矣、加賀守即時再來曰、不日所以願進發、敢勿彷徨、忠助之思慮如何、無所殘有言、則宜依善言也、忠助曰、所命之遠慮共以金言而已、敢不彷徨者可乎、又使高崎越前守傳曰、三重之警固偏所以賴者也、且亦賜甲冑一領與好茶一壺、如此則無所辭、不得已爲應諾、而正月十八日、發於府內、其夜宿于利滿、翌日著于三重、宿于民屋、同廿日、登于松尾城、見構以下用意、則造立於警固之一小亭、類于人足者教一人守之、平田狩野介・新納縫殿助者居城麓、又城後與向原有人家、問之則曰、稱高屋之地下人等共居七百余輩云云、忠助寒心、即謂件之兩人曰、吾

移彼城可警固、速營草亭爲居處、而後地輩人家之間遠近多少則曰、去此城者不過一里二里三里、人數亦或二三百六七百、或一千二千三千、或構柵、或在鄉郡居者十三个所、初者雖屈旗下、漸皆爲敵、其內小牧・鍋田之兩城者、味方少籠置、雖令爲警固爲敵所陷、故發野伏於佐伯丹生島、然而松尾城麓士卒未有違意之企、且使彼等出質、撫之懷焉、依之補日州之通路將絕、所以俟家久公也、其後家久公渡御于松尾城也、于時 將軍家秀吉公數島津之罪、欲爲征伐向海西、已有渡關之戶之聞、且亦高野木食上人・一色宮內少輔來爲和睦之媒、而不合于吾之將心、於茲議曰、有佗邦與大軍戰、不如早歸吾國以保日隅薩三州要害之地依地利、三月十五日夜半、兵庫頭義弘主發於府內之路、遮清田之鄉強敵一兩輩討捕、其外追退無恙歸陣之旨、粗有告來者、故中書公・又七殿爲迎進發也、愚息規久最前企參迎者也、同十六日之日出、著于松尾城也、因茲兄弟潛以評議、明日十七有開陣之議定、未令諸卒知、悉夜中爲開陣矣、義弘主者待日出發於松尾城、其後中書公之父子出城門也、從其後忠助・規久爲開陣、爰地下之賁賤群聚、而爲見物、其中有惡口之族、一兩輩討殺之、而後令進發矣、其路有千藥師堂、兼有所聞以爲

參詣、緩緩然致禮佛、而後驗峻難之路邊、有稱奧畑之處、彼邊之敵勢遮前途、未天之白先陣之輩發鐵炮爲矢軍、悉射退、而後押通、忠助之後者吉利下總守率三城師旅、已過峻難、于時敵軍自三方襲來、故三城之勇士立留、而爲防戰之勞、此事未知、自向之尾忽以大音有告度者、于時忠助謂規久曰、爲若役宜合力也、其言未終、規久引直馬於弓手、向道上懸出指會于奧畑之勢、強敵一人討捕、其首貫太刀以高指上矣、因茲三城・佐土原・穆佐之軍兵等、競前斬敵首數百、故凶徒退散者也、其翌日道路之左右、雖發鐵炮於諸山中、不屑退去、而踰梓山無恙著於日州曰杵之郡矣、於茲有恨愚心者曰、昨日高動野之合戰得勝利、而發凱歌遂本意、雖然愚息久高者有南郡、其忘安否如何思全吾身、而不有愛子之念者口惜哉也、

241 「權山權左衛門久高譜中」

天正十五年丁亥春三月、豊後州開陣之時、久高者島津左衛門督歲久公之爲從軍向肥後、所退之路過白根城、敵軍蜂起而以爲煩也、支前途則爲前鋒、逼於後則退爲殿、一夜之間打太刀者七八度、如此以爲勞苦漸敵勢防退、而後有歲久公之後、爰岡之城主志賀小左衛門尉親次道益之子、道輝之孫、

引率徒黨、逼來者太急也、久高者相良之家臣與犬童美作入道休矣・同軍七・稻富將監等俱阿蘇之有坂無城、敵軍圍坂無者未知幾重、任運於天防禦不怠經三五日、于時新納武藏守忠元・伊集院肥前守久春・町田出羽守久倍三輩之從軍歸來爲後圍、城裏得勇力、翌朝四月十六日、開城門向大軍、盡筋力爲防戰、敵軍漸敗、故斬得敵首者一百有餘、而後全身以爲歸國者也、

242 「御文庫拾六番箱六卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

内覚 天ノ十五
三ノ三

〔藝衆一兩日中、彦山ガシヤクか岩石か大隈か、可致陳易之由儀定之事、

一彦山ニ敵取登候者、日田・珍珠・津江・五条・鴻巣迄可相續事、

一日田郡之儀、從此方一動雖仕度候、筑紫龍造寺・草野高良山〔馬岳・秋月ヨリ程近候之条、人數之催不〔成候之事、

一日田郡打破、秋月ニ可被相續儀第一彦山之御加勢ニ可罷成之事、

一日田郡被打破候者、御行之惣都合御大利ニ可罷成之事、

付仲間野仲之事、付野仲手切仕候者、龍□王岳迷惑
ニ罷成事、付角牟礼可爲迷惑事、付山三人間注所
可□相證事、

付岡・長手切候ハ、鴻□可爲迷惑事、
付草高可爲破却之事、

付山下迄可相續事、□城・かさき城□屋・寶満岳此
内一城も敵案ニ罷成候ハ、御行之障ニ可罷成事、

一日田郡不被打破、御陳と爰許の通路不輒候之間、爰元
ハ御加勢之儀敵味方□遠見懸候事、

一於此上も日田郡之御行御延引候者、此表はたと迷惑ニ
可相極之事、

一御和談之御梶者 ぬきてと相聞え候之事、
以上

『權山紹劔自記』

一天正十五年丁亥三月中之十日の事成しに、命を延て喜
ひつゝ、梓山を越て日州臼杵江着候也、口惜哉、昨日
高動野の合戦ニ打勝て、敵の首數多切并て勝吐氣を作
候而、當今こそ南郡には久高何と成行候哉覽と存出し
候、わか身ニ過る物なかりけりと申候、後ニ聞候へハ

白称と云、從城左衛門大夫歳久様をのけ申候而、跡先
ニ立事一夜の中ニ七八度も有けん由候、如何となれば
敵跡ニ責付時ハ跡ニ成、前を取切時ハ先ニ立て追拂ひ、
刀打をする事數度も、如此候而歳久をのけ取候而、卒
度跡ニ立候處ニ、敵數萬騎之勢ニ而十重二十重ニ取巻、
阿蘇坂いふ城也、無餘儀思切、五三日之間夜白隙なく
責戦候處ニ、新納武州・伊集院肥州・町田羽州三千之
衆後卷之由也、夫ニ得力城方切出る間、數萬騎之廢軍
也、敵を討事不可勝計、如此候而心安肥州表江打歸候
也云々、

『長谷場越前自記』

一府内方中務太輔家久者、鎌田出雲守を被召烈、御參陳
ましくて、同十五年丁亥正月五日より御評定事終り、
同正月廿六日に九多網之城之御留守番ニ被定、扱又御
神慮ニ被任、義久様之御陳處を楠の郡内野神か城へ
なをさせらる、彼の表の城主者皆御幕下ニ參陳す、か
りける處ニ、志岐の城の惡黨等楯籠る處を、新納武
藏守と阿蘇方ニ被仰付て、若手の軍兵相具して合戦を
致す、太刀下ニ敵多く打取て二の丸を攻破り、上は城

計りニ詰成て、夜白五日ニ攻果してぞ被捨ける、其後兵もの開陳して野神之御陳ニ在番す、然者彼の表の惡黨ニ或ハ參陳仕る、或ハ落居し、殘る處もなかりけり、去間、天正十五年三月十二日、野神の御陳を直せられ、其夜ハたけ宮といへる處ニ御在陳を被成けり、此時ニ地下の者共京方ニ心をよせて致内通處也、彼近方ニ湯の城とて有けるに、京衆の先手ニ黒田官兵衛尉指籠り萬方ニ計策す、此事世以無隱、足輕衆を五拾騎計り被打出さ、湯の城よりもたけみやニ寄かへる折節ニ、右之足輕衆懸合せ、手柄を碎きて防戦し、敵十五六人打取て、夜中の事ニ而有りけれハ、打洩したる者共を萬方へ追散して如御陳被參けり、同十三日ニ者早旦より勝吐氣を被作せ、其假ニ府内ニ御陳易を被成宛、同十四日ニ兵船少と浮出て、沖の脇と萩原と兩村を放火シて引退ク処を、味方の軍兵つゝき合ひ、各高名仕る、其討頸の実見ハ、爲御名代川上上野守被打出、役者河田駿河守ニ被仰付、然処ニ方々より物いひ共出來る、時節や同三月十五日巳之刻計ニ事成ニ、木食上人一色宮内少輔と打烈て、御太將軍武庫様の御陳所へ始めて御礼被申上、此時之御祝物一段殊勝之御仕合申計ぞなか

245

りける、

一日州表より 御大將軍修理大夫義久様御發足を被成宛塩見の城にて御越年ましませは、先手の御太將軍ハ中の務太輔家久を被遣、梓山を打越て、其中道ニ手寄くの城柵を破却して、村々を放火させ、三重の城に被討入、近邊の城主共残り少く召出し御頼有りけるに、尾方と云へる惡黨等之憚り申処を、伊集院下野守・同名美作守・本田下野守・上井伊勢守ニ承り、多勢を以て被攻、城内の武者共が手を碎といへ共、四方より火を懸け吐氣作り責けるに、大地も動く如く也、なしかハ以て可勘へ、唯ゆミくと責崩し、物ニ能僻ふれハ、尾方等が存外ハ、卵を以て石を討ニ吳ならず、諸軍兵の勢ひニ知るもしらんも押なへて進む計の氣色也、其後ニ寄せ懸て盤東寺江陳取て、先勢を打出し寄する敵を待居たり、去程ニ南郡表の御太將軍武庫様、上二重表之御太將中務太輔と申者、御兄弟御中ハ水魚の様ニましゝて、互の使節ひまをなし、鎧獄と驚の臺の城ニハ南郡より御手勢を被指籠、又利滿と三重ニ八日向

口之御人數を被遣処ニ、彼の城主ハ是を見て内ニて兵儀を致し宛、府内江注進仕り、則御敵ニ罷成る、扱悪しきさなしと云、軍兵を被指向、我もくくと攻破り、上城計リニ成る處ニ、内手の猛勢續合ひ、跡を遮る謀略をなす、用捨の兵ものきつと見て、御方の勢ニ下知をなし、しつくと繰り退けて、陳中ニ被討入、其夜も拂曉ニ成りしかは、各支度し打出て、大河の渡りを見合せて戰儀を加る時刻也、京勢と指見得て大登り馬驗もこ、やかしこに備へつ、左も花やかに出立て、城近く成る儘ニ打入らんとせしか共、薩摩の兵もの手なミの程を見せんとて、太刀を取るとき作り、面も不振切て入る、京勢も懸り合ひ一合戰仕る、薩方方の兵物ハ馬ニ離て早き事、猿猴の梢を傳ひ、新ら鷹が鳥屋を出て雉子ニあふごとく、此方タ彼方タと散々ニ切る程ニ、花の様成京人ハ、馬を乗捨て無力散々ニ落て行く、是を彼を聞よりも我先ニと打程ニ、切捨てハ數不知、せんごく返せと言葉をかく、權兵衛尉とハ名乗つ、口と心ハ相違して、をく馬の一物ニ捨鞭打て逃をの、く、名ニのミ聞得し豊州の上の原ニぞ走籠る、懸りける處ニ、御太將中務太輔家久を始め、諸軍兵

一同ニ勝て甲の緒をしめて、田舎馬とハ申せ共、走る馬ニつきしよりいさめる事ハ無限り、上野原の見向への森岡ニ懸付て、御着陳をわします家久の御心中、味方も敵も諸共ニ感せぬ人ハなかりけり、懸り鼻る処ニ、中務太輔方諸軍兵へ御禮をこそハ被成けれ、將又今之御下知ニハ、時刻を不移今宵府内入りとそ被仰、軍兵是を受給ひ、我先ニとそ進ける、彼を見る敵方ハ取物を取あへず、友義宗を引立て豊前を指て落て行、被打洩し京衆ハ千石權兵衛押立て、跡ニ先ニと逃て行く、薩方衆是を見るよりも上の原ニ懸上て、分捕り高名遂ニけり、於此節ハ足輕や山野郎、かゝる奇特ニ逢事ハ寶の山と覚得たり、金玉可得と云まゝに、義宗の重寶や千石の捨物を拾ひ取りく、町家百姓手ニ付て目ニ余たる土藏を、三ツ五ツ宛各々格護せぬハ無りけり、同十二月十二日より徳を得て、明ク爾彌生の中旬迄、倉開き藏納メ我を増りとせし間ニ、年月キ日次は押移り、山野郎者堪忍もことならず、皆本國ニ打歸る、跡ト者無人ニ成事を豊後衆者喜びて、本意を遂んと友義宗江注進す、亦京衆江茂言上す、扱者宗麟・義宗の頼ミ被成是一ツ、千石權兵衛尉指下し置処ニ敗北したる

是一、筑前國之内藏助被討果是一ツ、彼是爲雪恥辱西三拾余か國を駈催し、太閤様の御心も築紫方ニ御發足とぞ聞得ける、先ツ衆賦り者ニタ手に分て関の戸を押渡り、筑前筑後肥後肥前の海陸を関白様の御討下りましますば、御陳問と号し宛、東西南北無殘諸軍兵被指下、亦爰ニ豊前豊後ニ四國衆迄引卒て、御舍弟の中納言美濃守様御太將軍を被成宛、如雲霞被打下、先勢ハ豊後の内ニ湯之城ニ打籠ル、太閤の御先勢ハ石田治部少輔數万騎を卒て筑前前ニ被打下由、其聞得有しかハ、御兵儀之爲ニとて、御大將兵庫頭者楠の郡より府内表ニ御動座ヲ被成宛、中務太輔家久、圖書頭久長ニ御評定事終る處也、又肥後表ニ被指向て、御太將軍左衛門督年久・右馬頭・薩广守、此隨兵者町田出羽守・新納武藏守・同右衛門佐・伊集院肥前守・同源介・寺山四郎左衛門尉・町田左京亮・同名新左衛門尉・梅北宮内左衛門尉・二階堂安房介・猿渡越中守、此外之人とも我先と進出て肥後表へ被打向処ニ、阿蘇家の内北坂など云へる者心替りを仕り、跡切をいたすなり、かゝりける処ニ、伊集院肥前守・同源介を始として、右之兵もの手を碎きて合戦し、げきしんを退治して御舟

表に被打出けり、然処ニ宮原筑前守限の庄ニ在番して居たりしが、駈出て御方の軍衆ニ取り合とせしか共、地下の惡黨落合て數か度の太刀討いたせ共、老武者の再期とて高き所ニ打上て、寄手の敵を一見して、少シのひまにおもひいて、逃るまし処を、兼ておもひきれときに至りて涼しかるべしと、日新様の御詠歌を乍恐も吟味して、亦切り入て無吳儀高名仕り、其場ニ而戰死也、柿原名字も討死す、於此與三郎と云へる者宮筑州の小姓ニて拾六歳ニ罷成る、合戰場を切り通り三町計り過ぎけるが、返シ合せて名乗る様、此程ハ側ニ居て戰死之供を不致者、末世の恥辱と覺へたり、數ならん身なからも人者一代名は末代、早頸取れや各と呼る聲の内よりも、念佛を唱つ、腹一文字ニかき切て空く成し心さし、哀と問ぬ人そなき、角て時刻も移り行、肥後の國衆ハ、(マユ)媒叛とぞ聞得ける、速く可致陳陳と下知を加る処ニ、たに山黨之族共後切を仕る、にくき者の振舞哉とて、新納武州ハ乗りたる馬を引返し、心有ん兵ものハ我を見次げと云捨て、谷山ニ切て入る、是を見る兵物ハ我先ニと駈付て、手柄を碎き責果す、敵強きと見得しかと、合戦ニ打負て數輩頭をそ被取け

る、各高名を被逐て、八代之内ニ有る関之城にそ被着
 かせ、次之日者とふ朝ニ打出て八代を切り通り、あぜ
 ち山ニ打向ひ、亦求麻山の難処をも静くと被開せ、
 諸軍兵の有様ハ如何成る天魔鬼神と云へる共、是ニハ
 いかで増るへきとほめぬ人はなかりけり、相良方ハ承
 り、此時ニ多年之御恩を報んとて、眞幸越の上野迄堅
 固ニ送り奉る志こそ神妙なれ、去る間、豊後の國府内
 表の御仕合、其比ハ天正拾五年三月十五日酉の刻の下
 りニハ御退出そ被成ける、跡者放火ニ成りけらし、地
 下旅之人とも身を助んと入り亂る、此時に地下衆共宗
 麟の奉公ニ後切を仕る、佐多常陸介を始として、伊集
 院美作守・白濱周防介父子式人・平田新左衛門尉・長
 谷場出雲守・松下越中守・池上掃部兵衛尉・福永藤五
 郎・枝次左京亮・志和知外記各致粉骨宛、無余儀戰死
 を被遂、其夜ハ殊更雨降りて、無案内者の旅の道、く
 らきよりくらきに入ることくにて、手取くて行く路
 を、地下者共こゝやかしこを横入りして切り崩さんと
 せしか共、御方兵物落ちて向ふ者を打果し、逐物者追
 散し、手を碎き高名す、

246

『全』

一同十六日ニ三重之城ニ御光着を被成けり、終夜御評定
 最上也、御坐中の御人衆者、御太將軍兵庫頭義弘様、
 御舍弟ニハ中務太輔家久、川上上野守・伊集院右衛門
 太夫・吉田美作守・鎌田出雲守、此外之兵物も、我も
 くと進つ、同十七日ニハ、

247

『日向記』

一京勢下向有ケレハ、豊後國中ノ者共亦薩方ヲ背、年
 頃ノ味方ナレハ大友方ニ属シ、色替セヌ人ソ無リケル、
 三月十一日野上ヲ立テ、其夜建宮へ宿陣、翌十二日建
 宮ヲ立テ、其日府内へ引入ケレハ、アトカヨリ頓テ敵
 ト成、陽城ト取合ケリ、權現岳ノ挾間殿モ心替、嶋津
 へ矢ヲ射懸、同日ニ高野ノ木食興山上人・一色駿河守
 府内ニ着テ和睦有シカ共、嶋津氣色ニ不合取唆故和談
 不調、豊後國乱入ス、嶋津方ニハ嶋津中務太夫家久ヲ
 大將トシ、二万余騎府内ノ城ヲ楯相支トシケル、秀吉
 公蜂須賀ナト召列ラレ、城ノ南北ヲ下墨光遠卷ニシ、
 賣具ナト用意シ、稻麻竹草如クニ囲ミ玉ヒシカハ、難
 抱ヤ思ケン、濱手ヨリ雨風ノ紛ニ船ニ取乘退ニケリ、然

ヲ速船ニテ追懸、二艘追留首トモ數多討捕ラセ玉フ、同

十五日夜半ニ薩^セ廠衆爰カシコノ人數ヲマトメ退シヲ、

追掛々々伊集院美作守・平田新左衛門尉・田濱周防守

其外有名武士數百人討取也、夫ヨリ彼方此方ニテ道筋

ヲ取切シカハ、漸ク微命ヲ遁テ日州ノ如ク退散ス、府

内城番トシテ大友宗麟・義統父子入置玉フ、亦相瀬ナ

トニ有ケル薩^セ廠番衆、色々道口ヲ乞請テ引退ケル、朽

網ノ城ニハ宇土番代タリシカ、兎ヤ角調テ引取、根白

ハ嶋津左衛門尉歲久番代タリシカ、是モ肥後ノ如ク引、

入田モ薩^セ廠ノ如退、野上ヨリノ二手分テ嶋津右馬頭征

久大將ニテ、町田^{「本マ、」}・新納武藏守ナトハ日向口ヲ通、秋

月ヘ取合ントテ、上筑後ヘ打越ヘキ催ヲナシ、北ノ里

迄打立シニ、豊後ノ城ニヨリ薩^セ廠衆日向ノ如退入由告

來ケレハ、筑前ノ如越ヘキコトモ不叶、其俣肥後ノ如

ク引キリカソヘ、伊集院肥前守求^ク廠衆ナト箆居ケルヲ

迎取、漸面白ク調テ引退、此里モ同心ニテ阿蘇ノ如引

取、岡ノ志賀ハヤ坂梨ニ付テ陣ヲ取、新納武藏守・伊

集院肥前守ナト懸入漸切崩シ、肥後ヘ打出テ合子ニ箆、

右馬頭征久ハ三船ヘ箆ル、

248 「義弘公御譜中」

天正十五年之春、丁豊後州歸陳之時、使赤塚源太左衛門

尉重堅領步卒五十人、往菅之迫増勢、搦志賀播磨介宜到

薩摩、且復昇甲冑一領・鐵炮二挺於播磨介、播磨介報曰、

非翅得加勢衆、且賜甲冑・鐵炮、謹所以拜領也、於加勢

士衆者即追返進者也、當時警衛之將與伊集院三河守・犬

童休意俱可赴薩摩焉、右之旨趣源太左衛門尉反命者也、

後日聞之曰、源太左衛門尉歸參、翌曉與警衛士共、播磨

介欲首途於菅迫之際、稱大森彈正者爲大將、領一千四百

發於岡城、逼來於菅之迫、與守將爲同意指揮汗馬、自辰

時至未申時防戰盡筋力、遂戰死被傷者雖其數多、漸攻退

太敵、委乘馬只甲冑帶之、與妻子共步行逃肥後州甲佐來

也、

天正十五年三月十一日、去野上赴府内、今夜陣健軍矣、

同十二日、欲發於健軍、則 殿下之前鋒已來于湯之嶽者、

與小寺氏及權現嶽迫間某變心族共運籌策欲侵健軍之陣、

我軍相對競戰、而屠殺者十有六人、是以凶徒悉退散也、

揚勝吐氣、而到著府内矣、

同月十四日、叛逆變心者漂泊兵船、且復放火沖之洲萩原、

則我之兵衆走進斬獲敵兵數十者也、

天正十五年三月十五日、高野木食興山上人・一色駿河守昭秀持 義昭卿舊多十二月四日、又去月廿六日御教書、來于府內勸和陸矣、

〔此ニアル御教書、十四年十二月ニ載ス、参照スヘシ〕

然而不合于諸將心、而僉云、不如早歸我國以保薩隅日三州中要害之地而待其時、由是各相議、俾弟島津左衛門督歲久・同姓右馬頭征久爲將、町田出羽守久倍・新納武藏守忠元・同姓右衛門佐・伊集院肥前守久春・同姓新左衛門尉・梅北宮內左衛門尉國兼・二階堂阿波介秀行・猿渡越中守等爲從軍、經肥後路退去、義珍・家久率大軍、經三重路議到日向如斯決定、而後待夜半以遂發於府內之路、欲過清田鄉嶮難、敵兵遮前路悉以欲屠殺、整騎步不亂先後、使前鋒追退凶徒之際、伊勢彌九郎貞昌・久富木攝津介各斬獲強敵一人、此時我之軍中戰死者佐多常陸守忠常・長谷場出雲守・松下越中守・池山掃部兵衛尉・福永藤五郎・枝次左京亮・志和池外記等也、且集彼此警衛之士卒退矣、爰鶴崎城警衛士伊集院美作守・平田新左衛門尉・白濱周防守・大寺大炊助戰死、其外步卒戰死不知員數也、其翌十六日、到三重入松尾城之路、使川上上野介久信・伊集院右衛門大夫忠棟・吉田美作守清存・鎌田出雲

守政近已下、追退前後凶徒也、

同月十七日、待朝日出而去松尾城、過千藥師堂赴梅之嶮難、凶徒等雖發鐵炮於後、不屑而已登坂上、則有稱輿畑之地、彼地凶徒爲遮前路、發鐵炮以進來、俾我之軍中持鐵炮者對之、以射退而無障導焉、少焉凶徒從三方逼來、而欲屠殺後陣衆、義珍・家久指揮軍中、各勵氣奮威逼凶徒接兵刃、敵軍忽瓜潰、由此獲敵首者及百矣、今夜宿于長谷川內也、

同月十八日、發於長谷川內凶徒等進來、則指揮以追退之、丁此之時阿多筑後守戰死焉、敵兵漸以退散、則超過梓山、于時薩隅日三州中在國軍衆迎來、今夜入縣城、山田越前守有信亦率多勢來、先諸軍歸國、故今又來于此也、同十九日、入高城也、同廿日、發於高城到於都於郡、參會 義久公、公謝軍勞感驅馳之勳功者不少者也、

249

〔義久公譜中〕

一天正十五年三月十五日、高野山木食興山上人・一色駿河守昭秀來府內勸和陸、然而不合諸將之心、由是僉謂、不如早歸我國以保薩隅日三州中要害之地、

『全』

一殿下之弟羽柴美濃守秀長領廿萬騎精兵、天正十五年四月六日、鳴鑼鼓來構陣於日州高城・財部之交、屈指算其數則五十一所也、四月十七日、及合戰我兵不利、而島津三郎二郎忠憐戰死、且死者三百餘人也、其後高野山興山上人・安藝安國寺・一色駿河守來于我陣、強求和諧之議也、義久應求、同廿一日、稱伊集院右衛門大夫忠棟於所質出之、則興山上人・安國寺・一色駿河守攜忠棟、欣然入美濃守殿之本營矣、是以五月一日開陣、而義久歸于鹿兒島、義珍歸于飯野、故美濃守殿進野尻爲本營、

251 天正十五年三月、肥後御引陣之節、野上より二手ニ別れ日向口へ引退く人數ニ、

町田出羽守『久倍』

新納武藏守『忠元』

大閣先勢筑前表へ被討下由相聞、肥後表ニ被指向人數、
 『○』左衛門督年久
 右馬頭『征久』

薩『守』義虎

町田出羽守『久倍入道存松』

新納武藏守『忠元』

新納右衛門佐

伊集院肥前守『久春』

伊集院源介

寺山四郎左衛門尉『久兼』

町田左京亮

町田新左衛門尉

『△』梅北宮内左衛門尉

二階堂安房介

『○』猿渡越中守『十五年四月十七日根白坂ニ戰死』

『十五年三月十五日、及退於豊府陣、逢賊兵之難軍勞、

肝付彈正忠兼寛

十五年三月十六日、義弘公三重之城ニて御評定人數、

中務太輔家久

川上上野守『忠克入道意鈞』

『△』伊集院右衛門太夫『忠棟』

吉田美作守

鎌田出雲守『政近』

同年三月廿五日、阿蘇の内坂梨ニて合戰ノ時軍勞、

新納武藏守『忠元』

伊集院肥前守『久春』

相良老名
大童美作守

同子軍七

桂神祇正

大野治部太輔

樺山太郎二郎

肥前守
伊集院源左衛門

隈元在番

新納武藏守『忠元』

合子在番

新納右衛門尉

津守在番

伊集院肥前守『久春』

同年四月六日、京勢日州新納院高城ニ着陣、我兵防禦の

輩ニハ、

山城地頭
山田越前守「理安」

平田新四郎「増宗幼字ナラン」

本田弥六

三原下總守

野村狩野介

宅間與八左衛門

肥後宮内少輔

同狩野介

同年四月十七日、是常房か堅陣ニ切掛り致手柄輩ニハ、

御大將義久公・義弘公

北郷一雲「左衛門尉時久入道」

喜入攝津守季久

本田下野守「親貞」

同左馬介「藏宗左馬介トモ云シナラン、
左ナケレハ光宗ニハ當ラス、
亦ハ左近將監ノ誤カ」

上原長門守尙近

圖書頭久長

肝付彈正忠「兼寛」

稻留新介

喜入攝津守「季久」

上原彦五郎

本田治右衛門尉

三原右京亮

伊地知刑部少輔

八木越後守「正信」

奈良原安藝守「延初狩野介」

宮内勝兵衛尉

中務太輔家久

北郷讚岐守忠虎

伊集院右衛門太夫忠棟

平田美濃守「光宗カ」

伊集院下野守久治

鎌田出雲守政近

河田駿河守義朗

顯娃左馬助

比志島紀伊守國貞

鎌田刑部左衛門尉政廣「カ」

市來美作守

新納縫殿助久時

新納狩野介

京勢平佐の城ニ押寄候時、神祇与力之士防禦して抽戦功、

谷山紀伊守「紀伊介トモ」

宇都伊豆介

同弥七郎

春田主水正

高木帶刀長

天正十五年六月十日、持明君爲人質大閣御陣へ御差出

之節御供、

本田下野入道「親貞」

渡邊權介

持明君御上洛之御供衆、

伊地知駿河守「船戸代官兼役大關
少御帷子一ツ押領」

長谷場筑後守「御右筆役、全
純辰初織部介」

田尻仲左衛門「下司也」

原田伊豆守「御色丁役」

田尻才允「御中間ノ役」

吉田若狹守

新納越後守忠包「關州山田
地頭」

平田左近將監「藏宗」

同子刑部之丞

同子八兵衛

谷山次郎右衛門

阿久根權介

野村狩野介

伊地知丹波守「全」

川東善左衛門「走舞衆、全」

岡本主計允「下司」

山口早左衛門「打込之御供也」

長尾源五「全」

252 「義久公御譜中」

羽柴美濃守秀長爲大將、領數十萬騎、有到著于豊前州之聲、天正十五年三月十一日、義珍率薩摩軍衆、去野上陣健軍、當地近邊有稱湯之城之地、小寺官兵衛尉爲前鋒入彼城、與地輩俱運籌策侵陣所來、我軍對之相鬪、而斬首十有五、乘勝追散敵於四方、其翌十二日、揚勝吐氣、而去此地到府內、同十四日、敵船進來放火沖洲與萩原之兩村、而欲退去之際、我之騎步馳到其地對之挑戰、獲數多敵首矣、

天正十五年三月十五日、高野山木食興山上人・一色駿河守昭秀來府內勸和睦、然而不合諸將之心、由是僉謂、不如早歸我國以保薩隅日三州中要害之地、得人和待其時、因茲相議分歸陣於兩道、使島津左衛門督歲久・同姓右馬頭征久爲將、町田出羽守久倍・新納武藏守忠元・同姓右衛門佐・伊集院肥前守久春・同源介久洪・寺山四郎左衛門尉・町田右京亮・同姓新左衛門尉・梅北宮內左衛門尉國兼・二階堂阿波介秀行・猿渡越中守等從之、向肥後路退焉、又義珍・家久將向日向路退去、待三月十五日夜半、

義珍遂去府內之路過清田之郷、敵兵遮前路悉以欲屠殺、義珍整諸士卒、暫停前鋒追退對敵之際、伊勢彌九郎貞昌

于時十八歲、後任兵部少輔也、久富木攝津介上原長門守尚近弟也、各斬敵一人也、于時

佐多常陸守久政・伊集院美作守忠宣・白濱周防守・平田新左衛門尉・長谷場出雲守・松下越中守久孝・池山掃部兵衛尉・福永藤五郎・枝次左京亮・志和知外記遂戰死矣、同十六日入三重城、同十八日、超梓山入縣城也、此之時義久在都於郡矣、

253 「右馬頭征久譜中」

天正十五年丁亥春、大閣秀吉公率大軍征西、其聲先振豊後、於茲義珍主及家久胥議諸將、率軍歸國、守要害欲防戰、分歸路於兩道、義珍主・家久以下諸將者向日向路歸陳、歲久・征久・新納忠元・伊集院久春・大野久高等者歷肥後路班帥、凶徒蟻聚蜂起遮前途、征久共諸將壓軍、屢擊破焉全軍入國、

頃年征久讓清水於嫡子守右衛門尉彰久、移居上井、州、天正十五年二月十八日、岡之城主發師旅密襲來、陷小牧

254 「中務大輔家久譜中」

・鍋田兩城、而我兵戰死者多矣、就中小牧之守將甲斐右京亮自勢一百餘人、高知尾之士甲斐肥前・同姓彌太郎・坂本飛彈・福永四郎三郎等主從百廿餘人、家久之臣丸田郷兵衛・矢上彈正・宮之原淡路・瀨之尾二助同遂戰死也、而後忠助屢差价使、而招吾於三重、故發府內入於松尾、丁此之時、三城日州之地塩見・門河日知屋之士卒爲南郡之換守兵進來、使夫士卒留于此地而爲警衛、故四面五六里之間、追退凶徒而安靜也、三月十三日、義珍主發於野上入於府內、同十五日、高野山木食興山上人・一色宮內少輔來于府內、勸于和睦、而不合于諸將之心、而僉云、在于他國徒勞軍務、不如早歸鄉國保薩隅日三州要害之地而待天時、同十五日夜半、義珍主去府內欲赴日向之路、過清田之郷、敵兵遮其道路、雖然整於士卒前途悉以追退、同十六日、來入于松尾城、是以終夜爲評議、決定于歸陣、同十七日、發松尾城過千藥師堂、躡梅之嶮難到于高動野カキノ之際、與畑士卒遮前途、三重士卒逼後路、且運弓手從三方競至矣、三城・佐土原・穆佐之銳兵共對之得勝利、斬獲數百、殘黨悉以追退、其夜宿于永谷川內、同十八日、發於永谷川內之路頭、凶徒屢雖進來、指揮而追退四方、躡梓山之際、薩隅日之軍衆爲加勢進來矣、其夜已入縣城、同十九日、

義珍主發於縣城入於高城、家久三日後而歸佐土原也、

255 豊州過半屬案利候、爲此等之祝詞、太刀并一種現來、至

遠方御懇切之至悅入候、猶忠將可申候、恐々謹言、

三月十二日 義珍(義弘)(花押)

星野伯耆殿

「須後國生葉郡妙見岳城主トアリ、天正十五年四月三日、秋月種實降參シテ大隅ノ大隈御陣ニ罷出、城風二十六ヶ所差上られし内ノ一城ト 秋月家軍功日記ニアリ」

「天正十四年八月十七日、將軍義昭卿の御諱字賜ヒテ義珍ト申上、翌十五年八月、義弘ト改メ玉ヘレハ、十五年ノ三月ニハ疑ナカルベシ、且此十二日ハ、義珍公前日野上より陣ヲ移サレ、豊後ノ府内城ニ入ラセ玉フ日ニシ當レハ、府内城ニテ賜ヒタル御判物ナルモ亦疑ヒアラシ」

256 「佐多氏譜中」

久政

忠常 又太郎 常陸介

天文十五年丙午誕生、

太守義久公所賜之華翰開于後、

257 「正文當家有之」

仲陽之御慶重疊珍重々々、幸甚々々、仍至飯野年越之番、寒中之辛勞不及申候、此等之趣于今令無音候、就者近日

境目へ可爲出張候、軍衆之事被加催促、人數勢と与候之
様、可爲肝要候、巨細之日限等者、從老者中可申候、恐
く謹言、

〔年間ナシ〕

貳月二日

義久(花押)

佐多又太郎殿

258 久政從軍 太守公、屢抽勳功、

天正十五年丁亥三月十四日、久政守衛豊州瀧田城、時敵
兵大逼、久政奮戰死、年四十二、法名春岩道劫上座、

259 舊多以來對大友家、催干戈之處、至諸境目別而被遂御辛

勞之段、尤令祝着候、弥可被抽忠懃事肝要候、恐く謹言、

〔天正十五款〕

參月十七日

義久(花押)

梶山安藝守殿

260 伊集院下野守殿

義久

累年軍忠之儀神妙之處、殊更去冬於豊州歲滿表一戰之刻、
別而粉骨之段、謹令感早、倍不易之齎憤可爲專愉者也、
仍狀如件、

天正拾五年三月十七日

〔御案文ニハ廿日トアリ〕

義久(花押)

伊集院下野守殿

〔此御案文、廿二番箱五卷中ニアリ〕

〔義久公御譜中ニ載セラル、案文有之トアリ〕

〔伊集院久治之譜中ニハ十七日トアリ〕

261 『長谷場越前日記』

一同十七日ニハ梅越さして開せ玉ふ、彼中道の村々を放
火して指向へハ、如何程も切捨らる、是より一里行過
て、千薬師とて奇妙至極をわします、諸病疾除の誓願
ニ而、往來人之三禮す、其通道の上野ニハ、敵四千程
懸け來り道筋を取切るニ、御方兵もの落合て、軍勞を
そ被致ける、是を急度御覽して、義弘様御舍弟の家久
様御馬を御打入させ給ひつゝ、敵百余り討取せ相引ニ
被開せ、此日モ既に山の端を入けるに、亦敵三千程ニ
て梅越を懸切りて防ぎ戰ふ処ニ、御方の軍兵指合して、
鉄炮打せ追つ散してぞ通りける、其夜も更ケ亥子の刻
ニぞ移りける、夜白の遠路を草臥て、諸軍兵一同ニ永
谷河内に被陳取、今夜も無程明行けハ、

『長谷場越前日記』

一同十八日の事成るニ、敵猛勢懸け来る、さつま衆是を見るよりも返合て防戦し、大寺大煩助・阿多筑後守一足不去討死ス、此事御覽して中務太輔家久御馬を懸け入れさせ給ひて、兩人の尸をのけさせられ、其俣ニ尻拂を被成宛、次第ニ敵合ひ被調、梓山を打越して屋渡の河内を通させられ、於爰者薩摩大隅日州衆拾萬騎の勢ニて御迎ニ被參上を始め奉り、其中下ニ至る迄大慶者無限り、縣之城ニ御光臨被成つ、其夜ハ御休息をわします刻ニ、山田越前守爲御迎參上し、三月十九日御大將軍武庫様を高城江奉申請、地頭衆中ニ至迄被蒙御情、忝きの余りニハ、縦京勢致着陳共各籠城仕り、露の命を捨ん事何ニハ以て惜るへきとて、忠ニ勇る計也、扱こそ御先聖日新様之御詠歌ニ、酒も水流も酒と成るぞかし只なさけあれ君がことの葉と被遊し御事共、誠ニ奇妙なる御說法と尊ミ申心也、同廿日は高城を御打出候て、同國都於郡御光着有るより、義久様へ御參會を被遂て、御祝言者弥増しなり、諸軍兵を召出て長陳中ニ軍勞を仕る御禮被仰聞せ、其俣都於郡ニ各在陳を被致、打續き日數經て、天正十五年卯月六日ニ

京勢ハ懸着て云々、

『勝部兵右衛門聞書』

一ノ下ノ庄ハ不參候程ニ、【天正】明十五年二月上旬着陳し玉へハ、降參の由訴へける間、陳を開れけれども未下城ハなかり計李、豊後の諸城御旗下に悉く參けれども、岡の志賀・津賀牟禮・湯ノ庄・杵築の城此等未參といへ共、先差放し置て、義久ハ野上城へ御入御越年あれハ、家久ハ府内へ御座す、義廣ハ朽網に打入御越年被成ける、去程ニ千石權兵衛尉敗北して、軍勢多く滅ひたるよし都へ告上せけれハ、関白天下聞食、御氣色不好、彼嶋津ハ國分をもそむき筑前ニ打出、岩屋の城なども攻果し、又豊後と一和のよし被仰下けるをも違背して、豊後國ニ乱入、剩へ千石か勢とも打果せし事実ニ呉恨の至也、殊如此成共ハ四國・中國迄も攻隨へ、終ニハ都の怨と可成者なれハ、急速ニ追伐を加へて遂園カタノ自白下向ふへしとて、天正十五年丁亥三月初ニ御馬出下らせ給ひける、日向口の大將御弟の大和納言美濃守秀信卿大將ニて、四國・中國の勢十二万騎引卒し、豊後をさして攻下り給ふ、東海道・北陸道・京都畿内の諸

勢ハ御旗元ニしたかひ、坂東ニハ長門國赤間関ニ着せ給ふ由相聞得けれハ、薩厂の大將宗徒の人と評儀せられける者、無案内の國ニ美濃守殿の大軍引受師せん事も成かたからん、其上豊後國中の城と降參しける者共、于今心變せん事有まし、所詮唯我國に引入勢を催し師せんニハしかしとて、同三月十一日、太守義久野上を御立、其夜ハ獄宮ニ着玉と、明る日ハ府内の如く退給へハ、豊後ハ大友家年來の國なれハ、國中皆大友方と成、心變せぬ者ぞなし、權現獄の迫も湯の庄とくり合、早心變りして薩厂勢ニ矢を射なしたりけり、

『公』

三月

一同十二日ニ府内ニ着せ給ふなり、其時都より木食上人
 ・一色兵部少輔無事の嘯なし給んとて下向ある、義久即參會し玉ひけるに色と御吳見のミ有けれとも、御承引なきなれハ彼兩人ニも不及力、即立せ玉ふ也、然ハ急き御引陳有へし、國の留主に敵入替る事あらハ、後悔するとも叶まし、其上此國の者共皆心替りと見へけれハ、早と御引有へしとて、同十五日の夜半計ニ打立引せ給ふ程ニ、在く所々に入番して、方々に馳散たる

者共を漸くに相集退れける、遮る敵ニ隔られ佐多常陸守・伊集院美作守・平田新左衛門尉・白濱周防守など打死せられけり、路次傳大勢往々に相集て前々を取ふさく、されとも薩厂勢返合く切崩追散給ふ程ニ、大將已下無難日向へ引入せ給ふ也、又肥後口も義廣退給へハ、各々おもひく々に退れける、白根の城ニハ左衛門尉歳久御座か、肥後の如く退き玉ひけるを、路傳そこくをとり切けれども打破りてそ通り玉ひける、朽網の城ニハ伯耆顯隆・城久基せられけるか、菟角としてあひしらひ、此等も難なく退れける、扱又野上より二手に別れ、町田出羽守・新納武藏守杯ハ日向口を通、秋月へ取合ん其爲ニ、上筑後へ打越んとて已ニ打立れける折節ニ、薩厂勢日向のこく悉く退せ給ふ由聞えけれハ、筑後表を通ん事何かハなるへきとて肥後のこく退れける程ニ、切頭城ニ伊集院肥前守、相良か老名犬童美作守・同子ノ軍七求厂的勢を相具して籠居れけるを、迎取んとて中途まで打寄れける処ニ、案のこく切頭の者共早心替して、薩厂的者共一人も遁しと着來ル、返合て合戦し追退け、同廿日ニ各北里まで退れける、同廿五日に北里をも同心にて肥後のこく退

ける処ニ、阿蘇の内坂無ノ城ニ桂神祇正・大野治部太輔・柗山太郎二郎、右之各々籠り居られる処ニ、岡の志賀其邊の者共を駆催し追來て陳を着取籠たりしニ、武藏守・肥前守・同息の源左衛門杯大將として返合て、同廿六日其陳をも切崩し、敵七百人打とり、肥後の國へそ出られける、隈本ニハ新納武藏守、合子ニハ新納右衛門尉、津守ニハ伊集院肥前守在番せられる、八代ニ右馬頭御座す、去程ニ秀信公大軍を卒て豊後國へ打下り玉ふ処ニ、薩川の勢疾如日向引入たる由聞給ひ、又日向を差てそ攻下らる、追付高城・財部ニ近寄、各々陳をそ着られたり、先陳ニ因幡國の住人宮部法印是常坊・小寺歡兵衛尉諸軍皆入番勤て堅らる、從夫打續き毛利安藝守輝元・小早川左衛門尉・吉川十郎・浮田八郎秀家の陳、其外益田右衛門尉・木下右衛門大夫・羽柴伊賀守・羽柴美作・毛利右近太夫・生駒雅樂助・小川土佐・東堂七郎左衛門・蓮香右衛門尉・加藤左馬允・大田源六・早川主馬允・稻葉兵庫・奥山雅樂・山崎左馬允・赤松上總守・市橋下總守・谷出羽守・出方勤兵衛・小野木縫殿助・福原右馬允・山口右京進・別所豊後・中山修理亮・木下肥後・嶺田伯耆・有馬法

265

印・石川備後・寺田下野・同備中・中江民部・堀尾帶刀長・山内對馬・松下右兵衛尉・有馬玄蕃・稻野下野守・中村式部・淺野彈正・齋藤左兵衛・宮部兵部・木下備中・龜井豊前・増尾隱岐・細川与一郎・池田備中・竹中源介・長谷川右兵衛尉・山崎右京亮・藤田權介・大友義棟豊後の勢を相催て、三十余ヶ所の陳を取續け來らんをそまたせ給ふ、然ハ去年の十月ノ豊後の陳旅ニ疲れ、引足ニハ物具矢藥等をも打捨ける程ニ、是等の物をも取調んとしける其ひまニ、時刻こそ移りける、

『長谷場越前日記』

一天正十五年卯月六日ニ京勢ハ懸着て、日州新納の高城ニ着陳す、根白原を是正房と黒田官兵衛尉の先陳にて、相續くの諸陳也、彼の高城の地頭者山田越前守を始として、三百人の衆中也、走籠ル兵モノ者喜入攝津守・平田新四郎・上原彦五郎・本田彌六・同名治右衛門尉・三原下總守・同右京亮・野村狩野介・伊地知刑部少輔・宅萬與八左衛門尉・八木越後守・肥後宮内少輔・奈良原安藝守・同狩野介・宮内勝兵衛尉、此外も宗徒

の人々の懸け續きける間、日夜の軍勞無限り、かゝりける處ニ、黒田官兵衛尉ハ伊東衆ヲ同陣して、日向の本衆ヲ繰付て、國中者危クぞ成ニケル、然者同四月十七日、御太將義久様、押並て義弘様・家久并忠親・北郷一雲・其子ニ讚岐守・喜入攝津守・伊集院右衛門大夫・本田下野守・平田美濃守・同左馬助・伊集院下野守・上原長門守・鎌田出雲守・圖書頭・河田駿河守・肝付彈正忠・穎娃左馬助・稻留新介・比志嶋紀伊守・鎌田刑部左衛門尉・比志島式部少輔・市來美作守・吉田若狹守・新納縫殿助・同名越後守、此外之諸軍兵拾萬余騎の勢ニて京陳ニ被懸、是正房が堅めたる先陣ニ切て懸て各致手柄宛、垣涯ニ攻上り土屏をかき散取り懸て引破る處、をくの陳より京勢の大登りを差立て、目ニ余りたる猛勢を如雲霞駈續く、御方の軍兵請留て一足不去ニ合戦して、一陳ニすゝんだる左衛門督之嫡男ニ忠親者御戦死を被致、惜かる御年玉繫、頃者弥生「卯月歟」拾七日ニ而、朝の露と消給ふ、是を見る兵ものも籠手のくさをぬらしけり、かゝりける處ニ京勢數萬騎つゝき合ひ、鉄炮數を取立て矢ふすま作つて打程ニ、敵御方手負死人之伏たるは算を亂せる如く也、彼を見て

馬武者が懸出て打取んとせしか共、圖書頭久長・北郷讃州、兩太將ニ同心して被落合せ兵物は、平田美濃守・同左近將監・新納越後守・同狩野介太刀を取て相ひ懸り仕り、矢師きびし敷させられて、敵も手負ニ成る程ニ、相引ニひく塩の跡さびしくぞ成ニける、去る間高城衆者籠鳥の雲を戀るかごとく也、各の城を持堅め忠貞を被致、諸軍兵之志物ニよくとどふれば、とうしゆこうをなすばかり、相互ニ山くゞりを通用して物音を聞より外之事そなき、

266

『全』

一卯月廿五日ニハ、関白様川内泰平寺へ御光降を被成宛、其假ニ御在陳ましますば、西國方の諸太將以下ニ至ル迄、不殘供奉を被致、既ニ日數も重りて、陳屋美く鋪打なへて大驗・小指ものさて打物ニ至ル迄、面々ニ備置ける仕合者、天神地祇も納受かと覺る計也、太平寺の大門口の大河ニハ大船小船引繫き舟橋を渡し宛、人馬ハ往來の是彼ハ日夜無隙見聞也、懸りける刻ニ、御方の地ニハ平佐と云へる住城ニ、地頭とて被召置桂神祇の伯と名乗て、義利深き侍が軍兵調へ居たりけり、

其つなきニ入来院より小人衆懸け續く、彼兵物を相具して、関白様之大軍ニをめずをくせず對陳す、一揆當千是そがし、京方の御幕下ニ於致參詣者面目をとらるへし、速くとありしかバ、神祇の伯ハ承り忝き上意也、乍恐も言上す、賢人二君と聞よりハ、爲被召置在城ニ而一命を輕ル者、末世の名徳有其隱間敷と思ひ切ニシ言の葉の、露も不泊返答す、其故ハ、儀欲ニ勝つときんハ國ニ榮へ、欲儀ニ勝るときんハ國亡と云も有り、亦タ雖積千金一日之名徳に不如と有り、彼是物を案するニ忠より外事はなし、乍憚幾度同返ニ申也、扱は無是非次第とて可有御成敗由堅く被仰出、此趣を承り、近國之事ニ付、肥州宇都之住人ニ小西と云へる侍と、四國之淡路衆脇坂中書と、九木者伊勢衆を先き懸ニ被遣、其外後の猛勢ハ幾千共いさ不知如山打出る、城内衆も今を限りと心得て、四方に下知をなしふせき戦ふ處ニ、表ニ進む兵物ハ早切り岸ニ攻め上る、城戸の口ニも切り入れハ、請留めく合戦し、敵味方手負死人の數積り及大事處ヲ、桂神祇伯ハ是を見て、堀涯を掛廻り敵余多討せ宛、殘る武者を切拂ひ岸根に落ると見得しかバ、勝て甲の緒をトメて、神祇伯を始として谷

267

『長谷場越前日記』

山次郎七右衛門尉・春田主水正・阿久根權介同心ニて、板城戸口ニ指合て手を碎き太刀討す、去程ニ伊勢の國の住人ニ九木が手と名乗てハ、藤崎小路を攻破る、頃ハ天正十五年丁亥四月廿八日の朝、軍より本口を堅めたる高木帶刀長懸出て太刀始め仕る、相續く兵物ニ谷山紀伊守と名乗て折目合戦仕り、二方痛手を蒙りて相引ニ退ぬ、京衆田舎衆是を見て、感んせぬ人ぞなかりける云々、

一木食上人と一色宮内太輔ハ打烈て、上使として豊州江御在陳之砌ニ下向也、御意趣ハ和睦の御沙汰とて、未一途濟、京勢多く指下る由聞からに、先と國ニ引籠り御評定有へしとて御開陳を被致、其首尾ヲ遂んとて、同卯月七日ニハ追付日州之内細島の津ニ下着して、同八日美々の湊ニ着船とせしか共、順風悪く吹出て海路心ニ不任也、大河ハ洪水増り宛、未渡りハ事成らず、日を流しける間、同十日京陳迄指越て、同十二日都於郡へ到來す、木食上人之御宿を黒貫寺へと被定、一色宮内太輔の御宿を光照寺へ被仰付、以之外之御馳走也、

『勝部兵右衛門聞書』

去程ニ和平の一儀類ニ取成被申入、義久様聞召、於可爲國家安全者、上使次第と被仰出、然者和睦相濟て、同四月廿一日ニ、伊集院右衛門太夫爲質人京都江被差遣、鹿兒島衆ニ比良野六郎左衛門尉同心ニ而、敵陣中を被見せて、翌日ハ都於郡之御本陳江參上す、此時ニ上使式人御喜申許もなかりけり、

一京勢ハ日數も次第に延、引陳を堅構へ、輒く退治しかたくこそ見えにけり、就中先陳の大將の其中に、是常坊根白原に陳を取、諸陳方も能兵を勝て籠置、普請かひ楯丈夫にし、專に持たる剛陳に、隅薩の人々彼先陳をさへ切崩したらんニハ、後陳ハ自臆すへしとて、大手搦手一動に時を挙げ、混攻に責へしと約したれども、薩廠の運や薄かりけん、大手の吐氣ハ搦手に不聞、搦手の吐氣ハ大手に不聞、無評儀ニして各村々にそか、りける、先陳ハ堀ヲ越屏を引破り、死生を不知戰へとも、後陳ハ未續攻惡んでそ見へにける、此に歳久の續子嶋津三郎二郎忠隣廿歳ニたらん若大將なるか、慈の勢臆したる氣をミテ、中務太輔合て仰けるハ、我等ハ

勿論若輩たれハ、未嘗の名を不得、家久ハ聞る覺にて御座なれハ、今日の師におひて不劣と存候と云あへす、「本マ、」かけられける、慈の軍勢是を見て、一音に時をあげ、曳や聲にて攻入、屏二重攻破り陳内ニ切て入、北郷一雲の手者共屏二三十間引破り陳中ニ切て入、三百計無下に打死したりけり、されども事共せず攻入く戦へハ、陳も危く見ゆる処に、忠隣享年十九、法名桂山昌久大禪定門鉄炮あたらせ給へハ、大將手を負給ふそとて慈乱足に成にける、敵は數千丁の鉄炮を揃、雨霰の降ことく此を專と打けれハ、慈ハ皆堀底に射伏られ、過半手負ニ成、若干打死するもの有れと、薩廠の勢ハ無力野白「本マ、」に成て引ニける、伊集院忠棟・中務太輔に談合仕り、義久・義弘に被申けるハ、今ハはや弓折矢尽ル道理也、薩廠の運つき叶へき様なし、近年肥後・肥前・筑後・筑前の陳旅、去年の十月方豊後の出陳に三ヶ國の者共皆疲れ、物具兵糧も難續寛候、日本國勢を引受籠城、或ハ一戦を成すといふとも、終ニハ其功なからんか、死ヲ一方ニし一戦を好てもし仕損しなは、御家の極りと存候、唯乞降參和平とも成しなハ、假ひ三ヶ國を被公領と云とも、若ハ一ヶ國殘る事もや候へき、左もあらハ御家ハ殘る

へきかと存候と申れけれハ、義久尤然り、不及所を強てするハ愚の至り也、不應理ときハ義を以す、不及勇時ハ和を以すといへり云々、

『全』

一此度の大難をのかれなハ、一度又本意をとけん事もこそあらん、和平の調方尤也、早談合せらるへきと被仰出けれハ、忠棟承て可然方ニ申合せ降參のよし申入られけれハ、京勢大軍打下りし処ニ、比ハ卯月中旬の事なれハ、晴間もなく雨ハ頻に降り、往々の大河も水増り、人の通ひも成かたし、兵糧運送も調へかたけれハ、折角ニ及ける処ニ、降參のよし聞、諸大名大ニ喜て秀信卿に斯と申入、即和平と成ニける、中務大輔家久・右衛門太夫忠棟人質出し進せて、美濃守殿の入御見參和平と成れハ、佐土原・都於郡にも京勢乱入、如此成行ハ義久も内輪の体無覚束とて、如薩ノ御歸陳ある、義弘も求ノ口の雑説色々に相聞えけれハ、先如眞幸そ歸セ給ふ、扱又肥後表ハ関白殿下の御手ニ属スル大名ニハ、越後宰相景勝・加賀中將利家・同息ノ備利秀・堀休太郎・丹羽五郎左衛門・長谷川藤五郎・池田

三左衛門・青木紀伊守・木下美作守・稻葉右京亮・伊藤長門守・金森出雲守・加藤作十郎・織田尾張守信家・織田上野守・津田長門守・佐野修理太夫・原隠岐守・田中兵部少輔・遠藤左衛門尉・水野宗兵衛尉・千石越前・日根ノ織部・織田三十郎・実田安房守・実田平三郎・木下下總・吉田兵部少・氏家内膳正・氏家源六・福嶋左衛門太夫・同掃部介・岡本下野守・稻葉藏人・九鬼大隅守・富田左近將監・京極大津ノ宰相・村上出雲守・木下宮内少・木村伊勢守・戸沢九郎・小野寺孫十郎・津沢右京亮・池田備中・戸田豊後・戸田下野・新庄駿河守・新庄越前・漕出大和・同播磨・京極若狭守・木村常陸守・槽谷内膳正・池田河内・堀内安房・桑山修理亮・徳永法印・徳善院法印(命)八・長束大藏少・大谷刑部少・石田治部少・同弟李介・本田因幡守・多賀豊前・池田孫三郎・大野修理亮・横濱民部少・石川肥後守・寺沢志ノ・伊藤丹後・堀田圖書助・小西孫九郎・青木民部少、其勢拾五万騎関戸を打渡り、豊前國ニ出張、先手合高橋か城ヲ攻玉へハ、高橋居城を下り即降參申たり、其假筑前國ニ打越、秋月か城をも攻給へハ、是等も即御手ニ属シたり、又筑後の國へ打越、

『勝部兵右衛門聞書』

高良山へ御陳ヲ堅給へハ、肥前の龍造寺も早参りたり、豊前・筑前・筑後・肥後の諸大名皆と随付奉ん者ハなし、如斯なれハ先陳ハ早肥後の山家ニ着ニける、されハ肥後國合子の坂なども然々なし、殊ニかき瀬の渡り難所なれハ、薩厂よりの下り上り難成とて、和井府・合子・隈部を引去り隈本へ打籠り、城の久基と一身ニして一防ふせくへしと思ひける処に、城殿も何とやらん氣色見へける間、八代さして引ニける、

一 去程ニ、京勢四月十三日隈本へ押寄れハ、城の久基下城して降参す、伯耆顯隆も宇都を下城して降参申されけれハ、肥後國中ニ心替せぬ者そなし、隈庄に宮原筑前守在番しけるか、退とする処に以下人心替して、宮原を始薩厂的番衆を打果しぬ、され共切通り遁る、者多あり、津守・木山・美船・田代・幸佐皆火ヲあけて退ニける、宮福・高塚をも焼拂ひせきのことく退にける、松浦筑前介とて薩厂普代の者なるか、蒙勘氣事ありて他國と其比都へ上り、堀休太郎殿ニかたらハれ居けるか、秀吉公大隅薩厂的案内よく知たる者をと尋給

ひし折節、堀殿斯と申給へハ、即被召出、薩厂入ニ先立てそ下りける、肥後國ニ着しかハ、方々才覚廻し給ひける程に、早堅志田・溪山も敵となり、同十七日ニ新納武藏守・伊集院肥前守大將として谷山へ押寄攻崩し、其邊蹴拂ひて又関のことくそ引れける、はや高木の有馬も心替、兵船を揃へ八代の濱に押浮、ひなこ・二見なども船押付焼拂ひけり、幸田にハ義虎御座ヲ虚見して退けまいらせ、其假敵と成、柘野を取切ける、関白殿下十八日野津・賀美・宮原に御陳を成せ給へは、諸軍皆と御陳を守護し、おもひくくに陳取、備旌旗をなひかし、物の具の光輝キ山野をてらし、諸軍の動搖焱しくそ見えニけり、海上を見渡せハ、伊勢國住人九鬼大隅守・若狭國住人脇坂中務少・攝津國住人小西弥九郎、此等の人々舟大將として數千の兵船西海に押浮へ、或船陳を張り波間も更ニ見えさりけり、薩厂的諸勢八代に相集りけるか、右馬頭を初諸軍衆十八夜の月の出を相待て、八代を立て求厂的如くそ退れける、あくる十九日ニハ京勢悉く八代に打入ける、薩厂勢ハあせて越して、廿日ニハ求厂の一吉ニそ着ニける、一吉を廿一日の早朝ニ打立、大口ニそ着ニける、其比相良

宮内少ハ薩方ニして日向へ立れけるか、世間の体を候と神屋邊ニ扣られしか、心替して引返し、廿一日の暮ほとに一吉ニそ着れける程に、半日の違にて八代・求廣の鰐の口をのかれけるとぞ申ける、去程に京勢八代より佐敷・湯浦・津那木・水俣の諸軍行路を去りへず、殿下ハ佐敷より船傳して、出水へ打出御陳被成けれハ、嶋津義虎もはや御手ニ属せらる、依て野田・高尾野・阿久根・多木・水引も皆下城したりけり、東郷ハ澁谷の重尙知行なるか、中書ニ男源七郎を養子にし、重尙ハ兩年前ニ死去なれ共、源七郎幼少なれハ佐土原ニ御座す、老名共東郷の城ニ取籠といへとも、力不及して下城したりけり、殿下ハ出水より御船ニ召れ川内へ打入、泰平寺ニ御陳を堅給ふ、吉例成そ太平寺也、との給りける、川内河ニハ船橋を渡し、平地のごとく行通、如此なれハ高江・隈の城も人質出し降參す、去れ共平佐之城未落、地頭桂神祇少輔忠成此邊「忠防ナルヘシ」の諸城皆下城すといへとも、鹿兒島の様をも未承合、或ハ一戦を不遂して下城せん事口惜次第也とて、傳達を勇て城を堅固ニ持ける処ニ京勢押寄攻之、与力の待谷山紀伊介・同子刑部丞・宇都伊豆介・同子ノ八兵衛・同弥七

郎、其外勇力の者共一動ニ切て出、寄手僅の勢ニつきたてられ、漕出播方守を初として、究竟の人と打死し打負てこそ引ニける、然處ニ日向表も和平の嘍と成、和談の由聞えけれハ、力不及平佐も下城と成ニけり、諸方ニ差當られし人とも我宿所とに立歸る、宗徒の人とハたとひ腹を切共、我居城にて切んとて其城とに引籠らる、太守義久鹿兒島ニ歸り見給へハ可然人もなし、今の体にてハ如何とおもひ玉けるか、即川内泰平寺ニ參陳せんニハしかしとて、御法躰と成給ふ、伊集院忠棟も日向より歸宅し、是等も法体して御供申、五月八日に殿下の御對面在て御意を給、數々の御進物給り、大隅薩方如本主領可仕由被仰下、義廣も追付參陳し給へハ、幸久・忠長其外郡司・所司・地頭職の人とも太守降參被成上ハとて、皆々隨ひ參らせけり、其中ニも左衛門尉歳久未降參御受を不申、少楯強り給へとも、太守參陳し給ふ上不可然と色と諫給ニより、不及力下城し給ふ也、入來院重豊も同く下城せられける、如此なれハ京勢入來・邪答院へ乱入、自夫牛屎院大口城をも下城させ、直ニ如肥後押通らんとせし処ニ、新納忠元大川を隔て出向ひ、大口中ニ不入押入者あらハ防戦

んとす、京勢ハ如本立戻如川内引ニける、忠元太守の降參成上ハとて參陳し、殿下逢御見參御感ニ入、御引手物など給りける、天下の宗匠紹巴、秀吉公九州御下向路續を被作に、薩國牛屎院に新納ノ忠元と云鬼武者あり、吾領内に有乱入者ハ大口に食とすとせられし是也、

271 『長谷場越前自記』

一五月上旬ニ 御太將義久様を奉始メ、義弘様・北郷一雲、此外之諸軍兵各御供を被致て、國々一開陳也、角て五月六日ニハ 関白様の御陳所の太平寺ニ爲可有御參詣、御袋様の御寺ニてと被思召、於雪窓院御剃髮を被成宛、有りつる御官途を引替て、 竜伯様とぞ奉申ける、此事世上に風聞して、心の有もあらざるも泪に啣ふ計也、其より直ニ御出馬有りて、 太閤様江御參會を被遂ける、御仕合ハ一段の御感ニて、其日に御暇給りて鹿兒島ニ御歸院をわしまセバ、國土の萬民安堵の思に任す也云々、

272 『日向記』

一筑後・筑前・肥前モ秀吉公ノ御手ニ属セシカハ、肥後ノ山鹿へ御動坐、新納武藏守カ楯籠高迫ノ要害ヲ打圍可攻于旨ニテ、「本マ」五万余騎押寄玉ヒシカハ、四月七日ニ明退ケリ、同十一日南ノ関城ニ御本陣ヲ居ラレ、十三日ニ堀尾茂助ヲ番兵ニ入置、夫ヨリ小代伊勢守居城筒ヶ嶽モ渡ツルニ依テ、川尻肥前守ヲ入置ケル、薩國衆ハ合子ニ有ケルカ、是モ城ナト宜シカラス、殊ニカキセノ渡難所ナレハ、雨ノ内薩國ヨリノ往來難成トテ、飽府・合子ヲ引取限本へ打入所ニ、城殿一身ニテ調シト企、心替シテ薩國衆ヲ不入、増テ宇土モ如其、彼兩人心替ト聞ヘケレハ、肥後中ノ万民薩國ヲ背、夫ヨリ「ツモリ」ハモリ・木山・三船ニ火ヲ懸テ引退、殊ニ隈庄ニハ佐敷ノ宮ノ原竈有シカ、三船ヨリ引玉ヘト注進有、引退所ニ、本衆心替シテ彼ノ宮ノ原ヲ打果ス、其俣八代ノ小川ニ着折節、豊福モ火ヲ懸テカフ田ノ如ク引退、町田八代番ヲナス所ニ、松浦筑前ト申者薩國家ノ者ナルカ、流牢して都へ上リ、関白秀吉公ヲ奉頼、先々八代表へ下リ、色々カラクリケル程ニ谷山モ敵トナル、同十七日、新納武藏守・伊集院肥前守谷山へ押寄追拂テ関ノ如退ク所ニ、高來・有馬モ兵船ヲ揃へ八代ノ沖ニ押浮、

ヒナコニ船ヲ付岳ニ上リ燒拂、同十八日セウ田地頭ハ薩_一番衆ヲ引セ、其俣跡ヨリ敵ト成リ、井ノセトヲ取切ケリ、関・八代ノ本衆モ心替ト見ヘケレハ、十八日酉ノ刻計ニ関ヲハツシ、八代ノ右馬頭幸久町ト一ツニ成、十八夜ノ月出ルヨリ求_一ノ如ク引、十九日アセカヘ着、廿日ニハ人吉ニ着、其刻相良方ハ薩_一方ニテ日向口高城ニ立ケルカ、其俣引返シ、廿一日ノ暮程ニ人吉ニ着_{「本マ、」}セカ、同日薩_一衆モ人吉ヲ打立、其暮方大口ヘ着ニケリ、僅カ半日ノ違ニテ八代・求_一急難ヲ遁レ、嶋津ノ運命誠危夏共也、去程ニ隈本ノ城ニハ城ノ十郎太郎居城也、先陣トシテ遠卷有、一ムシ蒸ケレハ、申脫降人ト成シカハ、同十六日秀吉公移ラセ玉フ、同十九日宇土城モ降人トナル故、加藤虎ノ助ヲ被入置、同廿日隈ノ庄ノ城モ明渡ニ依テ、岡本太郎左衛門入番アリ、同廿一日高塚・関ノ城・八城モ退散ス、即秀吉公八代ニ御陣ヲ居ラレ、シハラク御對陣ナリ、

『全』

一薩州勢ハ日向高城ノ要害ヲ手堅取構ヘ、山田新助有信ヲ地頭トシテ籠置也、然ニ日州口大將羽柴美濃守_{大和中納}

言ト、秀長廿萬騎ヲ卒シ、天正十五年丁亥四月六日、日州ニ進發ス、新納院高城ヲ打囲ミ玉フ、角テ高城ト財部トノ中間ニ五十一ヶ所ノ對陣ヲ付ラル、人數ニ黒田官兵衛尉・蜂須賀阿波守・尾藤甚右衛門尉・宮部善祥坊・毛利輝元・小早川左衛門督隆景・桑山修理亮・福知三河守・木下平太夫・垣屋隱岐守ヲ始トシテ此外不違記、各大陣ヲ取坐玉フ、然ニ嶋津義久彼陣後攻セントテ馳來、大隅日向勢ヲ舍弟兵庫頭義弘并一族家臣二萬人ヲ卒シ、同四月十七日根白坂上伯耆ノ南條小鴨カ陣ヘ夜討ヲソシタリケル、宮部法印中務卿善祥坊五千、小寺官兵衛尉・木下平太夫・龜井新十郎・垣屋隱岐守・福原右馬助彼是都合一萬五千起立相戰、形勢物ニ越テ夥シ、守將大和中納言秀長五十町余ヲ隔テ在ケルカ、注進有ツルト等ク參陣有、助成玉フテ挑戰、嶋津三郎二郎忠隣以下三百余人打捕也、此勢ニヘキエキシテ薩_一勢退散ス、此所興山上人・安藝ノ安國寺・一色駿河守來テ和談ノ儀ヲ催ス、義久如何思ケルカ、伊集院右衛門太夫忠棟ヲ質ト成シテ指出ス、三輩悅テ秀長公ニ本陣ニ入テ、和睦既ニ成ヌ、

一秀吉公ハ八代ヨリ佐敷へ御動坐有テ、夫ヨリ船ニ召出水へ御着陣、頓テ薩广守へ立懸ラレ下城スルニ依テ、五月四日御乗船、薩州仙臺川ノ流添大平寺ト云大伽藍有、是ニ御陣ヲ居玉フ、高城・水引モ出水サへ下城ナレハ、同降參ス、此支日州表へ相聞、京勢弥競起テ、早佐土原・都於郡へ乱入ス、兵庫頭義弘ハ求广口ノ雜説頻ナレハ、眞幸ノ爲ニ歸也、義久モ鹿兒嶋へ入陣也、亦京泊トテ宜キ湊有、兵糧船數千艘着岸セシカハ、諸勢へ扶持方下行玉フ、運送支繁有シカハ、京泊町人俄ニ德ツキ賑ケリ、仙臺川ニハ九鬼大隅守・脇坂中務少輔・加藤左馬助此衆奉行トシテ船橋ヲ掛サセ、往還自由最安リケリ、夫ヨリ先陣十萬余騎嶋津カ館近所陣取備ヲ設テ、將軍ノ御下知ヲ待、伊集院右衛門太夫忠棟ハ大和中納言殿走入テ、義久支被助一命候様ニ、偏ニ御憐愍奉頼トソ歎申ケル、秀長能ニ計見トテ、福智三河守ヲ彼伊集院ニ相添、木下伴介ヲ以秀吉公へ歎玉フ、伴介伊集院ニ對シ条數ヲ聞侍ニ、義久落髮染衣身ト成テ御礼可申上条、先非御宥免有ハ、向後可抽忠勤由、誠實顯然タル旨申ニ依、則其趣秀吉公ニ窺ケル、嶋津

支數十年公儀ヲ蔑如シ、自由ノ奸謀甚故不輕、此次ヲ幸ニ根ヲ絕棄ヲ枯シ雖可被仰付、頼朝卿以來連綿トシテ久敷嶋津ヲ亡ンモ如何トテ、安堵セサセ玉ンヤウ宣フ、サアラハ前野但馬守・淺野彈正少弼・木村常陸介取次可申上ト也、彼三人ニ伊集院對面シ様子承言上ス、免許可有旨ニテ、此由秀長公へ三人ヨリ注進ス、翌朝則伊集院ニ御對面可有旨^{「本マ」}テキ御礼申上ル也、角テ御暇申立歸リ、可被附安堵トノ趣義久へ申達ス、修理太夫義久開喜悅眉頭ヲ卸染衣ヲ着シ侍テ、五月七日ニ鹿兒嶋ヲ立、同八日大平寺ノ本營ニ候ヌ、供ノ侍六七人皆黒染ノサマ也、小姓一人ニテ佐々陸奥守・堀左衛門佐先導ニテ御礼申上シ所ニ、却テ御懇ノ仰有、御腰帶ラレシ御太刀大小ヲ玉フ、義久舍弟兵庫頭義弘・左衛門太夫歳久・嶋津中務太輔家久、其外家老四人人質被召置返玉フ、小西攝津守・脇坂中務少輔・九鬼大隅守等旗下ノ兵ノ前鋒トシテ平佐ノ城ヲ攻、城主桂山城守策ヲ廻シ相守故、城中不屈勇氣余有シカトモ、日州既ニ和睦ノ上ハ、義久ノ命ヲ承テ下城ス、同五月九日薩广一國ハ義久ニ賜、同月廿五日大隅一國兵庫頭義弘ニ玉フ、日向ノ内諸懸一郡兵庫嫡子又一郎久保ニ玉フ、五月廿

日大平寺打立、大隅日向へ押ケル大軍野村兵部丞カ居城山崎ヲ同廿一日請取、翌日邪堂院表陣廻、同廿三日嶋津左衛門太夫歳久カ居城鶴田城ニ着陣、皆人質取來、日州表モ其如兩國五六日ノ内ニ平均シ玉フ、夫ヨリ御歸洛ノ御粧ヒトソ聞ケル、

『喜入忠慶表裏』

一父存生之内、從京都 大閣様差下被成候、其故者 龍伯様數年御弓箭之以御分骨、九州不殘御手ニ入候処、豊後之大友殿・日向之伊東殿兩人懇望ニより、以多勢御下故、九州内六ヶ國之衆者皆大閣へ相加、河内泰平寺迄御下候、其時分 龍伯様者日州表江 大閣之御舍弟美濃守殿へ御指合、高城表根白にて御一戰候処、無事之御談合ニ成候間、都於郡へ御逗留処ニ、大閣様川内へ御下事聞召、俄於御前御談合取く刻、御一家衆北郷一雲齋・伊集院下野入道抱節・鎌田出雲守・本田下野入道三清・我等父弓詫など人々、存分不殘一大事之御談合と申、北郷一雲者是非共我等在所庄内へ龍伯様御越候へ、一戰仕御家之御運を開可申由、遮而被申上たると聞候、弓詫・出雲守・三清などハ如薩广

『全』

日夜御歸宅可然と被申上たると申候、顯娃左馬頭父鎌田出雲守ハ其比都於郡之地頭にて候故、別而万事内外共精を入才覚忠節由聞得候、父弓詫申上候ハ、河内迄下向候大勢鹿兒島江打入可申候、今夜中御歸宅候而、大閣之前にて御切腹可然候半と申上候、其曉御立御切腹被究たると申候、一雲者野尻迄御供にて、是非庄内へ御越之由被申上候へ共被仰分、後日之事と御内談被遊候つる故、一雲者庄内へ、龍伯様者霧島越御歸着、一雲無比類申上様と取沙汰候、一雲者北郷佐渡守祖父にて候、其後御無事相調刻、一雲者大隅宮内へ被指出、石田治部少殿以參會相濟、弓詫案内者申たる由候、

一山田民部少輔父山田越前入道利安ハ、久く日向高城之地頭ニ而候、先年豊後之大友衆下向申時も籠城にて、運を開忠節候、又此京勢取巻中く大敵候へ共城を持こたへ、其後御無事ニ成、民部少輔者彌九郎ニ而未若年なから、從城美濃守殿へしち人ニ被罷出候、拙者兄式部太輔籠城申候間、右同前しち人ニ罷出候、利安ハ兩度之忠節に候、然ハ如右 龍伯様從日州御歸被成、

即川内へ御指出候へハ、皆々外城く江罷越御供衆無之、わつか曆と七十人計候、御一家ニ弓託、地頭ニ抱節、老中ニ町田出羽守入道存松、右三人迄候、伊集院之雪窓院にて 龍伯様御入道被遊、如川内御越候、雪窓院ハ 龍伯様御懷様御寺にて候、然処御こしかき申候夫丸以下方へ走失候間、伊集院之衆中八人申合、御こしをかき被申候、其跡故中く可申上様無之候、然処思召外 大閣様より御參候へと御承、於泰平寺御礼候、御供之衆ハ二王堂にて御番衆被留候、御太刀持にて河上因幡守親左近將監一人是非と申罷通、又弓託・存松・抱節三人ハ以御下知被罷通由候、大閣様御機嫌よく御礼相濟、御腰物大小・御小袖御拜領、又三人之衆へも御小袖一重つ、被下候、其時於泰平寺御人しちニ 御料人様御指出被成候、御國事薩廣 龍伯様、大隅惟新様、諸縣一郡又一郎様と御朱印御給と申候、於泰平寺父弓託御前へ度々被召出、大閣様御手前にて御茶被下被仰候ハ、弓託者龍伯此度腹をきらハ供ニ可切与存たるか、 龍伯あれニ目をよく懸よ、我者左様之時腹可切者一人も無之とて、殊外御感候、 龍伯様連々彼者ハ其心懸之者と御申上候、誠忝奉存候

277

と後々子共ニも申聞候、従日向御歸國之事も申上、川内へも御供申、一入忠節無其紛候、 龍伯様者 大閣之御供被遊、頓而御上洛トキ 惟新様ハ羈田にて御礼御申候、

『李安右ノ考』

一 按ニ、此泰平寺御供七人ト傳レトモ姓名詳ナラス、畠山式部殿ヨリ末川周山殿ニ尋ラレシトテ、末川翁ヨリ余ニ問ハレシコト先年アリシ、其時余モ糺タリ、豊臣譜ニ、 義久僧衣ニテ率侍童一人、到太平寺謁秀吉、頗加懇意、義弘・俊久・家久及家臣幸侃・平田美濃守・本田下野守・野村兵部少輔各謁見ト道春モ載セラレ、此人數七人ナレハ、七人ト云説ハ是ヨリ出ルナラン、然トモ 義弘公ハ鶴田ニテ謁シ玉、俊久ハ歳久ニテ終ニ出頭シ玉ハザル人ナリ、家久ハ野尻ニテ秀長ニ謁シテ鴛殺セラレシ人ナレハ、此御三人ヲ太平寺ノ列ニ入レルハ誤也、幸侃ト平田舜芦・本田三省・野村ハ御供ノ列ナラン、外ニ島津圖書頭忠長・喜入攝津守季久・町田出羽守久倍・伊集院下野守久治・長壽院盛淳・八木越後守昌信ナトモ謁見ノ列カ、雪窓院ニテ御剃髪ハ

天正十五年五月六日ノコトト也、其時キ忠長モ入道シテ紹璞ト改メ、后ニ紹益ト云、伊集院右衛門太夫忠棟ハ幸侃、平田美濃守光宗ハ舜廬、本田下野守親貞ハ三省、喜入季久ハ弓宅、町田久倍ハ存松、伊集院久治ハ抱節、八木昌信ハ嘉竺ト改名セシモ、多クハ皆雪窓院ニテノコトト見エルモアリ、同八日泰平寺迄御輿ヲ昇タル士ハ、安藤左近・春田主馬カ父春口土佐守・中馬十郎左衛門・市來豊前入道・大迫佐渡入道守永・上村宮内左衛門・河添千介・小田原但馬及其子源太兵衛等ト云リ、安藤・春田・春口・中馬・市來・大迫ナト、文祿五年高五石ツ、賜ヒタル由、小田原・上村・河添ナトハ目錄紛失セシト也、皆伊集院士ニテ高岡ニ移サレシト云ヘリ、又得能氏ノ譚藪筆録カニモ此時ノコトアリ、左ノ如シ、

義久公太太平寺ニテ秀吉公へ御目見ノ時ハ、雪窓院へ入ラセラレ、御剃髮トテ、黒衣ニテ山田昌岩以下十五六人御供也、義弘公其外御歴くの方ハ一人も御供なし、是萬一を危ミ給へハ、此時薩广山邊迄上方衆御迎トシテ參上也、此時ノ恥しき忘ラレザルト昌岩ノ物語也、向田邊ヨリ諸士兩邊ニヒシト相詰ラレケル中ヲ御

通、太平寺白洲ニ御拜伏有ケル時、大閤是へくト御意也、縁頬迄御進ミ時龍伯慙懣ナリ、腰ノ廻淋敷トテ自ラ帶シ玉フ備前包平・三条宗近ヲ引抜投出シ賜フ、義久公謹テ御頂戴也、扱盃出ケルニ、太閤盃コトハ酒ハ盛ルニ及バスト宣ケル、此酒ハト不審ラシキ御心不圖浮ヒケルニ、早氣ヲ付テ如此也ケルユへ、義久公今迄ノ御敵對甚御後悔ニテ、凡慮ノ及フ所ニアラスト感シ玉フ、又蒲池伊賀入道甫心ト云モノ、十三歳ヨリ日新公召附ラレ、竜伯公ノ御側ニ八十三歳迄奉公セシ者アリ、此時キ事アリテ獨ハ後レテ至リケレハ、京兵拒ミテ門を入レザリシニ、然ラバ自殺セント怒レル色ヲ見テ入レタルト、彼カ家狀ニアリ、季安按ニ、山田昌岩ハ天正十五年十歳ナレハ、豊臣譜ニ侍童一人ヲ召列ラレシコトの見得ルモ此人ナル欵、山田千代太郎ト云時ナラン、最初僧衣ニテ白洲ニ出玉フ時ハ此侍童一人ナラン、續ヒテ川上左近將監久辰御太刀ヲ持テ闕通リシナラン、其ヨリ太閤御下知アリテ、喜入弓宅・町田存松・伊集院抱節召通サレ、ソレヨリ島津忠長・伊集院忠棟・本田親貞・兵道者野村兵部少輔良綱・御陳僧長壽院盛淳・御右筆八木越後守昌信等迫々召通

サレシナラン、蒲池甫心迄御目通ニ出タル乎、其事ハ詳ナラス、イヨク出タラバ十二人ハ見得タリ、十五人トアレバ今三四人ハ知ザル也、此人衆モ御輿昇ノ安藤・春田・春口・中馬・市來・大迫・上村・河添・小田原迄二十余人ハ知レタリ、此本文ニ歴々七十人許ノ御供衆トアル内ノ人數ナラン、然アレハ七人ト云説ハ、豊臣譜ノ名ヲ數ヘテ云コト明ラケシ、取ニ足ラヌ説ナルベシ、此愚考ハ季安他書ニ稽ヘテ聊注ヲクナリ、一持明様御指出被成候ハ十七日ト御上洛日記ニアリ、御供衆伊地知右京亮・蓑輪丹波守・原田伊豆守・長谷場筑後守・古市善左衛門五人、御服帷一充木下半介御使ニテ被下、本田下野入道・平野丹後入道ハ御暇被下、右京亮・伊豆守・丹波守・筑後守四人ハ大坂迄御供トアレハ、此衆モ謁見アリシカ、又長谷場越前自記ニハ、丁亥同五月六日ニハ、関白様ノ御陳所ノ太平寺ニ爲可有御參陣云々、又文祿元年五月五日、義弘公朝鮮御渡海、初て川上肱枕ヘ爲被下御書ニモ、一各如存知常住我々地躰之事、先年、上様薩州ヘ御動座ノ時、命ヲ被助置、則ニケ國余令拜領、京都江茂一万石被下、諸士ノ中別テ辱御詞ヲ被加、殊ニ名物肩衝ヲ始種々御高

恩深重ニ候条、自然ノ折節ハ何様ニモ御奉公可申心懸ニ候処、今度依無參着、日本一ノ遅陣ニ罷成、累年ノ心カケモ無ニナリ候事、生々世々口惜次第候事云々、右通ナレハ辱御詞ヲ加ラレシハ、弓宅等ニ仰ラレシ御詞ナラン、且肩衝モ此時御拜領ナラン、又樺山紹劔自記等考ヘシルヘシ、

278

『樺山紹劔自記』

一天正十五年四月六日、京勢日州表江下着、縣・三城・美々川を戰場にして支候へ共、手合軍仕損して方々負してハ不可然候とて、彼境をも引退候之處ニ、京衆新納之高城を取巻、薩州衆も後勢待調て、一防戦ニ京都迄可相取也、薩隅日の武士衆之志不及申、同下旬関白様式拾萬余騎之勢ニ而御下向也、肥後衆御下知ニ隨故に、泉之嶋津薩摩守心替して、京衆之案内者にて河内へ御陳候而、川を渡し隈之城江おし懸る、此由日州都於郡江聞ゆ、義久様ニ今ハ別之才覚無之、向敵ニ懸合せ一命を可究とて、度々思召切子細候處ニ、老敷者共いやく河内江御參候而、天下殿江御礼御申候而可然候、大友ハ私之意趣也、夫を御助候、関白殿ニ而候、

夫敵對御申候はんや、左様ニ候得者、天下ニ向申弓を引へからすと、連く被仰候事徒ニ罷成候、唯御參候而、當御家之事者関白様任せ御申候得与、各分別有者共依申河内へ御參候、五月八日也、山東御歸ハ五月一日也、如此御歸之物音ニ、山東無約牒罷成候間、美濃守野尻を陳所ニ而候、乍去庄内・眞辛之人衆又霧嶋山を境ニ而、數日を送候様ニ扱共有て、同十九日ニ武庫様美濃守へ御參會候、廿一日又一様御上洛也、如此候而薩隅日持留罷成候間、左様之爲御禮、義久様御上洛候、國元ハ武庫様御座候而納り候、京都之取次ハ石田殿・細川幽齋、此兩人ニて何事も取合せ候、

『上野軍人覚書』

一千代太郎六歳之時ハ、天正十五年丁亥者天下猛勢差下候て、日向高城山田殿地頭所へハ、いまた目白陳・川原之陳・野久尾之陳ニ而取廻シ、相ノ垣ヲ結廻ス也、然處ニ薩摩軍勢ヲ催シ、諸大將差揃候てめしる陳ヲ詰破り候へ共、京勢之陳數廣く、猛勢ニ懸合之合戦つかれ候て、其儘軍衆被引候へハ、山田殿ハ城ヲ渡シ、御國之様ニのかれ候也、然ハ漸小林迄ヲ持こたへ候へハ、

追付岩牟礼陳ヲ付る也、西目ハ関白殿自身御下向ニ而、祁答院平佐ニ御陣ヲ召也、比ハ卯月右五月雨迄の事成ニ、今日も明日も毎日大雨ふりて水出候へハ、御家景中ノ川之渡ハなかりけり、京勢之續ク事ハ、野も山も人計とこそ云也、然ハ御家中御談合之上を以、又市様人質ニ御渡りニ而候へハ、御供ニハ新納次郎四郎始として諸士御供也、然ハ國下豊饒ニ罷成、京勢も引て被登候也、されハ某千代太郎ハ七才ニ而吉松城ニあかり候所、其六月朔日ニハ本ノ吉田へ居付申て候也、扱又関白様ノ御代ニ罷成候て、弥御軍役稱數御座候へハ、我等年少也、母ハ女之事ニ候へハ、知行受取候へ共御奉公難成之故ニ、白坂美濃守御誂望^{本ノマ}ニ而、栗野衆中ニ梶原越後守ハ川上三河守之衆中ニ、隱居人ニ御所望ニ而、千代太郎か嫡家代と定、上野越後守ニ被成かし、某七歳ニ而後ノ親子と契諾也、然ハ亦彼越後守ハ有馬ニ而、隆信亡之時ニ無比類分捕を仕候也、又武藝之方ハ諸人勝たる人也、

『勝部兵右衛門聞書』

一去程に関白殿下も三ヶ國心のみまに治、已御上洛相定

けれハ、義久の御姫・兵庫頭の嫡子又一郎久保・右馬頭の息男又四郎茂久、其外三州宗徒の大名の子とも皆人質に乞とり、於此日州諸縣の郡をハ又一郎久保ニ給りける、佐土原・都ノ郡・養尾・穂北・富田をハ中務大輔家久に給る、其外日向内飢肥・曾井・清竹を伊東修理亮に給ハる、縣・三庄・宮崎を高橋九郎に給ル、高城・高鍋・福島をハ秋月筑前守に給り、五月中旬ニ打立御歸洛有程ニ、如本肥後へ渡り肥前國を打過、筑前の國博多ニ暫く御陳扣へ給、九州の大名共何も御供仕る、於此筑前の國一國を小早川の高景被遣、筑紫の廣門をハ筑後の山下ニ輔替、柳川の主蒲池鎮村を三宅に轉替、柳川を立花の宗虎に被下ける、豊前國ニハ小寺歡兵衛尉を召置る、肥前國龍造寺・松浦・大村・有馬輩皆く本領安堵せり、肥後國ニハ求一郡ニ水俣・津奈木を相加へ相良頼房ニ被下、其外肥後の大名共少の勘忍所を被宛行、隈本にハ佐々内藏介成政を羽柴陸奥守ニ改、守護職とし國の押ニ召置る、然処ニ相良彼陸奥守を姉智ニ取、親の好ミを成故、陸奥守計ひにて八代・七浦をも相良領分とする也、如此九州略相治、六月上旬より御歸洛の御企有れハ、大名共暇こひ歸國

する者も有り、或直ニ御供にて上洛するもあり、同下旬ニ御打立目出度御入洛とぞ申ける、誠に天下の御運宜しけれハ、思圖ニも計られず、日向表の行或者往て見てあれハ先陳こそ構、普請播楯丈夫也、後陳の体こそ淺猿かりし夏共なり、如形ノ柴陳取、軍役迄ニ忝きける、此を專と持たる柏白の強陳に手當を成て打措、五千も六千も津奈貫・美見の浦へ山家の方より忍せ、横かけにかけいて、後陣を悉く切崩したらんニハ、如何ニ先陳きをいをなせとも、後陳破て落行ハ先陳も自ら乞降去落へし、或ハ又卯月・五月の雨ハいつも降といへ共、今年ハしけなく降て敵もミかたも雨ニ厭へ病を成、或ハ大河小川共ニ水増り人の通も成かたし、糧も尽飢死ニ及へる者のミなり、或ハ又縦出水表こそ破りたり共、川内を限ニ持、今一月も二月も忍支へハ、自ら敗軍すへき者をと後ニこそおもひ合せける、去程ニ義久剃髪し給ふて号龍伯入道、同六月十四日ニ鹿兒島を打立博多へ參り御供にて上洛被成ける、中務太輔家久ハ日向和談の其刻俄ニ死去し給ふ、美濃守殿計にて凶害成とぞ申ケル、其子又七郎も同く上洛申されたり、然処ニ陸奥守成政行無理非法ノ間、肥後の大名と

「阿蘇玄與入道墨齋書出」

も程なく謀叛を起し、成政を打果さんとす、依之殿下の御朱印九州の對諸侍成下さる、陸奥守依致暴政非法、肥州の諸士逆彼、可打果由被仰下、右衛門大夫忠棟も龍伯入道の御供申上上洛せしか、依此儀下國せらる、同十二月廿日に兵庫頭義弘大口ニ發向被成、軍衆を七浦迄打上せ給ふ、斯る処に相良彼陸奥守に好を成故佐と方の様にもてなし、薩广勢を八代に不通かやうのかけひきせし処ニ、中國安藝の安國寺長老嘜として差上され、一揆をも相靜和談と成、かの陸奥守を同心して上洛せられける、

一天正十五年、豊後國楠の郡野上と申城ニ而、兵庫頭様玄与を召寄御振廻候、御老中者圖書頭殿、御使者吉田美作守ニ而候、被仰聞候者、九州無殘所御手ニしたかひ候、然處ニ京勢下國候、豊前國龍王の城江ハ黒田官兵衛尉殿・淺野とのを前手として着陣之由候、府内表江ハ四國中國之兵船相着候、豊後國ニ而一戦と思召され候得共、先々薩州江御歸陳候て、御國ニ而防戦之兵儀ニ定候、日向表江ハ兵庫頭様・中書様、其外諸大

將可被成御歸陳、肥後表歸陳之軍衆ハ右馬頭殿・町田殿・樺山殿、其外新納武藏守・伊集院肥前守其外諸軍兵歸陳ニ相定候、當時九州侍共皆々豊後江在陳申、兵庫頭様御下知ニ隨ひ申候、然共肥後士共を初め九州皆々御敵ニなるへく被思召候、薩州の軍衆肥後表を無吳儀引取候ハ、御國之事別儀有間數被思召候、就夫玄與事連々無別心御覽せ被及候、此節薩摩軍勢つ、かなく御國元江引取へき才覺御頼被成候之由、愚老申上候ハ、上意のことく、肥後を始として九州御敵たるへく候、雖然玄与御味方仕候俣、御歸陳之儀御心遣有間數候、小國と申神領方八代之塚を阿と申所までハ、神領四日路程他人の知行ましらす候、諸堺目をかため、何さま此節身命をすて可抽忠心之由申上候、兵庫頭様被聞召御悅被成候、愚老江被仰聞候者、右之軍勢無事ニ薩州江打入候者御勝利たるへき由候て、御褒美之儀共候、扱者火急之時分候、明日歸陳仕候て諸堺目をかため可相調之由候、玄与伯父阿蘇宮内少輔と申者江軍兵千程相添、兵庫頭様御傍本江相殘置、則肥後江歸陳申、諸堺目下知を申候處ニ、豊後御歸陳候、されハ諸國皆々御敵ニ罷成候、然処杵山權左衛門殿其外軍

勢、阿蘇之内坂梨左近太夫と申者之城江被引籠候、彼坂梨ハ玄与一門之者候、されハ彼坂梨か城大勢ニ而取卷候、彼城江ハ樺山殿御大將ニ而方々の人衆籠り被申候、三日之間防戦、火出る程の軍候、その様子弟子丸越後守蒙粉骨存知申候、玄与被居候所ハ矢部と申所ニ而候、高知尾より美濃守殿先手の兵、其外日向山つゝ、きの者共案内者仕候て、矢部山之内鞍岡と申城江取かけ申候、玄与おとろき申候て、矢部・南郷・大野・大河など、申在所之人衆を差遣候て防かせ申候、矢部方阿蘇は大山を越二日路ニ而候故、玄与分別成り兼候處ニ、阿蘇之任人久我大藏太輔・惠良左衛門・三之宮彈正左衛門三人譜代之者ニ而候得共、俄敵心をさしハさミ、岡の城志賀左近太夫江申合、敵ニ成候由阿蘇より申來候、則村山丹波守と申者を阿蘇ハ差遣候て、右之三人則打果候、以其故阿蘇境無吳儀候、去れとも坂梨か城ハ敵大勢ニ而取卷候、然處ニ右馬頭殿・町田殿、其外新納武藏守・伊集院肥前守諸大將豊後より愚領を國と申在所江引取られ候、彼のを國は豊後筑後の境ニ而候、を國より阿蘇江者一日路ニ而候、中途を敵取切り候ま、阿蘇御引取被成かね候、玄與飛脚ニ而小國江申遣候ハ、

阿蘇江敵心之者共候し、皆々打果候、されとも坂梨か城を敵取卷候て無油断防申候、いそき阿蘇江御引取肝要之由申遣候、小國の地頭申候、北里大藏太輔江茂足輕迄茂召列、薩州江御人數御案内者仕候得与申付候、北里大藏御案内者仕候て、阿蘇の宮のちと申候て、阿蘇下宮の社頭ちかく、薩州諸大將を國より御引取く、追付敵大勢にて阿蘇宮のち御陳所江取懸申候、然るを薩州諸大將兵儀被成、敵陳へ御取掛け候、阿蘇宮内少輔下知申、阿蘇の者共一番ニ押寄候、軍きひしく候て、玄與一門の者阿蘇阿波守打死仕候、其後敵陳破申候、數百人の敵打取被成、されハ坂梨か城を攻候敵も崩申候、方々御勝利候故、薩州御軍勢ふたと申大山を御越候て、肥州國中江引取被成候、肥州の者共宇土・城・隈部・赤星・小代・三池杯御敵と成り候、されとも愚神領相續候ま、薩州御勢八代御打入候、其日宇土より隈庄城江取懸、城主宮原筑前守打果申候、町田出羽守殿方承候ハ、玄與薩州江引取候へと承候、愚老申候ハ、三ノ城をかたくこしらへ人數も五六千も有へく候、一防戦仕候て其後御國へハ參へく候、いそき御歸國候へと申候、さらハとて諸軍勢八代江歸陳候處ニ、

谷山の城御敵と成り候、芦北とほりハ肥前兵船取切り候、川畑甲斐など打死仕候、八代よりあせちをなされ求广江御着く、深水三河入道(マツ)徳病など仕候て馳走不申、武州・肥州など深水入道か宿所江御出候て、深水入道をとりこのことくにして、薩州の軍勢無恙ニ大口江御着候、然ハ肥後國中江京勢雲霞のことく打入候、愚老江淺野殿方以使承候ハ、薩州江関白様御下向候、九州皆くしたかひ候、阿蘇宮可致參陣候、いそき人數を差遣し馳走不申、然ハ神領前代之ことく可被下候御朱印御持せ候、愚老御返事ハ、忝御意候、然共神領を薩州方此内信仰ニて候し、其恩深候、鹿兒島江此段申入、其後馳走可仕候段返事申候得共、分別次第と候て薩州江御とほり候、玄與夜白城塙を拵へ人衆を集申候、たちを山をくゝり、以飛脚都の郡江茂肥州表ハ御心安かるへきよし申上、御老中より承候ハ、弥肥州表御頼之由、忝家之年寄共申候者、前代より天子江申上茂候、た、し京方仕候て忝家を殘し度由申候、愚老申候ハ、各申散尤候、去ながら野上ニ而 兵庫頭様へ申上候首尾相違候てハ、玄與事人ならず候、忝家滅亡迄ニ候、薩州方ニて可相果之由申候、左候へハ無是非由申也、

譜代之者共一味同心候、されハ 関白様御歸陣ニ八代方矢部へ京勢十人の大將ニ而、阿蘇宮御追伐として着陳候、愚老城を遠攻ニ而候し、淺野殿より承候ハ、関白様ハ箱崎江御逗留被成候、阿蘇事城を渡し候ハ、身上事仕可被成候、神領ハ前ニ御朱印返し申候ま、少も有ましき由承候、愚老存候ハ薩州御無事之上ハ、身上全候て肝要之由存候て、城を渡し可申段約束申下城仕候、玄與養子六才ニ成候を淺野殿同心して、箱崎御陳所ニ而身上無別儀相濟候、その明年御國江參候時分、譜代之者共江茂暇を遣候て大口江參着候、數十年申上度心中ながら斟酌故心中ニこめ置候、折ふしも候ハ、被備上覽候ハ、越中守ためて候、以上、

黑齋

玄與印

御老中

參

「右直本ハ、杉原のよふなる紙ニ而巻物也」

282

「忠元譜中」

天正十五年丁亥三月十五日イニ野上發府内、忠元聞豊衆岡・志賀氏等陳于坂梨以逃歸路、二十六日、忠元及町田出羽守久

倍・伊集院久春子源左衛門謀、遣家臣田中藏之丞、夜窺
陣營「イニ打言余」曉戰于宮路破敵救之、坂梨城一本切頭城將桂神祇・大野

治少・樺山太郎二郎・大野久高及球麻人犬童美作守休意

・子稻富軍七將監等得力退去、四月五日發坂中、忠元戍

隈本、新納右衛門成合志、城久春戍津守、右馬頭戍八城、

過三船城次于關城、時松浦筑前守取谷山城、堅志田亦叛、

乃十三日遣士卒追之、松浦遁匿山中、又聞肥前衆陣于尾

牟田、忠元・久春破之還于關城、「イニ十七日忠元・久春攻谷山城、破近藤博國城」十七日忠元及桂山城守

忠助取質於八代、十八日俟月出發八代、二十日至球麻人

吉、十九日京兵入八代、自阿世知遣歸質人、聞深水稱疾

將叛、乃忠元率兵三百如人吉城、面晤深水告別、深水送

至球麻川、二十一日至大口城、二十五日太閤聞秀長既克、

着舟出水陣泰平寺、

丁亥四月十七日根白坂不利、忠隣死之、貫明公退于都

於郡、羽柴秀長遣僧木食興山・一色駿河守昭秀等、說和

降、二十一日 公乃使伊集院忠棟・平田增宗、往質于羽

柴營、因高城亦降、五月二日「朔日十七」公發都於郡歸鹿兒島、

松齡公歸于飯野、六日入雪窓院剃髮、八日出泰平寺、九

日賜薩、十八日太閤自泰平寺入平佐城、十九日義弘公謁

秀長於野尻城、遣赤塚三右・佐谷田覺右、往質于桑山匠